

千曲川のスケッチ

島崎藤村

青空文庫

序

敬愛する吉村さん——樹しげるさん——私は今、序にかえて君に宛あてた一文をこの書のはじめに記しるすにつけても、矢張やっぱり呼び慣れたように君の親しい名を呼びたい。私は多年心掛けて君に呈したいと思つていたその山上生活の記念を漸ようやく今纏まとめることが出来た。

樹さん、君と私との縁故も深く久しい。私は君の生れない前から君の家にまだ少年の身を托たくして、君が生れてからは幼い時の君を抱き、君をわが背に乗せて歩きました。君が日本橋ひさまつちよう久松町ひさまつちようの小学校へ通われる頃は、私は白しろ金かねの明治学院へ通つた。君と

私とは殆んど兄弟のようにして成長して来た。私が木曾の姉の家に一夏を送った時には君をも伴った。その時がたしか君に取つての初旅であつたと覚えている。私は信州の小諸こもろで家を持つようになつてから、二夏ほどあの山の上で妻と共に君を迎えた。その時の君は早や中学を卒おえようとするほどの立派な青年であつた。君は一夏はお父さんを伴つて来られ、一夏は君独ひとりで来られた。この書の中にある小諸城じょうし址しの附近、中なか棚だ温泉、浅間一帯の傾斜の地などは君の記憶にも親しいものがあるうと思う。私は序のかわりとしてこれを君に宛てるばかりでなく、この書の全部を君に宛てて書いた。山の上に住んだ時の私からまだ中学の制服を着けていた頃の君へ。これが私には一番自然なことで、又たあの当時

の生活の一番好い記念に成るような心こころもち地ちがする。

「もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか」

これは私が都会の空気の中から脱け出して、あの山国へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種いろいろ々なことを学んだ。田舎教師いなかとしての私は小諸義塾で町の商人や旧士族やそれから百姓の子弟を教えるのが勤めであつたけれども、一方から言えば私は学校の小使からも生徒の父兄からも学んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式えらを捉ぶように成つた。この書の主なる土台おもと成つたものは三四年間ばかり地方に黙していた時の印象である。

樹さん、君のお父さんも最早居もない人だし、私の妻も居ない。

私が山から下りて来てから今日までの月日は君や私の生活のさまを変えた。しかし七年間の小諸生活は私に取つて一生忘れることの出来ないものだ。今でも私は千曲川ちくまがわの川上から川下までを生きいき々々きいきと眼の前に見ることが出来る。あの浅間の麓ふもとの岩石の多い傾斜のところかに身を置くような気がする。あの土のにおいを嗅ぐような気がする。私がつぎつぎに公けにした「破戒」、か「緑葉集」、それから「藤村集」と「家」の一部、最近の短篇なぞ、私の書いたものをよく読んでいてくれる君は何程私がああの山の上から深い感化を受けたかかを知らるるであろうと思う。このスケッチの中で知友神津猛君こうづたけしが住む山村の附近を君に紹介しなかつたのは遺憾である。私はこれまで特に若い読者のために書いたことも無かつ

たが、この書はいくらかそんな積りで著^{あらわ}した。寂しく地方に住む人達のためにも、この書がいくらかの慰めに成らばなぞとも思う。

大正元年 冬

藤村

その一

学生の家

地久節には、私は二三の同僚と一緒に、御牧ヶ原みまき はらの方へ山遊びに出掛けた。松林の間などを猟師のように歩いて、小松の多い岡の上では大分蕨わらびを採った。それから鴉ときくぼ窪くぼという村へ引返して、田舎の中の田舎とでも言うべきところで半日を送った。

私は今、小諸の城址しろあとに近いところの学校で、君の同年位な学生

を教えている。君はこういう山の上への春がいかに待たれて、そしていかに短いものであると思う。四月の二十日頃に成らなければ、花が咲かない。梅も桜も李も殆んど同時に開く。城址の懷かいこば、えん古園には二十五日に祭があるが、その頃が花の盛りだ。すると、毎年きまりのように風雨がやって来て、一時いちじきにすべての花を浚さらつて行つて了しまう。私達の教室は八重桜の樹でいによう囿繞ようされていて、三週間ばかり前には、丁度花束のように密集したやつが教室の窓に近く咲き乱れた。休みの時間に出て見ると、濃い花の影が私達の顔にまで映った。学生等はその下を遊び廻まわつて戯あそべた。殊ことに小學校から来たての若い生徒と来たら、あつちの樹に隠れたり、こつちの枝につかまったり、まるで小鳥のように。どうだろう、そ

れが最早もすつかり初夏の光景に変わつて了つた。一週間前、私は昼の弁当を食つた後、四五人の学生と一緒に懐古園へ行つて見た。荒廢した、高い石垣の間は、新緑で埋うれてずいた。

私の教えている生徒は小諸町の青年ばかりでは無い。平原ひらはら、

小原こはら、山浦、大久保、西原、滋野しげの、その他小諸附近に散在する村

落から、一里も二里もあるところを歩いて通つて来る。こういう学生は多く農家の青年だ。学校の日課が済むと、彼等は各自めいめいの

家路を指して、松林の間を通り鉄道の線路に添い、あるいは千ちくま

曲川がわの岸に随ついて、蛙かわずの声などを聞きながら帰つて行く。山浦、

大久保は対岸にある村々だ。牛蒡ごぼう、人にんじん参などの好い野菜を出す

土地だ。滋野きたさくは北佐久の領分でなく、小ちいさ県がたの傾斜にある農村

で、その附近の村々から通つて来る学生も多い。

ここでは男女なんによが烈はげしく労働する。君のように都会で学んでい
る人は、養蚕休みなどということを知るまい。外国の田舎にも、
小麦の産地などでは、学校に収と穫り休みというものがあるとか。
何かの本でそんなことを読んだことがあつた。私達の養蚕休みは、
それに似たようなものだろう。多忙いそがしい時季が来ると、学生でも
家の手伝いをしなければ成らない。彼等は又、少年の時からそう
いう労働の手助けによく慣らされている。

Sという学生は小原村から通つて来る。ある日、私はSの家を
訪ねることを約束した。私は小原のような村が好きだ。そこには
生々とした樹蔭こかげが多いから。それに、小諸からその村へ通う畠はたけの

間の平かな道も好きだ。

私は盛んな青麦の香を嗅ぎながら出掛けて行つた。右にも左にも麦畠がある。風が来ると、緑の波のように動揺する。その間には、麦の穂の白く光るのが見える。こういう田舎道を歩いて行きながら、深い谷底の方で起る蛙の声を聞くと、妙に私は押しつけられるような心こころもち持もちに成る。可怖おそろしい繁殖おその声。知らない不思議な生物の世界は、活気づいた感覚を通して、時々私達の心へ伝わつて来る。

近頃Sの家では牛乳屋を始めた。可成かなり大きな百姓で父も兄も土地では人望がある。こういう田舎へ来ると七人や八人の家族を見ることは別にめずらしくない。十人、十五人の大きな家族さえあ

る。Sの家では年寄から子供まで、田舎風に慇懃いんぎんな家族の人達が私の心を惹ひいた。

君は農家を訪れたことがあるか。入口の庭が広く取つてあつて、台所の側わきから直じかに裏口へ通り抜けられる。家の建物の前に、幾坪かの土間のあることも、農家の特色だ。この家の土間は葡萄ぶどう棚などななに続いて、その横に牛小屋が作つてある。三頭ちちうばかりの乳牛しが飼かわれている。

Sの兄は大きなバケツを提さげて、牛小屋の方から出て来た。戸口のところには、Sが母と二人で腰を曲かめて、新鮮な牛乳を鑊びんづ詰めにする仕度したくをした。暫しばらく時、私は立たつて眺ながめていた。

やがて私は牛小屋の前で、Sの兄から種いろ々な話を聞いた。牛

の性質によつて温順おとなしく乳を搾しぼらせるのもあれば、それを惜むのもある。アバれるやつ、沈着おちついたやつ、いろいろある。牛は又、非常に鋭敏な耳を持つもので、足音で主人を判別する。こんな話が出た後で私はこういう乳牛を休養させる為に西にしの入いりの牧場まきばなどが設けてあることを聞いた。

晩の乳を配達する用意が出来た。Sの兄は小諸を指して出掛けた。

鉄砲虫

この山の上で、私はよく光沢つやけの無い茶色な髪の娘に逢う。どう

かすると、灰色に近いものもある。草葺くさぶきの小屋の前や、桑くわばた畠けの多い石垣の側などに、そういう娘が立っているさまは、いかにも荒い土地の生活を思わせる。

「小さな御百姓なんつものは、春秋働いて、冬に成ればそれを食うだけのものでごわす。まるで鉄砲虫——食っては抜け、食っては抜け——」

学校の小使が私にこんなことを言った。

えぼしさんろく
烏帽子山麓の牧場

水彩画家B君は欧米を漫遊して帰った後、故郷の根津村に画室

を新築した。以前、私達の学校へは同じ水彩画家のM君が教えに来てくれていたが、M君は沢山信州の風景を描いて、一年ばかりで東京の方へ帰って行つた。今ではB君がその後をうけて生徒に画学を教えている。B君は製作の余暇に、毎週根津村から小諸まで通つて来る。

土曜日に、私はこの画家を訪ねるつもりで、小諸から田中まで汽車に乗つて、それから一里ばかりちいさがた小 県の傾斜を上つた。

根津村には私達の学校を卒業したOという青年が居る。Oは兵学校の試験を受けたいと言つているが、最早もう一人前の農夫として恥しからぬ位だ。私はその家へも寄つて、Oの母や姉に逢つた。Oの母は肥満した、大きな体格の婦人で、赤い艶つやつや々とした頬ほおの

色なぞが素樸そぼくな快感を与える。一体千曲川の沿岸では女がよく働したく、随したがつて気象も強い。恐らく、これは都会の婦人ばかり見慣れた君なぞの想像もつかないことだろう。私は又、この土地で、野蛮な感じのする女に遭遇であうこともある。Oの母にはそんな荒々しさが無い。何しろこの婦人は驚くべき強健な体格だ。Oの姉も労働に慣れた女らしい手を有もつていた。

私はB君や、B君の隣家となりの主人に誘われて、根津村を見て廻つた。隣家の主人はB君が小学校時代からの友達であるという。パノラマのような風光は、この大傾斜から擅ほしいままに望むことが出来た。遠く谷底の方に、千曲川の流れて行くのも見えた。

私達は村はずれの田圃道たんぼみちを通つて、ドロ柳の若葉のかげへ出

た。谷川には鬼^{おに}芹^{ぜり}などの毒草が茂っていた。小山の裾^{すそ}を選んで、三人とも草の上に足を投出した。そこでB君の友達は提^さげて来た焼^{しょう}酎^{ちゆう}を取出した。この草の上の酒盛の前を、時々若い女の連^{つれ}が通った。草刈に行く人達だ。

B君の友達は思出したように、

「君とここで鉄砲打ちに来て、半日飲んでいたっけナ」

と言うと、B君も同じように洋行以前のことを思出したらしい調子で、

「もう五年前だ——」

と答えた。B君は写生帳を取出して、灰色なドロ口柳の幹、風に動くそのやわらかい若葉などを写し写し話した。一寸^{ちよつと}散歩に出

るにも、この画家は写生帳を離さなかつた。

翌日は、私はB君と二人ぎりで、烏帽子ヶ岳ふもとの麓を指して出掛けた。私が牧場まきばのことを尋ねたら、B君も写生かたがた一緒にこうと言出したので、到頭私は一晩厄介に成つた。尤ももつと、この村から牧場のあるところへは、更に一里半ばかり上らなければ成らない。案内なしに、私などの行かれる場処では無かつた。

夏山——山やませきれい鶴つる——こういう言葉を聞いただけでも、君は私

達の進んで行く山道を想像するだろう。「のっぺい」と称する土は乾いていて灰のよう。それを踏んで雑木林の間にあるひとすじ一条の細道を分けて行くと、黄勝なすずしい若葉のかけで、私達は旅の商人に逢つた。

更に山深く進んだ。山鳩などが啼ないていた。B君は歩きながら飛驒ひだの旅の話を始めて、十一という鳥を聞いた時の淋さびしかったことを言出した。「十一……十一……十一……」とB君は段々声を細くして、谷を渡って行く鳥の啼声を真似まねて聞かせた。そのうちに、私達はある岡の上へ出て来た。

君、白い鈴のように垂下かれんった可憐な草花の一面に咲いた初夏の光に満ちた岡の上を想像したまえ。私達は、あの香気かおりの高い谷の百合ゆりがこんなに生はえている場所があらうとは思ひもよらなかつた。B君は西洋でこの花のことを聞いて来て、北海道とか浅間山脈とかにあるとは知っていたが、なにしろあまり沢山あるので終しまいには採る気もなかつた。二人とも足を投出して草の中に寝転ねころんだ。ま

るで花の臥床しとねだ。谷の百合は一名を君影草きみかげそうとも言つて、「幸福の帰来」を意味するなどと、花好きなB君が話した。

話の面白い美術家と一緒に、牧場へ行き着くまで、私は倦むうことを知らなかった。岡の上には到るところに躑躅つづじの花が咲いていた。この花は牛が食わない為に、それでこう繁茂しているという。

一周すれば二里あまりもあるという広々とした高原の一部が私達の眼にあつた。牛の群が見える。何と思つたか、私達の方を眼め掛けて突進してくる牛もある。こうして放し飼にしてある牛の群の側を通るのは、慣れない私には気味悪く思われた。私達は牧夫の住んでいる方へと急いだ。

番小屋は谷を下りたところにあつた。そこへ行く前に沢の流れ

に飲んでいる小牛、蕨わらびを採とっている子供などに逢あった。牛が来て戸や障子突き破るとかで、小屋の周囲まわりには柵さくが作つくつてある。年をとった牧夫が住んでいた。僅わずかばかりの瘦やせた畑もこの老爺ろうやが作るらしかった。破れた屋根の下で、牧夫は私達の為に湯を沸かしたり、茶を入れたりしてくれた。

壁には鋸のこぎり、鉈なた、鎌かまの類を入れた「山猫」というものが掛けてあった。こんな山の中までよく訪ねて来てくれたという顔付で、牧夫は私達に牛飼の経験などを語り、この牧場の管理人から月に十円の手宛てあてを貰もらっていることや、自分は他の牧場からこの西にしの入いりの沢へ移うつつて来たものであることなどを話した。牛は角がかゆい、それでこすりつけるようにして、物を破壊こわして困るとか言った。

今は草も短く、少いから、草を食い食い進むという話もあった。

牧夫は一寸考えて、見えなくなつた牛のことを言出した。あの山やまあい間の深い沢を、山の湯の方へ行つたかと思う、とも言つた。

「十二、あの沢は裾まで下りるなんてものじゃねえ。柳の葉でもこいて食つてら」

こう復た考まえ直したように、その牛のことを言つた。

間もなく私達は牧夫に伴われて、この番小屋を出た。牧夫は、多くの牛が待っているという顔付で、手に塩を提げて行つた。途みち次私達ちみちに向つて、「この牧場は芝草ですから、牛の為に好いです」とか「今は木が低いから、夏はいきれていけません」とか、種いろいろ々な事を言つて聞かせた。

ここへ来て見ると、人と牛との生涯が殆んど混り合っているか
のようである。この老爺は、牛が塩を嘗めて清水を飲みさえすれ
ば、病も癒えるということまで知悉していた。月経期の牝牛の
鳴声まで聞き分ける耳を持っていた。

アケビの花の紫色に咲いている谷を越して、復た私達は牛の群
の見えるところへ出た。牧夫が近づいて塩を与えると、黒い小牛
が先ず耳を振りながらやって来た。つづいて、額の広い、目付の
愛らしい赤牛や、首の長い斑なぞがぞろぞろやって来て、「御馳
走」と言わないばかりに頭を振ったり尻尾を振ったりしながら、
塩の方へ近づいた。牧夫は私達に、牛もここへ来たばかりには、
家を懐しがすが、二日も経てば慣れて、強い牛は強い牛と集り、

弱い牛は弱い牛と組を立てるなどと話した。向うの傾斜の方には、
臥ねたり起きたりして遊んでいる牛の群も見える……

この牧場では月々五十銭ずつで諸ほうぼう方の持主から牝牛を預つて
いる。そういう牝牛が今五十頭ばかり居る。種牛は一頭置いてあ
る。牧夫が勤めの主なるものは、牛の繁殖を監督することであつ
た。礼を言つて、私達はこの番人に別れた。

その二

青麦の熟する時

学校の小使は面白い男で、私に種々いろいろな話をしてくれる。この男は小使のかたわら、自分の家では小作を作っている。それは主に年老いた父と、弟とがやっている。純小作人の家族だ。学校の日課が終つて、小使が教室々々の掃除をする頃には、頬ほおの紅い彼の妻が子供を背負おぶつてやって来て、夫の手伝いをするこゝもある。

学校の教師仲間の家でも、いくらか畠のあるところへは、この男が行つて野菜の手入をして遣る。校長の家では毎年可成な農家ほどに野菜を作つた。燕からすむぎ 麦なども作つた。休みの時間に成ると、私はこの小使をつかまえては、耕作の話を書いてみる。

私達の教員室は旧士族の屋敷跡に近くて、松林を隔てて深い谷底を流れる千曲川ちくまがわの音を聞くことが出来る。その部屋はある教室の階上にあつて、一方に幹事室、一方に校長室と接して、二階の一隅ぐうを占めている。窓は四つある。その一方の窓からは、群立した松林、校長の家の草屋根などが見える。一方の窓からは、起伏した浅い谷、桑くわばたけ 畠たけやぶ、竹藪などが見える。遠い山々の一部分も望まれる。

粗末ではあるが眺望ちようぼうの好き、その窓の一つに倚りながら、私は小使から六月の豆蒔まめまきの労苦を聞いた。地を鋤くもの、豆を蒔くもの、肥料を施すもの、土をかけるもの、こう四人でやるが土は焼けて火のように成っている、素足で豆蒔は出来かねる、草鞋わらじを穿はいて漸ようやくそれをやるという。小使は又、麦作の話をしてくれた。麦一ツカ——九十坪に、粉糠こな一斗の肥料を要するとか。それには大麦の殻と、刈草とを腐らして、粉糠を混ぜて、麦畠に撒まくという。麦は矢張小作の年貢ねんぐの中に入って、夏の豆、蕎麦そばなどが百姓の利得に成るとのことであつた。

南風が吹けば浅間山の雪が溶け、西風が吹けば畠の青麦が熟する。これは小使の私に話したことだ。そう言えば、なまぬるい、

微かすかな西風が私達の顔を撫なでて、窓の外を通る時候に成つて来た。

少年の群

学校の帰かえり路みちに、鉄道の踏切を越えた石垣の下のところで、私は少年の群に逢つた。色の黒い、二本棒の下つた、藁わら草履ぞうりを穿はいた子供等で、中には素足のまま土を踏んでいるものもある。

「野郎」、「この野郎」、と互に顔を引搔ひっかきながら、相撲すもうを取つて遊んでいた。

何処どこの子供も一種の俳優やくしやだ。私という見物がそこに立つて眺ながめると、彼等は一層調子づいた。これ見よがしに危い石垣の上へ

登るのもあれば、「怪我しるぞ」と下に居て呼ぶのもある。その中で、なりりのなりりの小さな子供に何歳いくつに成るかと聞いてみた。

「おら、五歳いっつ」とその子供が答えた。

水車小屋の向うの方で、他の少年の群らしい声がした。そこに遊んでいた子供の中には、それを聞きつけて、急に馳出かけだすのもあった。

「来ねえか、この野郎——ホラ、手を引かれろ」

ときすがに兄らしいのが、年とし下の子供の手を助けるように引いた。

「やい、米でも食くらえ」

こんなことを言つて、いきなり其処そこにある草をむしつて、朋輩ほうばい

の口の中へ捻ねじ込むのもあつた。

すると、片かた方っぽうも黙つてはいない。覚えておれと言わなければ

かりに、「この野郎」と叫んだ。

「畜生！」一方は軽けい蔑べつした調子で。

「ナニ？ この野郎」片方は石を拾つて投げつける。

「いやだいやだ」

と笑いながら逃げて行く子供を、片方は棒を持って追馳おっかけた。

乳呑児ちのみごを背負おぶつたまま、その後を追つて行くのもあつた。

君、こういう光景ありさまを私は学校の往ゆき還かえりに毎日のように目撃

する。どうかすると、大人が子供をめがけて、石を振上げて、

「野郎——殺してくれるぞ」などと戯れるのを見ることもある。

これが、君、大人と子供の間^にに極く無邪氣に、笑いながら^{とりかわ}交換される言葉である。

東京の下町の空気の中に成長した君なぞに、この光景^{ありさま}を見せたら、何と云うだろう。野蛮に相違ない。しかし、君、その野蛮は、疲れた旅人の官能に活気と刺戟^{しげき}とを与えるような性質のものだ。

麦畠

青い野面^{のら}には蒸すような光が満ちている。彼方^{あち}此方^{こち}の畠側^{わき}にある樹木も活々^{いきいき}とした新葉を着けている。雲雀^{ひばり}、雀^{すずめ}の鳴声に混つ

て、鋭いヨシキリの声も聞える。

火山の麓にある大傾斜を耕して作ったこの辺の田畠たはたはすべて石垣によつて支えられる。その石垣は今は雑草の葉で飾られる時である。石垣と共に多いのは、柿の樹だ。黄勝きがちな、透明な、柿の若葉のかげを通るのも心地が好い。

小諸はこの傾斜に添ほつこくうて、北国街道の両側に細長く発達した

町だ。本町ほんまち、荒町あらまちは光岳寺を境にして左右に曲折した、主おもな

る商家のあるところだが、その両端に市町いちまち、与良町よらまちが続いてい

る。私は本町の裏手から停車場と共に開けた相生町あいおいちようの道路を

横ぎり、古い土族屋敷の残った袋町ふくろまちを通りぬけて、田圃側たんぼわき

の細道へ出た。そこまで行くと、荒町、与良町と続いた家々の屋

根が町の全景の一部を望むように見られる。白壁、土壁は青葉に埋れていた。

田圃側の草の上には、土だらけの足を投出して、あおのけさまに寝ている働き^{つか}勞れたらしい男があつた。青麦の穂は黄^{こうりよく}緑に熟しかけていて、大根の花の白く咲き乱れたのも見える。私は石垣や草土手の間を通つて石^{いしころ}塊の多い細道を歩いて行つた。そのうちに与良町に近い麦畠の中へ出て来た。

若い鷹^{たか}は私の頭の上に舞つていた。私はある草の生えた場所を選んで、土のおいなどを嗅^かぎながら、そこに寝そべつた。水蒸気を含んだ風が吹いて来ると、麦の穂と穂が擦^すれ合つて、私語^{ささや}くような音をさせる。その間には、畠に出て「サク」を切っている

百姓の鍬くわの音もする……耳を澄ますと、谷底の方へ落ちて行く細い水の響も伝わって来る。その響の中に、私は流れる砂を想像してみた。しばらく私はその音を聞いていた。しかし、私は野鼠のように、独ひとりでそう長く草の中には居られない。乳色に曇りながら光る空などは、私の心を疲れさせた。自然は、私に取っては、どうしても長く熟視みめていられないようなものだ……どうかすると逃げて帰りたく成るようなものだ。

で、復また私は起き上った。微なまぬる温い風が麦畠を渡って来ると、私の髪の毛は額へ掩おおい冠かぶさるように成った。復た帽子を冠かぶって、歩き廻まわった。

畠の間には遊んでいる子供もあつた。手てっこう甲をはめ、浅黄あさぎの襷たすき

を掛け、腕をあらわにして、働いている女もあつた。草土手の上に寝かされた乳呑児が、急に眼を覚まして泣出すと、若い母は鍬を置いて、その児の方へ馳けて来た。そして、畠中で、大きな乳房の垂下つた懐ふところをさぐらせた。私は無心な絵を見る心地こころがして、しばらくそこに立つて、この母子おやこの方を眺ながめていた。草土手の雑草を刈取つてそれを背負つて行く老婆もあつた。

与良町の裏手で、私は畠に出て働いているK君に逢つた。K君は背の低い、快活な調子の人で、若い細君を迎えたばかりであつたが、行く行くは新時代の小諸を形造る壮年わかものの一人として、土地のものに望を囑まねされている。こういう人が、畠を耕していると、いうことも面白く思う。

胡麻塩頭ごましおあたまで、目が凹くぼんで、鼻たかの隆い、節々のあらわれたような大きな手を持った隠居が、私達の前を挨拶あいさつして通つた。腰には角つの根つけの付いた、大きな煙草入をぶらさげていた。K君はその隠居を指して、この辺で第一の老農であると私に言つて聞かせた。隠居は、何か思い付いたように、私達の方を振返つて、白い短い髭ひげを見せた。

肥桶こやしおけを担かついだ男も畠の向を通つた。K君はその男の方をも私に指して見せて、あの桶の底には必きつと葱ねぎなどの盗んだのが入つている、と笑いながら言つた。それから、私は髪あかしらがの赤白髪な、眼の色も灰色を帯びた、酒好らしい赤ら顔の農夫にも逢つた。

古城の初夏

私の同僚に理学士が居る。物理、化学などを受持っている。

学校の日課が終った頃、私はこの年老いた学士の教室の側を通った。戸口に立って眺めると、学士も授業を済ましたところであったが、まだ机の前に立って何か生徒等に説明していた。机の上には、大理石の屑くず、塩酸の壇びん、コップ、玻璃管ガラスくだなどが置いてあった。蠟燭ろうそくの火も燃えていた。学士は、手にしたコップをすこし傾かしげて見せた。炭素はその玻璃板の蓋ふたの間から流れた。蠟燭の火は水を注ぎかけられたように消えた。

無邪気な学生等は学士の机の周囲まわりに集って、口を開いたり、眼

を円くしたりして眺めていた。微笑むもの、腕組するもの、頬ほおづ杖え突くもの、種々雑多の様子をしていた。そのコップの中へ鳥ねずみか鼠ねずみを入れると直すぐに死ぬと聞いて、生徒の一人がすつくと立上った。

「先生、虫じやいけませんか」

「ええ、虫は鳥などのように酸素を欲しがりませんからナ」

問をかけた生徒は、つと教室を離れたかと思うと、やがて彼の姿が窓の外の桃の樹の側にあらわれた。

「アア、虫を取りに行つた」

と窓の方を見る生徒もある。庭に出た青年は茂つた桜の枝の陰を尋ね廻っていたが、間もなく何か捕つかえて戻つて来た。それを学

士にすすめた。

「蜂はちですか」と学士は気味悪そうに言った。

「ア、怒ってる——螫さすぞ螫さすぞ」

口々に言い騒いでいる生徒の前で、学士は身を反そらして、螫さされまいとする様子をした。その蜂をコツプの中へ入れた時は、生徒等は意味もなく笑った。「死んだ、死んだ」と言うものもあれば、「弱い奴」というものもある。蜂は真理を証あげようかのように、コツプの中でグルグル廻まって、身を悶もだえて、死んだ。

「最早もうマイりましたかね」

と学士も笑った。

その日は、校長はじめ、他の同僚も懐古園かいこえんの方へ弓をひきに

出掛けた。あの緑蔭には、同志の者が集つて十五間ばかりの矢場を造つてある。私も学士に誘われて、学校から直に城址じかしろあとの方へ行くことにした。

はじめて私が学士に逢つた時は、唯ただこんな田舎へ来て隠れている年をとつた学者と思つただけで、そう親しく成ろうとは思わなかつた。私達は——三人の同僚を除いては、皆な旅の鳥で、その中でも学士は幾多の辛酸を嘗め尽して来たような人である。服装みなりなぞに極く関かまわらない、授業に熱心な人で、どうかすると白墨で汚れた古洋服を碌ろくに払わずに着ているという風だから、最初のうちは町の人からも疎うとんぜられた。服装と月給とで人間の価値ねうちを定めたるのは、普通一般の人の相場だ。しかし生徒の父兄達も、次

第に学士の親切な、正直な、尊い性質を認めないわけに行かなかつた。これ程何もかも外部へ露出した人を、私もあまり見たことが無い。何時の間にか私はこの老学士と仲好に成つて自分の身内からでも聞くように、その制えきれないような嘆息や、内に憤る声までも聞くように成つた。

私達は揃つて出掛けた。学士の口からは、時々軽い仏蘭西語なぞが流れて来る。それを聞く度に、私は学士の華やかな過去を思いやつた。学士は又、そんな関わない風采の中にも、何処か往時の瀟洒なところを失わないような人である。その胸にはネキタイが面白く結ばれて、どうかすると見慣れない襟留なぞが光ることがある。それを見ると、私は子供のよう^{ふきだ}に噴飯したくな

る。

白い黄ばんだ柿の花は最早到る処に落ちて、香氣を放っていた。

学士は弓の袋や、クスネの類を入れた鞆かばんを提げて歩きながら、

「ねえ、実はこういう話サ。私共の二番目の倅せがれが、あれで子供仲

間じやナカナカ相撲すもうが取れるんですトサ。此こないだ頃もネ、弓の弦つるを

褒美ほうびに貰つて来ましたがネ、相撲の方の名が可笑おかしいんですよ。

何だツて聞きましたらネ——沖の鮫さめ」

私は笑わずにいられなかつた。学士も笑を制えかねるといふ風
で、

「兄のやつも名前が有るんですよ。貴様は何とつけたと聞きましたら、父さんが弓が御好きだから、よく当るように矢当りとつけ

ましたトサ。ええ、矢当りサ。子供というものは可笑しなものですネ」

こういう阿爺おとっさんらしい話を聞きながら古い城門の前あたりまで行くと馬に乗った医者が私達に挨拶して通った。

学士は見送つて、

「あの先生も、鶏に、馬に、小鳥に、朝顔——何でもやる人ですナ。菊の頃には菊を作るし、よく何処の田舎にも一人位はああいふ御医者で奇人が有るもんです。『なアに他の奴等は、ありや医者じゃねえ、薬売りだ、とても話せない』なんて、エライ気焰きえんサ。でも、面白い気象の人で、在へでも行くと、薬代がなけりや畠の物でも何でもいいや、葱ねぎが出来たら提げて来い位に言うものです

から、百姓仲間には非常に受が好い……」

奇人はこの医者ばかりでは無い。旧士族で、閑散な日を送りかねて、千曲川へ釣つりに行く隠士風の人もあれば、姉と二人ぎり城門かたわらの傍に住んで、懐古園の方へ水を運んだり、役場の手伝いをしてりしている人もある。旧士族には奇人が多い。時世が、彼等を奇人にしてしま了った。

もし君がこのあたりの士族屋敷の跡を通つて、荒廢した土塀どべい、礎いしばかり残つた桑畠いしなどを見、離散した多くの家族の可傷いたましい歴史を聞き、振返つて本町、荒町の方に町人の繁はん昌じようを望むなら、「時」の歩いた恐るべき足跡を思わずにいられなからう。しかし他の土地へ行つて、頭角あらかわを顕あらわすような新しい人物は、大抵教育の

ある士族の子孫だともいう。

今、弓を提げて破壊された城址しろあとの坂道を上つて行く学士も、あの藩の士族だ。校長は、江戸の御家人とかだ。休職の憲兵大尉で、学校の幹事と、漢学の教師とを兼ねている先生は、小諸藩の人だ。学士などは十九歳で戦争に出たこともあるとか。

私はこの古城址こじょうしに遊んで、君なぞの思いもよらないような風景を望んだ。それは茂った青葉のかげから、遠く白い山々を望む美しさだ。日本アルプスの谿たにだに々の雪は、ここから白壁を望むように見える。

懐古園内の藤、木蘭もくれん、躑躅つつじ、牡丹ぼたんなどは一時花と花とが映り合つて盛んな香気を発したが、今では最早濃い新緑の香に変つて

了った。千曲川は天主台の上まで登らなければ見られない。谷の深さは、それだけでも想像されよう。海のような浅間一帯の大傾斜は、その黒ずんだ松の樹の下へ行つて、一線に六月の空に横よこたわる光景さまが見られる。既に君に話した烏帽子山麓の牧場、B君の住む根津村などは見えないまでも、そこから松林の向に指すことができる。私達の矢場を掩けう檜やきかえで、楓の緑も、その高い石垣の上から目の下に瞰みおろ下すことが出来る。

境内には見晴しの好い茶屋がある。そこに預けて置いた弓の道具を取出して、私は学士と一緒に苔蒸こけむした石段を下りた。静かな矢場には、学校の仲間以外の顔も見えた。

「そもそも大弓を始めてから明日で一年に成ります」

「一年の御稽古けいこでも、しばらく休んでいると、まるで当らない。

なんだか串談じょうだんのようですナ」

「こりや驚いた。尺二しゃくにですぜ。しつかり御頼申おたのもうしますぜ」

「ボツン」

「そうはいかない——」

こんな話が、強弓ごうきゆうをひく漢学の先生や、体操の教師などの間に起る。理学士は一番弱い弓をひいたが、熱心でよく当った。

古城址といえ、全く人の住まないところのように君には想像されたろう。私は残った城門かたわらの傍にある門番と、園内の茶屋とを君に紹介した。まだその外に、鶏かを養う人なぞも住んでいる。この人は病身で、無聊ぶりように苦むところから、私達の矢場の方へ遊び

に来る。そして、私達の弓が揃って引絞られたり、矢の羽が頬を摺すつたりする後方うしろに居て、奇警な批評を浴せかける。戯れに、

「どうぞです。先生、もう弓も飽いたから——貴様、この矢場で、鳥でも飼え、なんと来た日にやあ、それこそ此方こつちのものだ……しかしこの弓は、永代えいたい続きそうだテ」こんなことを言つて混返まぜかえすので、折角入れた力が抜けて、弓もひけないものが有つた。

小諸へ来て隠れた学士に取つて、この緑蔭は更に奥の方の隠れ家のように見えた。愛蔵する鷹の羽の矢が揃つて白い的の方へ走る間、学士はすべてを忘れるように見えた。

急に、熱い雨が落ちて来た。雷らいの音も聞えた。浅間は麓まで隠れて、灰色に煙るように見えた。いくつかの雲の群は風に送られ

て、私達の頭の上を山の方へと動いた。雨は通過ぎたかと思うと復急またに落ちて来た。「いよいよ本物かな」と言つて、学士は新しく自分で張つた七寸的まとを取除とりはずしに行つた。

城址の桑畠には、雨に濡ぬれながら働いている人々もあつた。皆なで雲行を眺めていると、初夏らしい日の光が遽にわかに青葉を通して射して来た。弓仲間は勇んで一手ずつ射はじめた。やがて復たザアと降つて来た。到頭一同は断念して、茶屋の方へ引揚ひきあげた。

私が学士と一緒に高い荒廃した石垣の下を帰つて行く途中、東の空に深い色の虹にじを見た。実に、学士はユツクリユツクリ歩いた。

その三

山荘

浅間の方から落ちて来る細流は竹藪たけやぶのところまで二つに別れて、
一つは水車小屋のある窪くぼい浅い谷の方へ私の家の裏を横ぎり、一
つは馬場裏の町について流れている。その流に添う家々は私の家
の組合だ。私は馬場裏へ移ると直ぐその組合に入れられた。一体、
この小諸の町には、平地というものが無い。すこし雨でも降ると、

細い川まで砂を押し流すくらいの地勢だ。私は本町へ買物に出るにも組合の家の横手からすこし勾配こうばいのある道を上らねばならぬ。

くみあいがしら

組合頭

は勤勉な仕立屋の亭主だ。この人が日頃出入する本

町のある商家から、商売あきないも閑ひまな頃で店の人達は東沢の別荘へ休

みに行っている、私を誘って仕立屋にも遊びに来ないか、とある日番頭が誘いに来たとのことであつた。

私は君に古城の附近をすこし紹介した。町家の方の話はまだ為しなかつた。仕立屋に誘われて商家の山荘を見に行つた時のことを話そう。

君は地方にある小さい都会へ旅したことが有るだろう。そこで行き逢う人々の多くは

——近在から買物に來た男女だとか、旅人だとかで——案外町の人の少いのに気が着いたことが有るだろう。田舎の神経質はこんなところにも表れている。小諸がそうだ。裏町や、小路こうじや、田たんぼ圃側わきの細い道などをえらんで、勝手を知った人々は多く往いつたり來たりする。

私は仕立屋と一緒に、町家の軒を並べた本町の通を一瞥べつして、丁度そういう田圃側の道へ出た。裏側から小諸の町の一部を見ると、白壁づくりの建物が土壁のものに混つて、堅く石垣の上に築かれている。中には高い三層の窓が城郭のように曇日に映じている。その建物の感じは、表側から見た暗い質素な暖簾のれんと対照を成して土地の氣質や殷富とみを表している。

麦むぎあき秋だ。一年に二度ずつ黄色くなる野面のらが、私達の両側にあつた。既に刈取られた麦畠も多かつた。半道ばかり歩いて行く途中で、塩にした魚肉の薦こもづつみ包をを提げた百姓とも一緒に成つた。仕立屋は百姓を顧みて、

「もうすっかり植付が済みましたかね」

「はい、漸ようやく二三日前に。これでも昔は十日前に植付けたものでござすが、近頃はずっと遅く成りました。日蔭に成る田にはあまり実入みいりも無かつたものだが、この節では一ぱいに取れますよ」

「暖せいくなつた故せいかな」

「はい、それもあります、昔と違って田の数がずっと殖えたものだから、田の水もウルミが多くなつてねえ」

百姓は眺め眺め答えた。

東沢の山荘には商家の人達が集っていた。店の方には内儀かみさん達と、二三の小僧とを残して置いて、皆なここへ遊びに来ているという。東京の下町に人となった君は——日本橋てんまちよう天馬町の針問屋とか、浅草ささるやちよう猿屋町の隠宅とかは、君にも私に可懐なつかしい名だ——恐らく私が今どういふ人達と一緒に成ったか、君の想像に上るであろうと思う。

山荘は二階建てで、池を前にして、静かな沢の入口にあつた。左に浅い谷を囲んだ松林の方は曇つて空もよく見えなかつた。快晴の日は、富士の山さんてん巔も望まれるという。池の辺ほとりに咲乱れた花あやめは楽しい感じを与えた。仕立屋は庭の高麗檜こうらいひば葉を指して見せ

て、特に東京から取寄せたものであると言つたが、あまり私の心を惹ひかなかつた。

私達は眺ちやうぼう望ぼうのある二階の部屋へ案内された。田舎いなかじま縞まの手

織物を着て紺の前垂を掛けた、髪も質素に短く刈つたのが、主人であつた。この人は一切の主権を握る相続者ではないとのことであつたが、しかし堅気な大おお店おだなの主人らしく見えた。でつぷり肥つた番頭かたわらも傍わらへ来た。池の鯉こいの塩焼で、主人は私達に酒を勧めた。階下したには五六人の小僧が居て、料理方もあれば、通いをするものもあつた。

一寸したことにも、質素で厳格な大店の家風は表れていた。番頭は、私達の前にある冷豆腐ひややつこの皿にのみ花鯉節はながつおが入つて、主

人と自分のにはそれが無いのを見て、「こりや醬油しょうゆばかりじゃ
いけねえ。オイ、鰹節おつかをすこしかいて来ておくれ」

と楼梯はしごだん

のところから階下したを覗のぞいて、小僧こぞうに吩咐いいつけた。間も

なく小僧はウンと大きく削った花鰹節を二皿持つて上つて来た。

やがて番頭は階下から将棋の盤を運んだ。それを仕立屋の前に
置いた。二枚落しでいこうと番頭が言った。仕立屋は二十年以来
ぱったり止めているが、万更でも無いからそれじゃ一つやるか、
などと笑った。主人も好きな道と見えて、覗き込んで、仕立屋は
なかなか質たちが好いようだとか、そこに好い手があるとか、しきり
と加勢をしたが、そのうちに客の敗と成った。番頭は盃さかずきを啣くんで、
「さあ誰でも来い」という顔付をした。「お貸しなさい、敵かたきう

打ちだ」と主人は飛んで出て、番頭を相手に差し始める。どうやら主人の手も悪く成りかけた。番頭はぴっしやり自分の頭を叩いて、「恐れ入ったかな」と舌打した。到頭主人の敗と成った。復た二番目が始まった。

階下では、大きな巾きんちやくを着きを腰に着けた男の児が、黒い洋犬と戯れていたが、急に家の方へ帰ると駄々をコネ始めた。小僧がもてあましているの、仕立屋も見兼ねて、子供の機嫌きげんを取りに階下へ降りた。その時、私も庭を歩いて見た。小手毬こてまりの花の遅いのも咲いていた。藤棚の下へ行くと、池の中の鯉の躍おどるのも見えた。「こう水があると、なかなか鯉は捕まらんものさネ」と言っている者も有った。

池を一廻りした頃、番頭は赤い顔をして二階から降りて来た。

「先生、勝負はどうでしたネ」と仕立屋が尋ねた。

「二番とも、これサ」

番頭は鼻の先へ握り拳こぶしを重ねて、大天狗だいてんぐをして見せた。そして、高い、快活な声で笑った。

こういう人達と一緒に、どちらかと言えば陰気な山の中で私は時を送った。ポツポツ雨の落ちて来た頃、私達はこの山荘を出た。番頭は半ば酔った調子で、「お二人で一本だ、相合傘あいあいがさというやつはナカナカ意気なものですから」

と番傘を出して貸してくれた。私は仕立屋と一緒にその相合傘で帰りかけた。

「もう一本お持ちなさい」と言つて、復また小僧が追いかけて来た。

毒消売の女

「毒消は宜よう御座んすかねえ」

家々の門かどに立つて、鋭えちごなまりい越後訛なまりで呼ぶ女の声を聞くように成つた。

黒い旅人らしい姿、背中にある大きな風呂敷ふうろしき、日をうけて光る笠、あだかも燕つばめが同じような勢揃せいぞろいで、互に群を成して時季を違えず遠いところからやつて来るように、彼等もはるばるこの山の上まで旅して来る。そして鳥の群が彼方かなた、此方こなたの軒に別れて飛

ぶように彼等もまた二人か三人ずつに成つて思い思いの門を訪れる。この節私は学校へ行く途中で、毎日のようにその毒消売の群に逢う。彼等は血氣壯さかんなどころまで互によく似ている。

銀馬鹿

「何処どこの土地にも馬鹿の一人や二人は必ずある」とある人が言つた。

貧しい町を通つて、黒い髭ひげの生えた飴屋あめやに逢つた。飴屋は高い石垣の下で唐人笛とうじんぶえを吹いていた。その辺は停車場に近い裏町だ。私が学校の往ゆきかえり還かえりによく通るところだ。岩石の多い桑くわばたけ 畠はたけの

間へ出ると、坂道の上の方から荷車を曳ひいて押流されるように降りて来た人があつた。荷車には屠ほふつた豚の股ももが載せてあつた。後で、私はあの人を銀馬鹿だと聞いた。銀馬鹿は黙ひとつてよく働く方の馬鹿だという。この人は又、自分の家屋敷を他に占領ひとされてそれを知らずに働いているともいう。

祭の前夜

春蚕はるこが済む頃は、やがて土地では、祇園祭ぎおんまつりの季節を迎える。この町で養蚕をしない家は、指折るほどしか無い。寺院おてらの僧侶ぼうさんすらそれを一年の主なる収入に数える。私の家では一度も飼つた

ことが無いが、それが不思議に聞える位だ。こういう土地だから、
 暗い蚕かいこ棚たなと、襲うような臭気と、蚕の睡眠ねむりと、桑の出来不出
 来と、ある時は殆んど徹夜で働いている男や女のことを想つてみ
 て貰もらわなければ、それから後に来る祇園祭の楽しさを君に伝える
 ことが出来ない。

秤を腰に差して麻袋を負しよつたような人達は、諏訪すわ、松本あたり
 からこの町へ入込んで来る。旅舎やどやは一時繭まゆかい買の群で満たされる。
 そういう手合が、思い思いの旅舎を指して繭の収穫を運んで行く
 光景さまも、何となく町々に活気を添えるのである。

二十日ばかりもジメジメと降り続いた天氣が、七月の十二日に
 成よつて漸ようやく晴れた。霖ながあめ雨の後の日光は殊ことにきらめいた。長いこ

と煙霧に隠れて見えなかつた遠い山々まで、桔梗きぎよう色いろに頭あわられた。この日は町の大人から子供まで互に新しい晴衣を用意して待つていた日だ。

私は町の団体の暗闘に就ついて多少聞いたこともあるが、そんなことをここで君に話そうとは思わない。ただ、祭以前に紛擾ごたごたを重ねたと言うだけにして置こう。一時は祭をさせるとか、させないとかの騒さわぎが伝えられて、毎年月の始めにアーチ風に作られる飾しめかざりが漸く七日目に町々の空へ掛つた。その余波として、御輿みこしを担かつぎ込まれるが煩うるささに移転したと言われる家すらあつた。そういう騒さわぎの持上るといふだけでも、いかにこの祭の町の人から待受けられているかが分る。多くの商人は殊に祭の賑にぎわいを期待する。

養蚕から得た報酬がすくなくもこの時には費されるのであるから。

夜に入つて、「湯立^{ゆだて}」という儀式があつた。この晩は主な町の

人々が提^{ちようちん}灯^{やしろ}つけて社の方へ集る。それを見ようとして、私も

家を出た。空には星も輝いた。社頭で飴菓子^{あめがし}を売っている人に逢

つた。謡曲で一家を成した人物だとのことだが、最早長いことこ

の田舎に隠れている。

本町の通には紅白の提灯^{ゆきき}が往来の人の顔に映つた。その影で、

私は鳩屋^{ほとや}のI、紙店^{かみみせ}のKなどの手を引き合つて来るのに逢つた。

いずれも近所の快活な娘達だ。

十三日の祇園^{ぎおん}

十三日には学校でも授業を休んだ。この授業を止む休まないで
は毎いつでも時論があつて、校長は大抵の場合には休む方針を執り、幹
事先生は成るべく休まない方を主張した。が、祇園の休業は毎年
の例であつた。

近在の娘達は早くから来て町々の角に群がった。戸板や樽たるを持
出し、毛布ケットをひろげ、その上に飲のみ食する物を売り、にわかごし
らえの腰掛は張板で間に合わせるような、土地の小商人こあきんどはそこ
にも、ここにもあつた。日頃顔を見知つた八百屋夫婦も、本町か
ら市町の方へ曲ろうとする角のあたりに陣取つて青い顔の亭主と
肥つた内儀かみさんとが互に片肌かたはだぬぎ拔で、稲荷いなりずし鮎つを漬けたり、海苔のりまき巻を

作つたりした。貧しい家の児が新調の単衣ひとえを着て何か物を配り顔に町を歩いていられるのも祭の日らしい。

午後、家のものはB姉妹の許もとへ招かれて御輿みこしの通るのを見に行つた。Bは清少納言せいしょうなごんの「枕の草紙」などを読みに来る人で、子供もよくその家へ遊びに行く。

光岳寺の境内にある鐘楼からは、絶えず鐘の音が町々の空へ響いて来た。この日は、誰でも鐘楼に上つて自由に撞つくことを許してあつた。三時頃から、私も例の組合の家について夏の日であつた道を上つた。そこを上りきつたところまで行くと軒毎あおすに青簾だれを掛けた本町の角へ出る。この簾は七月の祭に殊ふに適あわしい。祭を見に来た人達は鄙ひなびた絵巻物を繰くり展ひろげる様に私の前を通

った。近在の男女は風俗もまちまちで、紫色の唐縮緬とうちりめんの帯を幅
 広にぐるぐると巻付けた男、大きな鬘まげにさした髪かみの飾りも重そう
 に見える女の連れ、男の洋傘こうもりがさをさした娘もあれば、綿フラン
 ネルの前垂まえだれをして尻端しりはしを折った児もある。黒い、太い足に白
 足袋ろたびを穿て、裾すその短い着物を着た小娘もある。一里や二里の道は
 何とも思わずにやって来る人達だ。その中を、軽井沢辺りあたの客と
 見えて、珍らしそうに眺ながめて行く西洋の婦人もあつた。町の子供
 はいずれも嬉しそうに群集の間を飛んで歩いた。

やがて町の下の方から木の白うすを転ころがして来た。見物はいずれも
 両側の軒下なぞへ逃げ込んだ。

「ヨイヨ。ヨイヨ」

と掛声して、重い御輿が担かつがれて来た。狭い往来の真中で、時々御輿は白の上に置かれる。血気な連中はその周囲まわりに取付いて、ぐるぐる廻したり、手を揚げて叫んだりする。壮さかんな歓呼の中に、復た御輿は担がれて行つた。一種の調律は見物の身からだに流れ伝わつた。私は戻りがけに子供まで同じ足拍子で歩いているのを見た。この日は、町に紛ごたごた擾ごたごたのあつた後で、何となく人の心が穏かになかつた。六時頃に復た本町の角へ出て見た。「ヨイヨイヨ」という掛声までシャガレて「ギョイギョ、ギョイギョ」と物凄ものずこく聞える。人々は酒気を帯て、今御輿が町の上の方へ担がれて行つたかと思うと急に復た下つて来る。五六十人の野次馬は狂するごとく叫び廻る。多勢の巡查や祭事掛は駈かけあし足で一緒に附いて歩

いた。丁度夕飯時で、見物は彼方あちこち是方へ散じたが、御輿の勢は反かえつて烈はげしく成つた。それが大きな商家の前などを担がれて通る時は、見る人の手に汗を握らせた。

急に御輿は一種の運動と化した。ある家の前で、衝突の先さきぼう棒を振るものがある、両手を揚げて制するものがある、多勢の勢に駆られて見る間に御輿は傾いて行つた。その時、家の方から飛んで出て、御輿に飛付き押し廻そうとするものもあつた。騒ぎに踏み敷かれて、あるものの顔から血が流れた。「御輿を下せ御輿を下せ」と巡査が馳はせ集つて、烈しい論判の末、到頭よてい輿丁の外ほかは許さないということに成つた。御輿の周囲まわりは白帽白服の人で護られて、「さあ、よし、持ち上げろ」などという声と共に、急に復た

仲町の方角を指して担がれて行つた。見物の中には突き飛ばされて、あおのけさまに倒れた大の男もあつた。

「それ早く逃げろ、子供々々」

皆な口々に罵つたののし

「巡查も随分御苦勞なことですな」

「ほんとに好い迷惑サ」

見物は言い合つていた。

暮れてから町々の提ちようちん灯は美しく点つた。とも簾すだれを捲まきあ上げ、店先に毛氈もうせんなどを敷き、屏風びようぶを立て廻して、人々は端近く座りながら涼んでいた。

御輿は市町から新町の方へ移つた。ある坂道のところで、雨の

ように降つた賽さい銭せんを手探りに拾う女の児などが有つた。後には、提灯を手にして往来をさが探すような青砥あおとの子孫もあらわ顕れるし、五十ばかりの女が闇から出て、石をさぐつたり、土をつか掴んだりして見るのも有つた。さかしい慾の世ということをおわせた。

市町の橋は、学校の植物の教師の家に近い。私の懇意なT君という医者いしやの家にも近い。その欄らん干かんの両側には黒い影が並んで、涼しい風をあそ楽しんでゐるものや、人の顔をのぞ覗くものや、胴どうまご魔え声こゑに歌うものや、手を引かれて断り言う女連などが有つた。

夜の九時過に、馬場裏の提灯はまだ宵の口のように光つた。組合の人達は仕立屋や質屋の前あたりに集つて涼みがてら祭うわさの噂うわさをした。この夜は星の姿を見ることが出来なかつた。螢ほたるは暗い流の

方から迷つて来て、町中まちなかを飛んで、青い美しい光を放った。

後の祭

翌日は朝から涼しい雨が降った。家の周囲まわりにある柿、李すももなどの緑葉からは雫しずくが滴たった。李の葉の濡ぬれたのは殊ことに涼しい。

本町の通では前の日の混雑ごんざつした光景さまと打つて変つて家毎いえごとに祭の提灯ちていを深く吊つるしてある。紺暖簾のれんの下にさげた簾すだれも静かだ。その奥で煙草盆の灰吹たいたを叩く音が響いて聞える位だ。往来には、娘子供むすこが傘をさして遊び歩くのみだ。前の日に用いた木の白うすも町まちの片かた隅すみに転してある。それが七月の雨に濡れている。

この十四日には家々で強飯こわめしを蒸ふかし、煮染にしめなどを祝つて遊び暮す日であるという。午後の四時頃に成つても、まだ空は晴れなかつた。烏帽子えぼしを冠り、古風な太刀たちを帯びて、芝居しばらくの「暫」にでも出て来そふな男が、神官、祭事掛、子供などと一緒に、いずれも浅黄ひたれの直垂ひたれを着けて、小雨の降る町中のメ飾を切りに歩いた。

その四

なかだな
中棚

私達の教員室の窓から浅い谷が見える。そこは耕されて、桑くわな
どが植付けてある。

こういう谷が松林の多い崖がけを挟はさんで、古城の附近に幾つとなく
有る。それが千曲川ちくまがわの方へ落ちるに随つて余程深いものと成つ
ている。私達は城門の横手にある草地を掘返して、テニスのグラ

ンドを造っているが、その辺も矢張谷やはりの起点の一つだ。M君が小諸に居た頃は、この谷間たにあいで水彩画を作ったこともあった。学校の体操教師の話によると、ずっと昔、恐るべき山崩れのあった時、浅間の方から押寄せて来た水がこういう変化のある地勢を造ったとか。

八月のはじめ、私はこの谷の一つを横ぎつて、中棚の方へ出掛けた。私の足はよく其方そちらへ向いた。そこには鉱泉があるばかりでなく、家から歩いて行くには丁度頃合の距離にあつたから。

中棚の附近には豊かな耕地も多い。ある崖の上まで行くと、傾斜の中腹に小ぢんまりとした校長の別荘がある。その下に温泉場の旗が見える。林檎りんご畠ぼたけが見える。千曲川はその向を流れている。

午後の一時過に、私は田圃脇たんぼわきの道を通つて、千曲川の岸へ出た。蘆あし、蓬よもぎ、それから短い楊やなぎなどの多い石の間で、長野から来ている師範校の学生と一緒になっ成た。A、A、Wなどという連中だ。この人達は夏休を応用して、本を読み私に私の家へ通つている。岸には、熱い砂を踏んで水泳にやつて来た少年も多かつた。その中には私達の学校の生徒も混つていた。

暑くなつてから、私はよく自分の生徒を連れて、ここへ泳ぎに来るが、隅田川すみだがわなどで泳いだことを思うと水瀬からして違ふ。青く澄んだ川の水は油のように流れていても、その瀬の激しいことと言つたら、眩暈めまいがする位だ。川上の方を見ると、暗い岩蔭から白波を揚げて流れて来る。川下の方は又、矢のように早い。そ

れが五里淵ごりぶちの赤い崖に突き当って、非常な勢で落ちて行く。どうして、この水瀬が是処こつちの岩から向うの崖下まで真直まっすぐに突切れるものではない。それに澄んだ水の中には、大きな岩の隠れたのがある。下手をマゴつけば押流されて了しまう。だから余程上かみの方からでも泳いで行かなければ、目的とする岩に取付いて上ることが出来ない。

平野を流れる利根とねなどと違い、この川の中心は岸のどちらかに激しく傾いている。私達は、この河底あらかの露れた方に居て、溝萩みぞはぎの花などの咲いた岩の蔭で、二時間ばかりを過した。熱い砂の上には這はいのめつて、甲羅こうらを乾しているものもあつた。ザンブと水の中へ飛込むものもあつた。このあたりへは小娘まで遊びに来て、

腕まくりをしたり、尻を端折はしよつたりして、足を水に浸しながら余念なく遊び廻めぐっていた。

三つの麦藁帽子むぎわらが石の間にあらわれた。師範校の連中だ。「ちったア釣れましたかね」と私が聞いた。

「ええ、すっかり釣られてしまいました」

「どうだネ、君の方は」

「五尾ひきばかり掛るには掛りましたが、皆だまな欺だまされてしまいました」

「む、む、二時間もあるのだから、ゆっくり言訳は考えられるサ……」

こんなことを言つて、仲間まぜの話を混返かえすものもあつた。

この連中と一緒に、私は中棚の温泉の方へ戻つて行つた。沸し

湯ではあるが、鉱泉に身を浸して、浴槽よくそうの中から外部そとの景色を眺めるながのも心地こころもちが好かつた。湯から上つても、皆の楽しみは茶でも飲みながら、書生らしい雑談に耽ふけることであつた。林檎畠ぶどうだな、葡萄棚ぶどうだななどを渡つて来る涼しい風は、私達の興を助けた。

「年をとれば、甘い物なんか食いたくなくなりましょうか」

と一人が言出したのが始まりで、食慾の話がそれからそれと引出された。

「十八史略を売つて菓子屋の払いをしたことも有るからナア」

「菓子もいいが、随分かかるネ」

「僕は二年ばかり辛抱した……」

「それはエライ。二年の辛抱は出来ない。僕などは一週間に三度

と定めてきいる」

「ところが、君、三年目となると、どうしても辛抱が出来なくなつたサ」

「此頃こないだ、ある先生が——諸君は菓子屋へよく行そうだ、私はこれまでそういう処へ一切足を入れなかつたが、一つ諸君連れてつてくれ給え、こう言うじやないか」

「フウン」

「一体諸君はよく菓子を好かれるが、一回に凡およそどの位食べるんですか、と先生が言うから、そうです、まあ十銭から二十銭位食いますつて言うのと、それはエライ、そんなに食つてよく胃を害こわさないものだと言われる。ええ、学校へ歸つて来て、夕飯を食わず

にいるものも有ります、とやったさ」

「そうだがねえ、いろいろなのが有るぜ、菓子に胃散をつけて食う男があるよ」

三人は何を言っても気が晴れるという風だ。中には、手を叩いて、踊り上つて笑うものもあつた。それを聞くと、私も嘔飯ふきださずにはいられなかつた。

やがて、三人は口笛を吹き吹き一緒に泊つている旅舎やどやの方へ別れて行つた。

この温泉から石垣について坂道を上ると、そこに校長の別荘の門がある。楼の名を水明楼としてある。この建物はもと先生の書齋で、土族屋敷の方にあつたのを、ここへ移して住まわれるよう

にしたものだ。閑雅な小楼で、崖に倚よつて眺望の好い位置に在る。

先生は共立学校時代の私の英語の先生だ。あの頃は先生も男のさかりで、アアヴィングの「リップ・ヴァン・ウインクル」などを教えてくれたものだった。その先生が今ではこういうところに隠れて、花を植えて楽しんでらぶ泉に老を養つたりするような、白はくぜ髯んの翁おきなだ。どうかすると先生の口から先生自身がリップ・ヴァン・ウインクルであるかのような戯じょうだん談だんを聞くこともある。でも先生の雄心は年と共に銷磨しょうまし尽すようなものでもない。客が訪ねて行くと、談論風発する。

水明楼へ来る度たびに、私は先生の好く整理した書齋を見るのを楽しみにする。そればかりではない、千曲川の眺望はその楼上てすりの欄らんに

倚りながら恣ほしいままに賞あずることが出来る。対岸に煙の見えるのは大久保村だ。その下に見える釣つり橋ばしが戻り橋だ。川向から聞える朝々の鶏の鳴声、每晚農村に点つく灯あかりの色、種いろ々いろ思おもいやられる。

なら
こかげ
榎の樹蔭

榎の樹蔭。

そこは鹿島神社の境内だ。学校が休みに成つてからも、私はよくその樹蔭を通る。

ある日、鉄道の踏切を越えて、また緑草の間の小径こみちへ出た。榎の古木には、角の短い、目の愛らしい小牛つなが繋つないであつた。しば

らく私が立つて眺めていると、小牛は繋がれたままでぐるぐると廻るうちに、地を引くほどの長い綱を彼方あっちこっち此方の櫓の幹へすつかり巻き付けて終しまつた。そして、身動きすることも出来ないように成った。

向の草の中には、赤い馬と白い馬とが繋いであつた。

その五

山の温泉

夕立ともつかず、時雨しぐれともつかないような、夏から秋に移り変る時の短い雨が来た。草木にそそぐ音は夕立ほど激しくない。最早初茸はっだけを箱に入れて、木の葉のついた樺かばいろ色なやつや、緑ろくしよがかったやつなどを近在の老婆達が売りに来る。

一月ばかり前に、私は田沢温泉という方へ出掛けて行って来た。

あの話を君にするのを忘れた。

温泉地にも種々^{いろいろ}あるが、山の温泉は別種の趣がある。上田町に近い別所温泉などは開けた方で、随^{したが}つて種々の便利も具^{そな}わつてゐる。しかし山国らしい温泉の感じは、反^{かえ}つて不便な田沢、霊泉寺などに多く味^{あじわ}われる。あの辺にも相応な温泉宿は無いではないが、なにしろ土地の者が味^{みそ}噌や米を携えて労苦を忘れに行くという場所だ。自炊する浴客が多い。宿では部屋だけでも貸す。それに部屋付の竈^{かまど}が具えてある。浴客は下駄穿^{げたばき}のまま庭から直^{すぐ}に楼^{はしご}梯^{だん}を上つて、楼上の部屋へ通うことも出来る。この土足で昇^{あがり}降^{おり}の出来るように作られた建物を見ると、山深いところにある温泉宿の気がする。鹿沢温泉^{かざわ}（山の湯）と来たら、それこそ野趣

に富んでいるという話だ。

半ば緑葉に包まれ、半ば赤い崖がけに成った山脈に添うて、千曲川の激流を左に望みながら、私は汽車で上田まで乗った。上田橋——赤く塗った鉄橋——あれを渡る時は、大河らしい千曲川の水をめのした眼な下がに眺めて行つた。私は上田附近の平地にある幾多の村落の間を歩いて通つた。あの辺はいかにも田舎いなかみち道らしい気のするところだ。途中に樹蔭こかげもある。腰掛けて休む粗末な茶屋もある。

青木村というところで、いかに農夫達が労苦するかを見た。彼等の背中に木の葉を挿さして、それを僅わずかの日除ひよけとしながら、田の草を取つて働いていた。私などは洋傘こうもりでもなければ歩かれない程の熱い日ざかりに。この農村を通り抜けると、すこし白く濁つた

徒だ。

楼上から遠く浅間一帯の山々を望んだ。浅間の見えない日は細かい、などと校長の細君は話していた。

十九夜の月の光がこの谷たにあい間に射し入った。人々が多く寝静まった頃、まだ障子を明るくして、盛んに議論している浴客の声も聞えた。

「身体は小さいけれど、そんな野蛮人じゃねえ」
理屈りくつツぽい人達の言いそうな言葉だ。

翌日は朝霧の籠こもった谿谷けいこくに朝の光が満ちて、近い山も遠く、家々から立登る煙は霧よりも白く見えた。浅間は隠れた。山のかあなたは青がかった灰色に光った。白い雲が山脈に添うて起るのも

望まれた。国さんという可憐かれんの少年も姉娘に附いて来ていて、温泉宿の二階で玩具おもちゃの銀笛ぎんてきを吹いた。

そこは保福寺峠ほうふくじと地蔵峠とに挟まれた谷間だ。二十日の月はその晩も遅くなって上った。水の流が枕に響いて眠られないので、一旦寝た私は起きて、こういう場所の月夜の感じを味あじわった。高い欄てすりに倚より凭かかつて聞くと、さまざまの虫の声が水音と一緒に成つて、この谷間に満ちていた。その他暗い沢の底の方には種々な声があった。——遅くなって戸を閉める音、深夜の人の話声、犬の啼なきご声え、楽しそうな農夫の唄。

四日目の朝まだ暗いうちに、私達は月明りで仕度したくして、段々夜の明けて行く山道を別所の方へ越した。

学窓の一

夏休みも終つて、復また私は理学士やB君や、それから植物の教師などと学校でよく顔を合せるように成つた。

秋の授業を始める日に、まだ桜の葉の深く重なり合つたのが見える教室の窓の側で、私は上級の生徒に釈迦しゃかの話をした。

私は『釈迦譜しゃかふ』を選んだ。あの本の中には、王子の一生が一篇ドラマの戯曲を読むように写うつ出してある。あの中から私は釈迦の父王

の話、王子の若い友達の話などを借りて来て話した。青年の王子が憂愁に沈みながら、東西南北の四つの城門から樹園の方へ出て

見るといふ一節は、私の生徒の心をも引いたらしい。一つの門を出たら、病人に逢った。人は病まなければ成らないかと王子は深思した。他の二つの門を出ると、老人に逢い、死者に逢った。人は老いなければ成らないか、人は死ななければ成らないか。この王子の逢ほうちやく着する人生の疑問がいかにも簡素に表してある。最後に出た門の外で道者に逢った。そこで王子は心を決して、このLifeを解かんが為に、あらゆるものを破り捨てて行つた。

戯曲的ではないか。少年の頭脳にも面白いように出来ていてではないか。私はこんな話を生徒にした後で、多勢居る諸君の中には実業に志すものもあろうし、軍人に成ろうというものもあろう、しかし諸君の中にはせめてこの青年の王子のように、あらゆるも

のを破り捨てて、坊さんのような生涯を送る程の意気込もあつて欲しい、と言つて聞かせた。

私は生徒の方を見た。生徒は私の言つた意味を何と釈とつたか、いずれも顔を見合せて笑つた。中には妙な顔をして、頭を擁かかえているものもあつた。

学窓の二

樹木が一年に三度ずつ新芽を吹くとは、今まで私は気がつかなくかつた。今は九月の若葉の時だ。

学校の校舎の周囲まわりには可成かなり多くの樹木を植えてある。大きな桜

の實の熟する頃などには、自分等の青年時代のことまでも思い起させたが、こうして夏休過に復たこの庭へ来て見ると、何となく白ツぽい林檎りんごの葉や、紅味を含んだ桜や、淡々しい青桐あおぎりなどが、校舎の白壁に映り合つて、楽しい陰日向かげひなたを作っている。樂しうに吹く生徒の口笛が彼方あちこち此方に起る。テニスのコートを城門の方へ移してからは、桜の葉蔭で角力すもうを取るものも多い。

学校の歸りに、夏から病んでゐるBの家を訪ねた。その家の裏を通り抜けて石段を下りると、林檎の畠がある。そこにも初秋らしい日あが映あつていた。

いなか
田舎教師

朝顔の花を好んで毎年培養する理学士が、ある日学校の帰かえりみ途ちに、新しい弟子でしの話はなを私わたしにして聞きかせた。

弟子と言つても朝顔を培養する方の弟子だ。その人は町に住む牧師で、一部の子供から「日曜学校の叔父さん」と懐なつかしがられてゐる。

この叔父さんの説教最中に夕立が来た。まだ朝顔の弟子入をしたばかりの時だ。彼の心は毎日楽しんでゐる畑はたの方へ行つた。大事だいじな貝割かいわれ葉はの方へ行つた。雨に打たれる朝顔鉢ぼちの方へ行つた。説教そこそこにして、彼は夕立の中を朝顔棚の方へ駈かけ出した。

「いかにも田舎の牧師さんらしいじやありませんか」と理学士は

この新しい弟子の話をして、笑った。その先生はまた、火事見舞に來て、朝顔の話をして行くほど、自分でも好きな人だ。

九月の田圃道
たんぼみち

傾斜に添うて赤坂（小諸町の一部）の家つづきの見えるところへ出た。

浅間の山麓さんろくにあるこの町々は眠ねむりから覚めた時だ。朝餐あさげの煙は何となく湿った空気の中に登りつつある。鶏おちこちの声も遠近おちこちに聞える。

熟しかけた稲田の周囲まわりには、豆まめも莢さやを垂たれていた。稲の中には

既に下葉の黄色くなつたのも有つた。九月も半ば過ぎだ。稲穂は
 いろいろ種々で、あるものは薄すすぎの穂の色に見え、あるものは全く草の色、
 あるものは紅毛あかげの房を垂れたようであるが、その中で濃い茶褐ちやかつ
 色しよくのもちごめが糯を作つた田であることは、私にも見分けがつく。

朝日は谷々へ射して来た。

田圃道の草露は足を濡ぬらして、かゆい。私はその間を歩き廻つ
 て、蟋蟀こおろぎの啼なくのなを聞いた。

この節、浅間は日によつて八回も煙を噴はくことがある。

「ああ復た浅間が焼ける」と土地の人は言い合ふのが癖だ。男や
 女が仕事しかけた手を休めて、屋外そとへ出て見るとか、空を仰ぐと
 かする時は、きつと浅間の方に非常に大きな煙かたまりの団が望まれる。

そういう時だけ火山の麓ふもとに住んでいるような心こころ地もちを起させる。こういうところに住み慣れたものは、平素ふだんは、そんなことも忘れ勝ちに暮している。

浅間は大きな爆発の為に崩されたような山で、今いう牙齒山ぎっばやまが往時むかしの噴火口の跡であつたろうとは、誰しも思うことだ。何か山の形状かたちに一定した面白味でもあるかと思つて来る旅人は、大概失望する。浅間ばかりでなく、蓼科たでしな山脈なの方を眺めても、何の奇も無い山々ばかりだ。唯、面白いのは山の空気だ。昨日出て見た山と、今日出て見た山とは、殆んど毎日のように變つてゐる。

山中生活

理学士の住んでいる家のあたりは、荒町の裏手で、酢屋のKという娘の家の大きな醤油蔵しょうゆぐらの窓などが見える。その横について荒町の通へ出ると、畳表、鰹節かつぶし、茶、雑貨などを商う店々の軒を並べたところに、可成大きな鍛冶屋がある。高い暗い屋根の下で、古風な鬚まげに結った老爺ろうやが鉄槌てつづいの音をさせている。

この昔気質むかしかたぎの老爺が学校の体操教師の父親おとつさんだ。

朝風の涼しい、光の熱い日に、私は二人ばかり学生を連れて、その家の鍛冶場の側わきを裏口へ通り抜け、体操の教師と一緒に浅間の山腹を指して出掛けた。

山家やまがと言つても、これから私達が行こうとしているところは真ま

実んとうの山の中だ。深い山林の中に住む人達の居る方だ。

粟あわ、小豆あずき、飼馬かいばの料にするとかいう稗ひえなぞの畠が、私達の歩いて行く岡部おかべの道に連なっていた。花の白い、茎の紅い蕎麦そばの畠なども到るところにあった。秋のさかりだ。体操の教師は耕作のことに委くわしい人だから、諸方ほうほうに光つて見える畠を私に指して見せて、あそこに大きな紫紅色の葉を垂れたのが「わたり粟」というやつだとか、こつちの方に細い青黒い茨さやを垂れたのが「こうれい小豆」という種類だとか、御蔭で私は種々なことを教もらって貰らった。この体操教師は稲田を眺めたばかりで、その種類を区別するほど明あるかつた。

五六本松の岡に倚よつて立つて望んだ。囁道祖神ささやきどうそじんの

あるのは其処そこだ。

寺窪てらくぼというところへ出た。農家が五六軒ずつ、ところどころに散在するほどの極く辺鄙へんぴな山村だ。君に黒斑山くろくやまのことは未だ話さなかつたかと思うが、矢張浅間の山つづきだ、ホラ、小諸の城址しろあとにある天主台——あの石垣の上の松の間から、黒斑のように見える山林の多い高い傾斜、そこを私達は今歩いて行くところだ。あの天主台から黒斑山の裾すそにあたって、遠く点のような白壁を一つ望む。その白壁の見えるのもこの山村だ。

塩俵しよを負おつて腰ゆがを曲めながら歩いて行く農夫があつた。体操の教師は呼び掛けて、

「もう漬物つけものですか」と聞いた。

「今やりやすと二割方得ですよ」

荒い気候と戦う人達は今から野菜を貯えることを考えると見える。
る。

前の前の晩に降った涼しい雨と、前の日の好い日光とで、すこしは蕈きのこの獲物もあるだろう。こういう体操教師の後に随ついて、私は学生と共に松林の方へ入った。この松林は体操教師の持山だ。松葉の枯れ落ちた中に僅かに数本の黄しめじと、牛うし額しびたいとしか得られなかった。それから笹の葉の間なぞを分けて「部分木ぶぶんぼくの林」と称とえる方に進み入った。

私達は可成深い松林の中へ来た。若い男女の一家族と見えるのが、青松葉の枝を下したり、それを束ねたりして働いているのに

逢った。女の方は二十前後の若い妻らしい人だが、垢染あかしみた手てぬぐ拭いを冠かぶり、襦袢じゆばん肌はだぬ抜き尻端折しりはしよりという風で、前垂を下げて、藁草履わらぞうりを穿はいていた。赤い荒くれた髪、粗野な日に焼けた顔は、男とも女ともつかないような感じがした。どう見ても、ミレエの百姓画の中に出て来そうな人物だ。

その弟らしいのが三四人、どれもこれも黒い垢のついた顔をして、髪はまるで蓬よもぎのように見えた。でも、健すこやかな、無心な声で、子供らしい唄を歌った。

母らしい人も林の奥から歩いて来た。一同仕事を休やめて、私達の方をめずらしそうに眺めていた。

この人達の働くあたりから岡つづぎに上って行くところ平坦たいらな

松林の中へ出た。刈草を負しよつた男が林の間の細道を帰つて行つた。日は泄もれて、湿つた草の上に映あたつていた。深い林の中の空気は、水中を行く魚かなんそのようにその草刈男を見せた。

がらがらと音をさせて、柴しばを積んだ車も通つた。その音は寂しい林の中に響き渡つた。

熊くまぎさ笹、柴などを分けて、私達は蕈きのこを探し歩いたが、その日は獲物は少なかつた。枯葉を鎌かまで掻除かきのけて見ると稀たまにあるのは紅べにた蕈けという食われないのか、腐敗した初はつだけ蕈位いのものだった。終しまいには探し疲れて、そうそうは腰も言うことを聞かなく成つた。軽い腰籠こしごこを提げたまま南かほちや瓜の花の咲いた畠のあるところへ出て行つた。山番の小屋が見えた。

山番

番小屋の立っている処は尾の石と言つて、黒斑山くろふやまの直ぐ裾にあたる。

三峯神社とした盗難除とうなんよけの御札を貼付はりつけた馬小屋や、萩はぎなぞを刈つて乾してある母屋おもやの前に立つて、日の映あつた土壁の色などを見た時は、私は余程人里から離れた気がした。

鋭い眼付きの赤犬が飛んで来た。しきりと私達を怪あやしむように吠ほえた。この犬は番人に飼われて、種いろ々な役に立つと見えた。

番小屋の主人が出て来て私達を迎えてくれた頃は、赤犬も頭を

撫なでさせるほどに成つた。主人は鬚ひげも剃そらずに林の監督をやつて
 いるような人であつた。細君は禪たすきがけ掛かけで、この山の中に出て来た
 南かぼちゃ瓜ななぞを切りながら働いていた。

四人の子供も庭へ出て来た。一番年長うえのは最早もう十四五になる。

狭い帯をメ《しめ》て藁草履わらぞうりなぞを穿はいた、しかし髪かみの毛けの黒

い娘こだ。年とし少したの子供は私達の方を見て、何となくキマリの悪そ

うな羞はじを帯おんどりびた顔付かほづをしていた。その側には、トサカの美しい、

白い雄おんどり鶏どりが一羽と、灰色な雌めんどり鶏どりが三羽ばかりあそんでいたが、

やがてこれも裏の林の中へ隠れて了しまつた。

小屋は二つに分れて、一方の畳を敷いたところは座敷ではある

が、實際平素ふだんは寢室ふしむと言つた方が当あたっているだろう。家族が食事

したり、茶を飲んだり、客を迎えたりする炉辺ろばたの板敷には薄縁うすべりを敷いて、耕作の道具食器の類はすべてその辺あたりに置き並べてある。何一つ飾りの無い、煤すすけた壁に、石版画の彩色したのや、木版刷の模様をついた曆なぞが貼付けてあるのを見ると、そんな粗末な版画でも何程かこの山の中に住む人達の眼まなこを悦ばすであろうと思われた。暮の売出しの時に、近在から町へ買物に来る連中がよくこの版画を欲しがるのも、無理は無いと思う。

私達は草鞋掛わらじかけのまま炉辺で足を休めた。細君こわが辣らつきよう 蕪しの塩し漬おづけにしたのと、茶を出して勧めてくれた。渴かわいた私達の口には小屋で飲んだ茶がウマかった。冬はこの炉かまどに焚火たきびを絶たやしたことが無いと、主人が言った。ここまで上ると、余程気候も違う。

一緒に行つた学生は、小屋の裏の方まで見に廻つて、柿は植えても渋が上らないことや、梅もあるが味が苦いことや、桃だけはこの辺の地味にも適することなど種々な話を主人から聞いて来た。やがて昼飯時だ。

庭の栗の樹の蔭で、私達は小屋で分けて貰つた蕈きのこを焼いた。主人は薄縁を三枚ばかり持つて来て、樹の下へ敷いてくれた。そこで昼飯が始まつた。細君は別に鶏なすと茄子とうなすの露、南瓜の煮付を馳ちそう走振ぶりに勧めてくれた。いづれも大鍋おおなべにウンとあつた。私達は各自手盛でやつた。学生は握飯、パンなどを取出す。体操の教師はまた、好きな酒を用意して来ることを忘れなかつた。

この山の中で林檎りんごを試植したら、地梨じなしの虫が上つて花の蜜みつを吸

う為に、実らずに了った。これは細君が私達の食事する側へ来ての話だった。赤犬は廻つて来て、生徒が投げてやる鳥の骨をシャブった。

食後に、私達は主人に案内されて、黒い土の色の畠の方まで見て廻った。主人の話によると、松林の向うには三千坪ほどの桑畠もあり、畠はその三倍もあつて大おおよそ凡一万坪の広い地面だけあるが、自分の代となつてからは家族も少すくなし、手も届きかねて、荒れたままに成つているところも有る、とのことだ。

私達が訪ねて来たことは、余程主人の心を悦ばせたらしい。主人はむツつりとした鬚のある顔に似合わず種々な話をした。蕎麦そばは十俵の収穫があるとか、試植した銀杏いちよう、杉、竹などは大半枯

れ消えたとか、栗も十三俵ほど播まいてみたが、十四度も山火事に逢ううちに残ったのは既に五六間の高さになつてよく実りはするけれども、樹の数は焼けて少いとか話した。

からまつ落葉松の畠も見えた。その苗は草のように嫩やわらかで、日をうけて

美しくかがやいていた。畠の周圍まわりには地梨も多い。黄に熟したやつは草の中に隠れていても、直ぐと私達の眼についた。尤もつとも、あの実は私達にはめずらしくも無かつたが。

主人は又、山火事の恐しいことや、火に追われて死んだ人のことを話した。これから一里ばかり上つたところに、炭焼小屋があつて、今は柵くぬぎの木炭を焼いているという話もした。

この山番のある尾の石は、高峰と称える場所の一部とか。尾の

石から菱野ひしのの湯までは十町ばかりで、毎日入湯に通うことも出来るといふ。菱野と聞いて、私は以前家へ子守に来ていた娘のことを思出した。あの田舎娘いなかむすめの村は菱野だから。

土地案内を知った体操教師の御蔭で、めずらしいところを見た。こうした山の中は、めつたに私なぞの来られる場所では無い。一度私は歴史の教師と連立つてここよりもっと高い位置にある番小屋に泊ったことも有る。

あそこ 彼処はまだ開墾したばかりで、ここほど林が深くなかった。

別れを告げて尾の石を離れる前に、もう一度私達は番小屋の見える方を振返った。白樺しらかんばなぞの混った木立の中に、小屋へ通う細い坂道、岡の上の樹木、それから小屋の屋根なぞが見えた。

白樺の幹は何処どこの林にあつても眼につくやつだが、あの山桜を丸くしたような葉の中には最早もう美しく黄ばんだのも混っていた。

その六

秋の修学旅行

十月のはじめ、私は植物の教師T君と一緒に学生を引連れて、千曲川の上流を指して出掛けた。秋の日和ひよりで楽しい旅を続けることが出来た。この修学旅行には、八つが岳すその裾すそから甲州へ下り、甲府へ出、それから諏訪すわへ廻つて、そこで私達を待受けていた理学士、水彩画家B君、その他の同僚とも一緒に成つて、和田の方

から小諸こもろへ戻つて来た。この旅には殆んど一週間を費した。私達は蓼たでしな科、八つが岳の長い山脈について、あの周囲を大きく一廻りしたのだ。

その中でも、千曲川の上流から野辺山のべやまが原へかけては一度私が遊びに行ったことのあるところだ。その時は近所の仕立屋の亭主と一緒に旅で、私は以前の記憶を新しくした。その話を君にしようと思う。

甲州街道

小諸から岩村田町へ出ると、あれから南に続く甲州街道は割合

に平坦な、広々とした谷を貫いている。黄ばんだ、秋らしい南佐久の領分が私達の眼めのまえ前に展ひらけて来る。千曲川はこの田畠の多い谷間たにあいを流れている。

一体、犀川さいかわに合するまでの千曲川は、殆んど船の影を見ない。唯ただ、流れるままに任せてある。この一事だけで、君はあの川の性質と光景とを想像することが出来よう。

私は、佐久、小ちいさがた県の高い傾斜から主に谷底の方に下瞰みおろした千曲川をのみ君に語っていた。今、私達が歩いて行く地勢は、それと趣を異にした河域だ。白田うすだ、野沢の町々を通つて、私達は直ぐ河の流れに近いところへ出た。

馬まながし流ながしというところまで岸に添さかのぼうて遡ると河の勢も確かに一変

して見える。その辺には、川上から押流されて来た恐しく大きな石が埋まつている。その間を流れる千曲川は大河というよりも寧ろ大きな谿流けいりゆうに近い。この谿流に面した休茶屋には甲州屋としたところもあつて、そこまで行くと何となく甲州に近づいた気がする。山を越して入込んで来るといふ甲州商あきんど人の往来するのも見られる。

馬流の近くで、学生のTが私達の一行に加わつた。Tの家は宮司うじで、街道からすこし離れた幽邃ゆうすいな松原湖の畔ほとりにある。Tは私達を待受けていたのだ。

白楊どろ、蘆あし、楓かえで、漆うるし、樺かば、檜ならなどの類が、私達の歩いて行く河岸おに生い茂つていた。兩岸には、南みなみ牧まき、北牧、相木あいぎなどの村々

を数えることが出来た。水に近く設けた小さな水車小屋も到るところに見られた。八つが岳の山つづきにある赤々とした大崩壊の跡、金峯、きんぶ、国師、こくし、甲武信、こぶし、三国の山々、みくに、その高く聳えた頂、そび、それから名も知られない山々の遠く近く重なり合った姿が、私達の眺望ちようぼうの中に入った。

日が傾いて来た。次第に私達は谷深く入ったことを感じた。

時々私はT君と二人で立止って、川上から川下の方へ流れて行く水を見送った。その方角には、夕日が山から山へ反射して、深い秋らしい空気の中に遠く炭焼の烟けむりの立登るのも見えた。

この谷の尽きたところに海うみの口村くちがある。何となく川の音も耳について来た。暮れてから、私達はその村へ入った。

山村の一夜

この山国の話の中に、私はこんなことを書いたことが有った。

「清^{しんぷつ}仏戦争の後、仏蘭西^{フランス}兵の用いた軍馬は吾^{わが}陸軍省の手で買取られて、海を越して渡つて来ました。その中の十三頭が種馬として信州へ移されたのです。氣象雄健なアルゼリイ種^{ばひつ}の馬匹が南佐久の奥へ入りましたのは、この時のことで。今日一口に雑種と称えているのは、專^{おも}にこのアルゼリイ種を指したものです。その後亜米利加^{アメリカ}産の浅間号という名高い種馬も入込みました。それから次第に馬匹の改良が始まる、野辺山^{のべやま}が原の馬市は一年増に盛んに

成る、その噂うわさが某それがしの宮殿下の御耳まで届くように成りました。

殿下は陸軍騎兵附の大佐で、かくれもない馬好ですから、御寵ちよう

愛あいのファラリスと云いう亜刺比亜産を種馬として南佐久へ御貸付

になりますと、さあ人氣が立つたの立たないのじゃ有りません。

ファラリスの血を分けた当歳が三十四頭という呼声に成りまし

た。殿下の御喜よろこび悦どんなは何程でしたらう。到頭野辺山が原へ行啓を

仰せ出されたのです」

以前私が仕立屋に誘われて、一夜をこの八つが岳ふもとの麓の村で送ったのは、丁度その行啓のあるという時だった。

静かな山村の夜——河水の氾濫はんらんを避けてこの高原の裾へ移住

したという家々——風雪を防ぐ為の木曾路なぞに見られるような

石を載せた板屋根——岡の上にもあり谷の底にもある灯——鄙びひなた旅舎やどやの二階から、薄明るい星の光と夜の空気とを通して、私はそうゆう會遊の地をもう一度見ることが出来た。

ここは一頭や二頭の馬を飼わない家は無い程の産馬地うまじこだ。馬が土地の人の主なる財産だ。娘が一人で馬に乗って、暗い夜道を平気で通る程の、荒い質朴な人達が住むところだ。

風呂桶ふろおけが下水の溜ための上に設けてあるということはいかにこの辺の人達が骨の折れる生活を営むとはいえ——又、それほど生活を簡易にする必要があるとはいえ——来て見る度たびに私を驚かす。ここから更に千曲川の上流に当って、川上の八カ村というのがある。その辺は信州の中でも最も不便な、白米は唯病人に頂かせる

ほどの、貧しい、荒れた山奥の一つであるという。

私達が着いたと聞いて、仕立屋の親類に成る人が提ちようちん灯つけ
て旅舎やどやへ訪ねて来た。ここから小諸へ出て、長いこと私達の校長
の家に奉公していた娘があつた。

その娘も今では養子して、子供まであるとか。こういう山村に
連関して、下女奉公する人達の一生なぞも何となく私の心を引い
た。

君はまだ「ハリコシ」なぞという物を食つたことがあるまい。

恐らく名前も聞いたことがあるまい。熱い灰の中で焼いた蕎麦餅そばもち
だ。草鞋わらじばき穿で焚火たきびに温あたりながら、その「ハリコシ」を食い食ありさま
話すというが、この辺での炉辺ろばたの楽しい光景なのだ。

高原の上

翌朝私達は野辺山が原へ上った。私の胸には種々な記憶が浮び揚あがつて来た。フアラリスの駒こま三十四頭、牝馬めうま二百四十頭、牡馬おうままで合せて三百余頭の馬匹ばひつが列をつくつて通過したのも、この原へ通う道だった。馬市の立つというあたりに作られた御飯屋かりや、紫と白との幕、あちこちに巢をかけた商人あきんど、四千人余の群集、そんなものがゴチャゴチャ胸に浮んで来た。あの時は、私は仕立屋と連立つて、秋の日のあつた原の一部を歩き廻つたが、今でも私の眼についているのは長野の方から知事に随ついて来た背の高い

参事官だ。白いしなやかな手を振つて、柔かな靴音をさせる紳士
だった。それで居て動作には敏捷びんしょうなところもあつた。丁度あ
の頃私はトルストイの「アンナ・カレニナ」を読んでいたから、
私は自分で想像したヴロンスキイの型タイプをその参事官に当嵌あてはめてみ
たりなぞした。あの紳士が肩に掛けた双眼鏡を取出して、八つが
岳の方に見える牧場を遠く望んでいた様子は——失礼ながら——
私の思うヴロンスキイそのままだった。

あの時の混雑に比べると、今度は原の上も寂しい。最早霜が来
るらしい雑草の葉のあるいは黄に、あるいは焦茶色に成つたのを
踏んで、ポツンポツンと立っている白樺しらかんばの幹に朝日の映あるさ
まなぞを眺ながめながら、私達は板橋村という方へ進んで行つた。こ

の高原の広さは五里四方もある、荒涼とした原の中には、蕎麦そばなぞを蒔まいたところもあつて、それを耕す人達がところどころに僅わずかな村落を形造つている。板橋村はその一番取と付つきにある村だ。

以前、私はこの辺のことを、こんな風に話の中に書いた。

「晴れて行く高原の霧の眺めは、どんなに美しいものでしょう。すこし裾すその見えた八つが岳が次第けわに険しい山骨を躡あわして来て、終しまいに紅色の光を帯びた巔いたまで見られる頃は、影が山から山へ映さしまいいておりました。甲州に跨またがる山脈の色は幾いく度たびび変つたか知れませんが、今、紫がかつた黄。今、灰がかつた黄。急に日があたつて、夫婦の行く道を照し始める。見上げれば、ちぎれちぎれの綿のような雲も浮んで、いつの間にか青空に成りました。ああ朝です。

おとこやま
男 山、金峯山、女 山、甲武信岳、などの山々も残り

なく顕れました。遠くその間を流れるのが千曲川の源、かすかに見えるのが川上の村落です。千曲川は朝日をうけて白く光りました——」

夫婦とあるは、私はその話の中に書こうとした人物だ。一時は私もこうした文体を好んで書いたものだ。

「筒袖つつそでの半天に、股引ももひき、草鞋穿わらじばきで、頬冠ほおかぶりした農夫は、幾群か夫婦の側を通る。鋤くわを肩に掛けた男もあり、肥桶こえおけを担いで腰ひねを捻ひねって行く男もあり、爺おやじの煙草入を腰にぶらさげながら随いて行く児もありました。気候、雑草、荒廃、瘠土せきどなどを相手に、秋の一日の烈はげしい労働が今は最早始まるのでした。

既に働いている農夫もありました。黒々とした「ノツペイ」の畠の側を進んでまいりますと、一人の荒くれ男が汗あせみずく霰あられに成つて、傍目わきめをふらずに畠を打っておりまして。大きな鍬を打込んで、身からだを横にして休たおれるばかりに土の塊かたまりを起す。気の遠くなるような黒土の臭気においは紛ごんとして、鼻を衝つくのでした……板橋村を離れて、旅人の群にも逢いました。

高原の秋は今です。見渡せば木立もところどころ。枝という枝は南向に生延びて、冬季に吹く風の勁つよさも思いやられる。白樺は多く落葉して高く空に突立ち、細葉の楊樹やなぎうずくまは踞うずくまるように低く隠れている。秋の光を送る風が騒しく吹渡ると、草は黄な波を打つて、動き靡なびいて、柏の葉もうらがえりました。

ここかしこに見える大石には秋の日があたつて、寂しい思をさせるのでした。

「ありしおで」の葉を垂れ、弘法菜こうぼうなの花をもつのは爰ここです。

「かしばみ」の實の落ちこぼれるのも爰ここです。

爰ここには又、野の鳥も住み隠れました。笹の葉蔭に巢をつくる雲ひ

雀ばりは、老いて春先ほどの勢も無い。鶉うずらは人の通る物音に驚いて、

時々草の中から飛立つ。見れば不格好ぶかつこうな短い羽をひろげて、舞ま

揚いあがろうとしてやがて、パツタリ落ちるように草の中へ引隠れる

のでした。

外ほかの樹木の黄に枯々とした中に、まだ緑みどり勝がちな蔭をとどめた

ところも有る。それは水の流を旅人に教えるので、そこには雑木

が生茂つて、泉に添うて枝を垂れて、深く根を浸しているのです。

今は村々の農夫も秋の労働に追われて、この高原に馬を放すものも少い。八つが岳山脈の南の裾に住む山梨の農夫ばかりは、冬季の秣まぐさに乏こしいので、遠く爰こゝまで馬を引いて来て、草を刈集めておりました……」

これは主に旧道から見た光景さまだ。趣の深いのも旧道だ。

以前私は新道の方をも取つて、帰り路みちに原の中を通つたこともある。その時は農夫の男女が秣を満載した馬を引いて山梨の方へ帰つて行くのに逢つた。彼等は弁当を食いながら歩いていた。聞いてみると往復十六里の道を歩いて、その間に秣を刈集めなければ成らない。朝暗いうちに山梨を出ても、休んで弁当を食つてい

る暇が無いという。馬を引いて歩きながらの弁当——実に忙しい生活の光景だと思った。

こんな話を私は同行のT君にしなから、旧道を取って歩いて行った。三軒家という小さな村を離れてからは人家を見ない。

この高原が牧場に適するのは、秣が多いからとのことだ。今は馬匹ばひつを見ることも少いが、丘陵の起伏した間には、遊び廻っている馬の群も遠く見える。

白樺しらかんばの下葉は最早落ちていた。枯葉や草のそよぐ音——殊かしわに榭の葉の鳴る音を聞くと、風の寒い、日の熱い高原の上を旅することを思わせる。

「まぐそ鷹たか」というが八つが岳の方の空に飛んでいるのも見た。

私達はところどころにある茶色な櫛ならの木立をも見て通った。それが遠い灰色の雲などを背景バックにして立つさまは、何んとなく茫漠ぼうぼくとした感じを与える。原にある一筋の細い道の傍には、紫色に咲いた花もあつた。T君に聞くと、それは松虫草とか言つた。この辺は古い戦場の跡でもあつて、往おうせき昔海の口の城主が甲州の武士と戦つて、戦死したと言伝えられる場所もある。

甲州境に近いところで、私達は人の背ほどの高さの小梨こなしを見つけた。葉は落ち尽して、小さな赤い実が残つていた。草を踏んで行つてその実を採つて見ると、まだ渋い。中には霜に打たれて、口へ入れると溶けるような味のするもあつた。間もなく私達は甲州の方に向いた八つが岳の側面が望まれるところへ出た。私達は

樹木の少い大傾斜、深い谷々なぞを眼の下にして立った。

「富士！」

と学生は互に呼びかわして、そこから高い峻^{けわ}しい坂道を甲州の方へ下りた。

その七

落葉らくようの一

毎年十月の二十日といえは、初霜を見る。雑木林や平坦たいらな耕地の多い武蔵野むさしのへ来る冬、浅々とした感じの好い都会の霜、そういうものを見慣れている君に、この山の上の霜をお目に掛きたい。ここの桑くわばたけ 畠みたび へ三度や四度もあの霜が来て見給え、桑の葉は忽たちまち縮み上って焼け焦げたように成る、畠の土はボロボロに爛ただれて

了しまう……見ても可おそろ恐しい。猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔かい。降り積る雪はむしろ平和な感じを抱いだかせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ出て、深い秋雨のために色づいた柿の葉が面白いように地くだへ下るのを見た。肉の厚い柿の葉は霜のために焼そこなけ損われたり、縮れたりはしないが、朝日があたって来て霜のゆるむ頃には、重さに堪たえないで脆もろく落ちる。しばらく私はそこに立つて、茫ぼう然ぜんと眺ながめていた位だ。そして、その朝は殊ことに烈はげしい霜の来たことを思った。

落葉の二

十一月に入つて急に寒さを増した。天長節の朝、起出して見ると、一面に霜が来ていて、桑畠も野菜畠も家々の屋根も皆な白く見渡される。裏口の柿の葉は一時に落ちて、道も埋れるばかりであつた。すこしも風は無い。それでいて一葉二葉はずつ静かに地へ下る。屋根の上の方で鳴く雀すずめも、いつもよりは高くいさましそうに聞えた。

空はドンヨリとして、霧のために全く灰色に見えるような日だつた。私は勝手元の焚火たきびに凍えた両手をかざしたく成つた。足袋たびを穿はいた爪先も寒くしみて、いかにも可恐おそろしい冬の近よつて来ることを感じた。この山の上に住むものは、十一月から翌年の三月

まで、殆んど五ヶ月の冬を過ぎねば成らぬ。その長い冬籠りの用意をせねば成らぬ。

落葉の三

木枯が吹いて来た。

十一月中旬のことであつた。ある朝、私は潮の押寄せて来るよ
うな音に驚かされて、眼が覚めた。空を通る風の音だ。時々それ
が沈まったかと思うと、急に復た吹きつける。戸も鳴れば障子も
鳴る。殊に南向の障子にはバラバラと木の葉のあたる音がしてそ
の間には千曲川の河音も平素から見るとずっと近く聞えた。

障子を開けると、木の葉は部屋の内までも舞込んで来る。空は晴れて白い雲の見えるような日であったが、裏の流のところにつ柳なぞは烈風に吹かれて髪を振うように見えた。枯々とした桑畠に茶褐色ちやかつしよくに残った霜葉なども左右に吹き靡なびいていた。

その日、私は学校の往いきと還かえりとに停車場前の通を横ぎつて、真綿帽子やフランネルの布で頭を包んだ男だの、手拭てぬぐいを冠かぶつて両手を袖そでに隠した女だのの行き過ぎるのに遭あつた。往來ゆききの人々は、いずれも鼻汁はなをすすつたり、眼側まぶちを紅くしたり、あるいは涙を流したりして、顔色は白ツぽく、頬ほお、耳、鼻の先だけは赤く成つて、身を縮め、頭をかがめて、寒そうに歩いていた。風を背後うしろにした人は飛ぶようで、風に向つて行く人は又、力を出して物を押すよ

うに見えた。

土も、岩も、人の皮膚の色も、私の眼には灰色に見えた。日光そのものが黄ばんだ灰色だ。その日の木枯が野山を吹きまくる光景は凄まじく、烈しく、又勇ましくもあつた。樹木という樹木の枝は撓み、幹も動揺し、柳、竹の類は草のように靡いた。柿の実で梢に残つたのは吹き落された。梅、李、桜、檮、銀杏などの霜葉は、その一日で悉く落ちた。そして、そこに聚つた落葉が風に吹かれては舞い揚つた。急に山々の景色は淋しく、明るく成つた。

炬燵話
こたつばなし

私が君に山上の冬を待受けることの奈様いかに恐るべきかを話した。しかしその長い寒い冬の季節が又、信濃しなのに於ける最も趣の多い、最も楽しい時であることをも告げなければ成らぬ。

それには先ず自分の身体のことを話そう。そうだ。この山国へ移り住んだ当時、土地慣れない私は風邪かぜを引き易やすくて困った。こんなことでしの凌いで行かれるかと思う位だった。実際、人間の器官は生活に必要な程度に応じて発達すると言われるが、丁度私の身体にもそれに適したことが起つて来た。次第に私は烈しい気候の刺激に抵抗し得るようになつた。東京に居た頃から見ると、私は自分の皮膚が殊に丈夫になつたことを感ずる。私の肺は極く冷い

山の空気を呼吸するに堪えられる。のみならず、私は春先まで枯葉の落ちないあのくぬぎばやし 柵林を鳴らす寒い風の音を聞いたり、真白に霜の来た葱ねぎ 畠はたけを眺めたりして、屋うちの外を歩き廻る度に、こういう地方に住むものでなければ知らないような、一種刺すような快感を覚えるように成った。

草木までも、ここに成長するものは、柔い気候の中にあるものとは違って見える。多くの常磐樹ときわぎの緑がここでは重く黒ずんで見えるのも、自然の消息を語っている。試みに君が武蔵野むさしの辺の緑を見た眼で、ここの礫地いしじに繁茂する赤松の林などを望んだなら、色相の相違だけでも驚くであろう。

ある朝、私は深い霧の中を学校の方へ出掛けたことが有った。

五六町先は見えないほどの道を歩いて行くと、これから野面へ働きに行こうとする農夫、番小屋の側にシヨンボリ立っている線路番人、霧に湿りながら貨物の車を押す中牛馬ちゆうぎゆうばの男なぞに逢った。そして私は——私自身それを感じるように——この人達の手なぞが真紅まつかに腫れるはほどの寒い朝でも、皆な見かけほど氣候に臆してはいないということを知った。

「どうです、一枚着ようじや有りませんか——」

こんなことを言つて、皆な歩き廻る。それでも温あたたかさ熱あつさが取れるという風だ。

それから私は学校の連中と一緒に成つたが、朝霧は次第に晴れて行つた。そこいらは明るく成つて来た。浅間の山の裾すそもすこし

顕あらわれて来た。早く行く雲なぞが眼に入る。ところどころに濃い青空が見えて来る。そのうちに西の方は晴れて、ポツと日あが映あつて来る。浅間が全く見えるように成ると、でも冬らしく成つたという気がする。最早あの山の巔いただけには白髪のような雪が望まれる。こんな風にして、冬が来る。激しい氣候を相手に働くものにつて、一年中の楽しい休息の時が来る。信州名物の炬燵こたつの上には、茶盆だの、漬物鉢つけものばちだの、煙草盆だの、どうかすると酒の道具まで置かれて、その周囲まわりで炬燵話というやつが始まる。

小六月

気候は繰返す。温あたたか暖ぬくな平野の地方ではそれほど際立きわつて感じないようなことを、ここでは切に感ずる。寒い日があるかと思うと、また莫迦ばかに暖い日がある。それから復た一層寒い日が来る。いくら山の上でも、一息に冬の底へ沈んでは了しまわれない。秋から冬に成る頃のこはるびより小春日和は、この地方での最も忘れ難い、最も心地の好い時の一つである。俗に「小こ六ろく月がつ」とはその楽しさを言い顯した言葉だ。で、私はいくらかこの話を引戻して、もう一度十一月の上旬に立返つて、そういう日あたりの中で農夫等が野に出て働いている方へ君の想像を誘おう。

小春の岡辺おかべ

風のすくない、雲の無い、温暖あたたかな日に屋外そとへ出て見ると、日光は眼眩まぶしいほどギラギラ輝いて、静かに眺ながめることも出来ない位だが、それで居ながら日蔭へ寄れば矢張寒い——蔭は寒く、光はなつかしい——この暖かさあたたかさと寒さとの混じ合ったのが、楽しい小春日和だ。

そういう日のある午後、私は小諸こもろの町裏にある赤坂の田圃中たんぼへ出た。その辺は勾配こうばいのついた岡つづきで、田と田の境は例の石垣に成っている。私は枯々とした草土手に身を持たせ掛けて、眺め入った。

手廻しの好い農夫は既に収穫を終った頃だ。近いところの田に

は、高い土手のように稲を積み重ね、穂をこき落した藁はその辺に置き並べてあつた。二人の丸鬚まるまげに結つた女が一人の農夫を相手にして立ち働いていた。男は雇われたものと見え、烏打帽に青つつつぽい筒袖という小作人らしい風体ふうていで、女の機嫌きげんを取り取りもみの俵を造つていた。そのあたりの田の面もには、この一家族の外に、野に出て働いているものも見えなかつた。

古い釜形帽かまがたぼうを冠つて、黄菊一株提げた男が、その田圃道を通りかかつた。

「まあ、一服お吸い」

と呼び留められて、釜形帽と烏打帽と一緒に、石垣よに倚りながら煙草を燻ふかし始めた。女二人は話し話し働いた。

「金さん、お目はどうです——それは結構——ああ、ああ、そうとも——」などと女の語る声が聞えた。私は屋外に日を送ることの多い人達の生活を思つて、聞くとともにしに耳を傾けた。振返つて見ると、一方の畦あぜの上には菅笠すげがさ、下駄、弁当の包らしい物などが置いてあつて、そこで男の燻す煙草の煙が日の光に青く見え

た。

「さいなら、それじゃお静かに」

と一方の釜形帽はやがて別れて行つた。

鳥打帽は鍬くわを執つて田の土をすこしナラし始めた。女二人が錯せ々つせともみ籾ふるを振つたり、稲こきしたりしているに引替え、この雇われた男の方ははかばかしく仕事もしないという風で、すこし働いた

かと思うと、直すぐに鋤を杖にして、是方こつちを眺めてはボンヤリと立っていた。

岡辺は光の海であつた。黒ずんだ土、不規則な石垣、枯々な桑の枝、畦の草、田の面に乾した新しい藁、それから遠くの方に見える森の梢こずえまで、小春の光の充みち溢あふれていないところは無かつた。

私の眼界にはよく働く男が二人までも入つて来た。一人は近くにある田の中で、大きな鋤に力を入れて、土を起し始めた。今一人はいかにも背の高い、瘦やせた、年若な農夫だ。高い石垣の上の方で、枯草の茶色に見えるところに半身あらかわを顕して、モミを打ち始めた。遠くて、その男の姿が隠れる時でも、上つたり下つたりする槌つちだけは見えた。そして、その槌の音が遠い砧きぬたの音のように聞

えた。

午後の三時過まで、その日私は赤坂裏の田圃道を歩き廻った。

そのうちに、はたけわき畠側の柿や雑木に雀の群のかしましいほど鳴

き騒いでいるところへ出た。刈取られた田の面には、最早青い麦の芽が二寸ほども延びていた。

急に私の背後うしろから下駄の音がして来たかと思うと、ぱったり立

止つて、向うの石垣の上の方に向いて呼び掛ける子供の声でした。

見ると、茶色に成つた桑畠を隔てて、親子二人がとりいれ収穫を急いで

いた。子供はお茶の入つたことを知らせに来たのだ。信州人ほど

茶好きな人達も少なからうと思うが、その子供が復たかけだ馳出して行つ

た後でも、親子は時を惜むという風で、母の方は稲穂をこき落す

に余念なく、子息はその粉を叩く方に廻つてすこしも手を休めなかつた。遠く離れてはいたが、手拭を冠つた母の身を延べつ縮めつするさまも、子息のシャツ一枚に成つて後ろ向に働いているさまも、よく見えた。

子供にあんなことを言われると、私も咽喉が乾いて来た。

家へ帰つて濃い熱い茶に有付きたいと思ひながら、元来た道を引返そうとした。斜めに射して来た日光は黄を帯びて、何となく遠近の眺望が改まつた。岡の向うの方には数十羽の雀が飛び集つたかと思うと、やがてまたパツと散り隠れた。

農夫の生活

君はどれ程私が農夫の生活に興味を持つかということに気付いたであろう。私の話の中には、幾度か農家を訪ねたり、農夫に話し掛けたり、彼等の働く光景を眺めたりして、多くの時を送ったことが出て来る。それほど私は飽きない心地で居る。そして、もつともつと彼等をよく知りたいと思つている。見たところ、○penで、質素で、簡単で、半ば野外にさらけ出されたようなのが、彼等の生活だ。しかし彼等に近づけば近づくほど、隠れた、複雑な生活を営んでいることを思う。同じような服装を着け、同じような農具を携え、同じような耕作に従っている農夫等。譬えば、彼等の生活は極く地味な灰色だ。その灰色に幾通りあるか知れな

い。私は学校の暇々に、自分でも鋤を執つて、すこしばかりの野菜を作つてみているが、どうしても未だ彼等の心には入れない。こうは言うものの、百姓の好きな私は、どうかいう機会を作つて、彼等に近づくことを樂みとする。

赤い茅萱ちがやの霜枯れた草土手に腰掛け、
棧さんだわら俵しりを尻しりに敷き、田へ両足を投出しながら、ある日、私は小作する人達の側に居た。

その一人は学校の小使の辰さんで、一人は彼の父、一人は彼の弟だ。辰さん親子は麦畠の「サク」を掛け起していたが、私の方へ来ては休み休み種々な話をした。雨、風、日光、鳥、虫、雑草、土、氣候、そういうものは無くて叶かなわぬものでありながら、又百姓が敵として戦わねば成らないものでもある。そんなことから、

この辺の百姓が苦むという種々な雑草の話が出た。水沢瀉、え

ご、夜這蔓よばいづる、山牛蒡やまごぼう、つる草、蓬よもぎ、蛇莓へびいちご、あけびの蔓、

がくもんじ（天王草）その他田の草取る時の邪魔ものは、私なぞ

の記憶しきれないほど有る。辰さんは田の中から、一ひとかたまり塊の土

を取って来て、青い毛のような草の根が隠れていることを私に示

した。それは「ひようひよう草」とか言った。この人達は又、そ

の中から種々な薬草を見分けることを知っていた。「大抵の御百

姓に、この稲は何だなんて聞いても、名を知らないのが多い位に、

沢山いろいろと御座います」

話好きな辰さんの父親は、女穂めほ、男穂おとこほのことから、浅間の裾

で砂地だから稲も良いのは作れないこと、小麦畠へ来る鳥、稲田

を荒らすという虫類の話などを私にして聞かせた。「地獄蒔まき」と言つて、同じ麦の種を蒔くにも、農夫は地勢に応じたことを考へるといふ話もした。小諸は東西の風をうけるから、南北に向つて「ウネ」を造ると、日あたりも好し、又風の為に穂の擦すれ落ちる憂うれいが無い、自分等は絶えずそんなことを工夫していると話した。「しかし、上州の人に見せたものなら、こんなことでよく麦が取れるツて、消魂たまげられます」

こう言つて、隠居は笑つた。

「この阿爺おとつさんも、ちつたア御百姓の御話が出来ますから、御二人で御話しなすつて下さい」

と辰さんは言い置いて、麦藁帽むぎわらの古いのを冠りながら復た畠

へ出た。辰さんの弟も股引ももひきを膝ひざまでまくし上げ、素足を顕して、兄と一緒に土を起し始めた。二人は腰に差した鎌を取出して、時々鍬かきとに附着する土を搔取かきとつて、それから復た腰を曲こめて錯々せつせとやつた。

「浅間が焼けますナ」

と皆な言い合つた。

私は掘起される土の香を嗅かぎ、弱つた虫の声を聞きながら、隠居から身上話を聞かされた。この人は六十三歳に成つて、まだ耕作を休まずにいるという。十四の時から灸きゆう、占うらなの道楽を覚え、三十時代には十年も人力車くるまを引いて、自分が小諸の車夫の初だといふこと、それから同居する夫婦うわさの噂うわさなぞもして、鉄道に親を引つ

ぶされてからその男も次第に、零落したことを話した。

「お百姓などは、能の無いものの為するこんです……」

と隠居は自ら嘲あざけるように言った。

その時、髪かみの白い、背せの高い、勇健な体格を具えた老農夫が、同じ年格かつこう 好かな仲間と並んで、いずれも土つちの喰くい入いった大きな手に鍬くわを携もえながら、私達の側を挨拶して通とつた。肥こし桶おけを肩かたに掛かけて、威勢いせいよく向むかうの畠道はたけみちを急いそぐ壮年わかもも有あつた。

収獲

ある日、復た私は光岳寺の横手を通り抜けて、小諸の東側にあ

たる岡の上に行つて見た。

午後の四時頃だつた。私が出た岡の上は可成ちようぼう眺望のの好いと
 ころで、大きな波濤なみのような傾斜のの下の方に小諸町の一部が瞰下みおろ
 される位置にある。私の周囲には、既に刈乾した田だの未だ刈取
 らない田だのが連なり続いて、その中である二家族のみが残つて
 収穫とりにいれを急いでいた。

雪の来ない中に早くと、耕作に従事する人達の何かにつけて心
 忙しさが思われる。私の眼前めのみえには胡麻塩頭ごましおの父と十四五ばかり
 に成る子とが互に長い槌つちを振上げて粃もみを打つた。その音がトント
 ンと地に響いて、白い土つちほこり埃が立ち上つた。母は手拭を冠り、
 手てっこう甲を着けて、稲の穂をこいては前にある箕みの中へ落していた。

その傍かたわらには、父子おやこの叩いた粃ふるいを篩ふるいにすくい入れて、腰を曲めながら働いている、黒い日に焼けた顔付の女もあつた。それから赤いたすきがけ襷たすきがけに紺足袋穿という風俗なりで、粃の入つた箕を頭の上に載せ、風に向つてすこしずつ振り落とすと、その度に糝しいなほこりと塵埃ほこりとの混り合つた黄な煙を送る女もあつた。

日が短いから、皆な話もしないで、塵埃ほこりだらけに成つて働いた。岡の向うには、稲田や桑畠を隔てて、夫婦して笠を冠つて働いているのがある。殊にその女房が箕を高く差揚げ風を立てているのが見える。風は身に染みて、冷々ひやひやとして来た。私の眼めのまえ前に働いていた男の子は稲村に預けて置いた袖なし半天を着た。母も上う着わつぱりの塵埃ほこりを払つて着た。何となく私も身体がゾクゾクして来

たから、尻端折しりはしりを下して、着物の上から自分の膝を摩擦しながら、皆なの為ることを見ていた。

鍬を肩に掛けて、岡づたいに家の方へ帰って行く頬冠りの男もあつた。鎌を二挺持ちようち、乳呑児を背中に乗せて、「おつかれ」と言いつつ通過ぎる女もあつた。

眼めのまえ前の父子おやこが打つ槌の音はトントンと忙しく成つた。

「フン」、「ヨウ」の掛声も幽かすかに泄もれて来た。そのうちに、父はへなへなした俵を取出した。腰を延ばして塵埃の中を眺める女もあつた。田の中には黄な粉の山を成した。

その時は最早暮色が薄く迫つた。小諸の町つづきと、かなたの山々の間にある谷には、白い夕靄ゆうもやが立ち籠こめた。向うの岡の道

を帰って行く農夫も見えた。

私はもうすこし辛抱して、と思つて見ていると、父の農夫が糶をつめた俵に縄を掛けて、それを負しよいながら家を指して運んで行く様子だ。今は三人の女が主に成つて働いた。岡辺も暮れかかつて来て、野面のらに居て働くものも無くなる。向うの田の中に居る夫婦者の姿もよく見えない程に成つた。

光岳寺の暮鐘が響き渡つた。浅間も次第に暮れ、紫色に夕映ゆうばえした山々は何時しか暗い鉛色と成つて、唯ただ白い煙のみが暗紫色の空に望まれた。急に野面のらがパツと明るく成つたかと思つと、復た響き渡る鐘の音を聞いた。私の側には、青々とした菜しよを負つて帰つて行く子供もあり、男とも女とも後姿の分らないようなのが足あ

しばや
速に岡の道を下つて行くもあり、そうかと思うと、
上うわ着つぱりの

まま細帯も締めないで、まるで帯とけひろげのように見える荒く
れた女が野獣けもののように走つて行くのもあつた。

南の空には青光りのある星一つあらわれた。すこし離れて、ま
た一つあらわれた。この二つの星の姿が紫色な暮の空にちらちら
と光りを見せた。西の空はと見ると、山の端はは黄色に光り、急に
焦茶色と変り、沈んだ日の反射も最後の輝きを野面のらに投げた。働
いている三人の女の頬冠こころり、曲めた腰、皆な一時に光つた。男の
子の鼻の先まで光つた。最早稲田も灰色、野も暗い灰色に包まれ、
八幡の杜もりのこんもりとした櫓げやきこの梢ずえも暗い茶褐色に隠れて了しまつた。
町かなたの彼方かなたにはチラチラ燈火あかりが点つき始めた。岡つづきの山の裾に

も点いた。

父の農夫は引返して来て復た一俵負しよつて行つた。三人の女や男の子は急ぎ働いた。

「暗くなつて、いけねえナア」と母の子をいたわる声でした。

ほうぎ
「箒探ほうぎしな——箒——」

と復た母に言われて、子はうろうろと田の中を探し歩いた。

やがて母は箒で糶を掃き寄せ、むしろ箆むしろを揚げて取り集めなどする。

女達こつちが是方こつちを向いた顔もハッキリとは分らないほどで、冠かぶつている手拭の色と顔とが同じほどの暗さに見えた。

向うの田に居る夫婦者も、まだ働くと見えて、灰色な稲田の中に暗く動くさまが、それとなく分る。

汽笛が寂しく響いて聞えた。風は遽にわか然私の身にしみて来た。

「待ちろ待ちろ」

母の声がする。男の子はその側で、姉らしい女と共に糺を打った。彼方かなたの岡の道を帰る人も暗く見えた。「おつかれでござす」と挨拶そこそこに急いで通過ぎるものもあつた。そのうちに、三人の女の働くさまもよくは見えない位に成つて、冠つた手拭のみがほの仄かに白く残つた。振り上ぐる槌までも暗かつた。

「藁をまつめろ」

という声もその中で聞える。

私がこの岡を離れようとした頃、三人の女はまだ残つて働いていた。私が振返つて彼等を見た時は、暗い影の動くとしか見えな

かつた。全く暮れ果てた。

巡礼の歌

乳呑児ちのみごを負おぶつた女の巡礼が私の家の門かどに立つた。

寒空には初冬はつふゆらしい雲が望まれた。一目見たばかりで、皆な

氷だということが思われる。氷線の群合とも言いたい。白い、冷
い、透明な尖端せんたんは針のようだ。この雲が出る頃に成ると、一日
は一日より寒気を増して行く。

こうして山の上に来て、自分等のことを思うと、灰色の脚きやは
絆んに古足袋はを穿はいた、旅たび褻やつれのした女の乞食姿こじきにも、心を引

かれる。巡礼は鈴を振って、哀れげな声で御詠歌を歌った。私は家のものと一緒に、その女らしい調子を聞いた後で、五厘銅貨一つ握らせながら、「お前さんは何処ですネ」と尋ねた。

「伊勢でござります」

「随分遠方だネ」

「わしらの方は皆なこうして流しますでござります」

「何処どっちの方から来たんだネ」

「越後路えちごから長野の方へ出まして、諸方ほうほうを廻って参りました。

これから寒くなりますで、暖い方へ参りますでござりますわい」

私は家のものに吩咐いいつけて、この女に柿をくれた。女はそれを風

呂敷包にして、家のものにまで礼を言つて、寒そうに震えながら

出て行つた。

夏の頃から見ると、日は余程南よりに沈むように成つた。吾家の門に出て初冬の落日を望む度に、私はあの「浮雲似故丘」という古い詩の句を思出す。近くにある枯々な樹木の梢は、遠い蓼たでし科なの山々よりも高いところに見える。近所の家々の屋根の間からそれを眺めると丁度日は森の中に沈んで行くように見える。

その八

一ぜんめし

私は外出した序ついでに時々立寄って焚火たきびにあてて貰もらう家がある。鹿島神社の横手に、一ぜんめし、御休おんやすみどころ処ところ、揚羽屋あげばやとした看板の出してあるのがそれだ。

私が自分の家から、この一ぜんめし屋まで行く間には大分知つた顔に逢う。馬場裏の往来に近く、南向の日あたりの好い障子の

ところに男や女の弟子でしを相手にして、石菖蒲せきしょうぶ、万年青おもとなどの青
 い葉に眼を楽ませながら錯々せつせつと着物を造こしらえる仕立屋が居る。すこ
 し行くと、カステラや羊羹ようかんを店頭みせさきに並べて売る菓子屋の夫婦
 が居る。千曲川の方から投網とあみをさげてよく帰つて来る髪えの長い売
きしやト者が居る。馬場裏を出はずれて、三の門という古い城門のみが
 残つた大手の通へ出ると、紺暖簾こんのれんを軒先に掛けた染物屋の人達
 が居る。それを右に見て鹿島神社の方へ行けば、按摩あんまを渡世にす
 る頭まるを円めくめた盲人めくらが居る。駒鳥こまどりだの瑠璃るりだのその他小鳥かごが籠かごの
 中さえずで囀さえずっている間から、人の好きそうな顔を出す鳥屋の隠居が居
 る。その先に一ぜんめしの揚羽屋がある。

揚羽屋では豆腐を造るから、服装なりふりに関わらず働く内儀かみさんがよく

荷を担いで、襦袢の袖で顔の汗を拭き拭き町を売って歩く。朝晩の空に徹る声を聞くと、アア豆腐屋の内儀さんだと直に分る。自分の家でもこの女から油揚げだの雁もどきだのを買う。近頃は息子も大きく成って、母親さんの代りに荷を担いで来て、ハチハイでも奴でもトントンとやるように成った。

揚羽屋には、うどんもある。尤も乾うどんのうでたのだ。一体にこの辺では麵類を賞美する。私はある農家で一週に一度ずつ上等の晩餐に麵類を用うるといふ家を知っている。蕎麦はもとより名物だ。酒盛の後の蕎麦振舞と言えば本式の馳走に成っている。それから、「お煮掛」と称えて、手製のうどんに野菜を入れて煮たのも、常食に用いられる。揚羽屋へ寄って、大鍋のかけてあ

る炉ろ辺ばたに腰掛けて、煙の目にしみるような盛んな焚火にあたつて
 いると、私はよく人々が土足のままでそこに集りながら好物のう
 でだしようどんあたたかさに温熱あたたかさを取るのを見かける。「お豆腐のたきた
 ては奈何いかがでござす」などと云つて、内儀さんが大おお井どんぶりに熱い豆
 腐の露を盛つて出す。亭主も手拭を腰にブラサゲて出て来て、自
 分の息が子供相撲ずもうに弓を取つた自慢話などを始める。

そこは下層の労働者、馬方、近在の小百姓などが、酒を温めて
 貰うところだ。こういう暗い屋根の下も、煤すすけた壁も、汚よごれた人
 々の顔も、それほど私には苦に成らなく成つた。私は往来に繋つない
 である馬の鳴声などを聞きながら、そこで凍えた身体を温める。
 荒くれた人達の話や笑声に耳を傾ける。次第に心易くなつてみれ

ば、亭主が一ぜんめしの看板を張替えたからと言って、それを書くことなぞまで頼まれたりする。

松林の奥

夷えびすこう講こうの翌日、同僚の歴史科の教師W君に誘われて、山あるきに出掛けた。W君は東京の学校出で、若い、元気の好い、書生肌の人だから、山野を跋ぼつしよう渉しょうするには面白い道連だ。

小諸の町はずれに近い、与良町よらまちのある家の門で、

「煮たいて貰もらうのだから、お米を一升も持つておいでなんしょ。柿も持つておいでなんすか——」

こう言ってくる言葉を聞捨てて、私達は頭陀袋ずだぶくろに米を入れ、毛布ケットを肩に掛け、股引尻端折ももひきという面白い風をして、洋傘こうもりを杖につき、それに牛肉を提げて出掛けた。

出発は約束の時より一時間ばかり遅れた。八幡の杜もりを離れたのが、午後の四時半だった。日の暮れないうちにと、岡つづきの細道たどを辿って、浅間の方をさして上った。ある松林に行き着く頃は、夕月が銀色に光って来て、既に暮色の迫るのを感じた。西の山々のかなたには、日も隠れた。私達は後方うしろを振返り振返りして急いで行った。

静かな松林の中にある一筋の細道——それを分けて上ると、浅間の山々が暗い紫色に見えるばかり、松葉の落ち敷いた土を踏ん

で行つても足音もしなかつた。林の中を泄れて射し入る残りの光が私達の眼に映つた。西の空には僅かに黄色が残つていた。鳥の声一つ聞えなかつた。

そのうちに、一つの松林を通越して、また他の松林の中へ入つた。その時は、西の空は全く暗かつた。月の光はこんもりとした木立の間から射し入つて、林に満ちた夕靄は煙るようであつた。細長い幹と幹との並び立つさまは、この夕靄の灰色な中にも見えた。遠い方は暗く、木立も黒く、何となく深く静かに物寂しい。宵の月は半輪で、冴えてはいたが、光は薄かつた。私達が辿つて行く道は松かげに成つて暗かつた。けれども一筋黒く眼にあつて、松葉の散り敷いたところは殊に区別することが出来た。そ

こまで行くと、最早^も人里は遠く、小諸の方は隠れて見えなかつた。時々私達は林の中にたたずんで、何の物音とも知れない極く幽^{かす}かな響に耳を立てたり、暗い奥の方を窺^{うかが}うようにして眺^{なが}め入つたりした。先に進んで行くW君の姿も薄暗く此方^{こち}方を向いてもよく顔が分らない程の光を辿つて、猶^{なほ}奥深く進んだ。すべての物は暗い夜の色に包まれた。それが靄の中に沈み入つて、力のない月の光に朦^{もろろ}朧と影のように見えた。ある時は、芝の上に腰掛けて、肩に掛けた物を卸し、足を投出して、しばらく休んで行つた。私は既に非常な疲労を覚えた。というは、腹具合が悪くて、飯を一度食わなかつたから。で、W君と一緒に休む時には、そこへ倒れるように身を投げた。やがて復^こた洋傘^{こうもり}に力を入れて、起^たち上つた。

いくつか松林を越えて、広々としたところへ出た。私達二人の影は地に映って見えた。月の光は明るくなったり暗くなったりした。そのうちに私達は大きな黒いものを見つけた。七ひろ石だ。「もう余程来ましたかねえ。どうも非常に疲れた。足が前へ出なさきくなつた」

「私も夜道はしましたが、こんなに弱つたことはありません」
「ここで一つ休もうじやありませんか」

「弱いナア。ああああ」

こう言合つて、勇気を鼓して進もうとすると、疲れた足の指先は石に蹉つまずいて痛い。復たぐつたりと倒れるように、草の上へ横に成つて休んだ。そこは浅間の中腹にある大傾斜のところで、あた

りは茫漠ぼうばくとした荒れた原のように見えた。越えて来た松林は暗い雲のようで、ところどころに黒い影のような大石が夜色に包まれて眼に入るばかりだ。月の光も薄くこの山の端はに満ちた。空の彼方かなたには青い星の光が三つばかり冴えて見えた。灰白い夜の雲も望まれた。

深山の燈影

赤々と障子に映る燈火ともしびを見た時の私達の喜びは譬えたとようもなかった。私達は漸くようやのことで清水しみずの山小屋に辿り着いた。

小屋の番人はまだ月明りの中で何か取片付けて働いている様子

であつた。私達は小屋へ入つて、疲れた足を洗い、脚絆きやはんのまま
で炉辺ろばたに寛くつろいだ。W君は毛布を身に纏まといながら、

「本家の小母さんが、お竹さんにどうか明日あすは大根洗いに降りて
来て下さいって——それにKさんの結納ゆいのうが来ましたから、小母
さんも見せたいからッて。それは立派なのが来ましたよ」

お竹さんは番人の細君のことで、本家の小母さんとは小諸を出
がけに私達にすこしは多く米を持って行けと注意してくれた人だ。
W君はこの人達と懇意で、話し方も忸なれなれ々々しい。

米を入れた頭陀袋、牛肉の新聞紙包、それから一かけの半襟はんえり
なぞが、土産みやげがわりにそこへ取出された。

番人は小屋へ入りがけに、

「肉には葱ねぎが宜よろしゅうごわしようナア」

と言うと、W君も笑つて、

「ああ葱は結構」

「序ついでに、芋があつたナア——そうだ、芋も入れるか」と番人は屋そ外へ出て行つて、葱、芋の貯えたのを持つて来た。やがて炉辺へドツカと座り、ぶすぶす煙る雑木を大火箸おおひばしであらけ、ぱつと燃え付いたところへ櫟くぬぎの枝を折りくべた。火勢が盛んに成ると、皆みなの顔も赤々と見えた。

番人はまだ年も若く、前の年の四月にここへ引移つて、五月に細君を迎えたという。火に映る顔は健すこやかに輝き眼は小さいけれど正直な働き好きな性質を表していた。話をしては大きく口を開い

て、頭を振り、舌の見える程に笑うのが癖のようだ。その笑い方はすこし無作法ではあるが、包み隠しの無いところは嫌味の無い面白い若者だ。直に懇意に成れそうな人だ。細君はまた評判の働き者で、顔色の赤い、髪の厚く黒い、どこかにまだ娘らしいところの残った、若く肥った女だ。まことに似合った好い若夫婦だ。

部屋の方は暗いランプに照らされていて、炉辺のみ明るく見えた。小屋の庭の隅には竈が置いてあって、そこから煙が登り始めた。飯をたく音も聞えて来た。細君はザクザクと葱を切りながら、「私は幼少い時から寂しいところに育ちやしたが、この山へ来て慣れるまでには、真実に寂しい思をいたしやした」

こう山住の話をして聞かせる。亭主も私達が訪ねて来たこと

を嬉しそうに、その年作つたという葱の出来などを話し聞かせて夫婦して夕飯の仕度をしてくれた。炉には馬に食わせるとかの馬やがいも鈴薯を煮る大鍋が掛けてあつたが、それが小鍋に取替えられた。細君が芋を入れれば、亭主はその上へ蓋ふたを載せる。私達は「手鍋提げても」という俗謡うたにあるような生活を眼まのあたり見た。

小猫は肉の香を嗅ぎつけて新聞紙包の傍そばへ鼻を押しつけ、亭主に叱しかられた。やがて私達の後を廻つて遠慮なくW君の膝に上つた。「野郎」と復た亭主に叱られて炉辺に縮み、寒そうに火を眺めて目を細くした。

「私はこの猫という奴が大嫌だいきらいですが、本家でもって無理に貰つてくれッて、連れて来やした」

と亭主は言つて、色の黒い野鼠がこの小屋へ来ていたずらすることなど、山の中らしい話をして笑つた。

「すこし煙けむつたくなつて来たナア。開けるか」とW君は起上つて、細目に小屋の障子を開けた。しばらく屋外そとを眺めて立っていた。

「ああ好い月だ、冴さえ冴えとして」

と言いながらこの同僚が座に戻る頃は、鍋から白い泡あわを吹いて、湯気も立のぼつた。

「さア、もういいよ」

「肉を入れて下さい」

「どれ入れるかナ。一寸待てよ、芋を見て——」

亭主は貝匙かいさじで芋を一つ掬すくつた。それを鍋蓋の上に載せて、い

くつかに割つて見た。芋は肉を入れても可い程に煮えた。そこで新聞紙包が解かれ、竹の皮が開かれた。赤々とした牛ぎゆうの肉のすこし白い脂肪あぶらも混つたのを、亭主は箸で鍋の中に入れた。

「どうも甘うまそうにおな匂においがする。こんな御土産なら毎日でも頂きたい」と亭主がW君に言った。

細君は戸棚とだなから、膳ぜん、茶碗ちやわん、塗箸ぬりばしなどを取出し、飯は直に釜から盛つて出した。

「どうしやすか、この炉辺の方がめずらしくて好うごわしよう」と細君に言われて、私達は焚火を眺め眺め、夕飯を始めた。その時は余程空腹を感じていた。

「さア、肉も煮えやした」と細君は給仕しながら款待もてなし顔がおに言っ

た。

「お竹さん、勘定して下さい、沢山頂きますから」とW君も心易い調子で、「うまい、この葱はうまい。熱、熱。フウフウ」

「どうも寒い時は肉に限りますナア」と亭主は一緒にやった。

三杯ほど肉の汁をかえて、私も盛んな食欲を満たした。私達人人は帯をゆるめるやら、洋服のズボンをゆるめるやらした。

「さア、おかえなすつて——山へ来て御飯おまんまがまずいなんて仰るおつしや方はありませんよ」

と細君が言ううち、つとW君の前にあつた茶碗を引きたくつた。W君はあわてて、奪い返そうとするように手を延ばしたが、間に合わなかつた。細君はまた一ぱい飯を盛つて勧めた。

W君は笑いながら頭を抱かかえた。「ひどいひどい——ひどくやられた」

「えッ、やられた？」と亭主も笑った。

「その位はいけやしよう」

「どうして、もう沢山頂いて、実際入りません」とW君は溜息ためいき吐いた後で、「チ、それじゃ、やるか。どうも一ぱい食った——ええ、香の物でやれ」

楽しい笑声の中に、私は夕飯を済ました。「お前も御馳走に成れ」という亭主の蔭で、細君も飯を始めた。戸棚の中に入れられた小猫は、物欲しそうに鳴いた。山の中のことで、亭主は牛肉を包んだ新聞紙をもめずらしそうに展ひろげて、読んだ。W君はあまり

詰込み過ぎたかして、毛布を冠ったまま暫時しばらくあおのけに倒れて
いた。

炭焼、うさぎ兎狩の話なぞが夫婦の口からかわるがわる話された。や
がて細君も膳を片付け、馬の飲料にとフスマを入れた大鍋を炉に
掛けながら、ある夜この山の中で夫の留守に風が吹いて新築の家
の倒れたこと、もしこの小屋の方へ倒れて来たらその時は馬を引
出そうと用意したに、あちら彼方に倒れて、おそろ可恐しい思をしたことを話
した。めつたに外へ泊ったことの無い夫がその晩に限って本家で
泊った、とも話した。

新築の家というは小屋に近く建ててあつた。私達はその家の方
へ案内されて、そこで一晩泊めて貰つた。漸く普請が出来たばか

りだとか、戸のかわりに唐紙からかみを押つけ、その透間から月の光も泄もれた。私達は毛布にくるまり、燈火あかりも消し、疲れて話もせず眠った。

山の上の朝飯

翌朝の三時頃から、同じ家の内に泊っていた土方は最早起き出す様子だ。この人達の話声は、前の晩遅くまで聞えていた。雉子きじの鳴声を聞いて、私達も朝早く床を離れた。

私達は重かさなり畳かさなつた山々を眼の下に望むような場処へ来ていた。谷底はまだ明けきらない。遠い八ヶ岳は灰色に包まれ、その

上に紅い雲が棚引いた。たなび次第に山の端も輝いて、紅い雲が淡黄に
変る頃は、夜前真黒であつた落葉松からまつの林も見えて来た。

亭主と連立つて、私達は小屋の周囲まわりにある玉菜畠、葱畠、菊畠
などの間を見て廻つた。大根乾した下の箱の中から、家鴨あひるが二羽
ばかり這出した。はいだそして喜ばしそうに羽ばたきして、そこいらに
こぼれたものを拾つては、首を縮めたり、黄色い口くちばし嘴を振つた
り、ひよろひよると歩き廻つたりした。

亭主は私達を馬小屋の前に連れて行つた。赤い馬が首を出して、
鼻をブルブル言わせた。冬季のことだから毛も長く延び、背は高
く、目は優しく、肥大な骨格の馬だ。亭主は例のフスマに芋、葱
のうでたのを混ぜ、ツタを加えて搔廻し、それを大桶おおおけに入れて、

馬小屋の鍵かぎに掛けて遣やつた。馬はあまえて、朝飯欲あさめししそうな顔付かほづらをした。

「廻まわつて来い」

と亭主ていしゅが言うと、馬は主人の言葉を聞分きかけて、ぐるりと一度小屋の内を廻まわつた。

「もう一度——」

と復またた亭主ていしゅが馬の鼻はな面づらを押おしやつた。それからこの可憐かれんな動物は桶の中へ首を差込むことを許された。馬がゴトゴトさせて食そはう傍そばで、亭主ていしゅは一斗五升の白水が一吸に尽つされることを話して、私達を驚おどかした。

山上の雲は漸ようやく白く成なつて行いつた。谷底も明あけて行いつた。光の

触れるところは灰色に望まれた。

細君が膳の仕度の出来たことを知らせに来た。めずらしいところで、私達は朝の食事をした。亭主は食べ了つた茶碗おわに湯を注ぎ、それを汁しるわん椀わんにあけて飲み尽し、やがて箱膳はこぜんの中から布巾ふきんを取出して、茶碗も箸はしも自分で拭ふいて納めた。

もう一度、私達は亭主と一緒に小屋を出て、朝日に光る山々を見上げ、見下した。亭主は望遠鏡まで取出して来て、あそこに見えるのが渋の沢、その手前の窪くぼみが靈泉寺の沢、と一々指して見せた。八つが岳、蓼たでしな科なの裾すそ、御牧みまきが原、すべて一望の中にあつた。

層を成して深い谷底の方へ落ちた断崖の間には、桔梗ききよう、山辺やまべ、

横取、多計志、八重原などの村々を数えることが出来る。白壁も遠く見える。千曲川も白く光つて見える。

十二月に入ると山の雉は畠へ下りて来る、どうかすると人の足許より飛び立つことがある。兎も雪の中の麦を喰いに寄る。こうした話が私達にはめずらしい。

その九

雪国のクリスマス

クリスマスの夜とその翌日を、私は長野の方で送った。長野測候所に技手を勤むる人から私は招きの手紙を受けて、未知の人々に逢うために、小諸を^た発ち、汽車の窓から田中、上田、坂木などの駅々を通り過ぎて、長野まで行った。そこにある測候所を見たいと思ったのがこの小さな旅の目的の一つであった。私はそれも

果した。

雪国のクリスマス——雪国の測候所——と言っただけでも、すでに何物か君の想像を動かすものがあるであろう。しかし私はその話を君にする前に、いかにこの国が野も山も雪のために埋もれて行つたかを話したいと思う。

毎年十一月の二十日前後には初雪を見る。ある朝私は小諸の住居^{まい}で眼が覚めると、思いがけない大雪が来ていた。塩のように細かい雪の降り積^{つもる}のが、こういう土地の特色だ。あまりに周囲^{あたり}の光景が白々としていた為か、私の眼にはいくらか青みを帯びて見える位だった。朝通いの人達が、下駄の齒につく雪になやみながら往来^{たど}を辿るさまは、あたかも暗夜を行く人に異ならない。赤い毛^ケ

布ツトで頭を包んだ草鞋わらじばき穿の小学生徒の群、町家の軒下にシヨンボリと佇立たたずむ鶏、それから停車場のほとりに貨物を満載した車の上
にまで雪の積ったさまなぞを見ると、降った、降った、とそう思
う。私は懐古園かいこえんの松に掛った雪が、時々崩れ落ちる度たびに、濛もうも
々とした白い烟けむりを揚げるのを見た。谷底にある竹の林が皆な草
のように臥ねて了ったのをも見た。

岩村田通いの馬車がこの雪の中を出る。馬丁の吹き鳴らす喇叭らっぱ
の音が起る。薄い塵ごせを掛けた馬の身からだはビツシヨリと濡ぬれて、粗あらく乱
れた鬣たてがみからは雫しずくが滴したたる。ザクザクと音のする雪の路を、馬車の輪
が滑すべり始める。白く降り埋うづんだ道路の中には、人の往来ゆききの跡だけ
一筋赤く土の色になって、うねうねと印ながめしたさまが眺ながめられる。家

ごとに出て雪をかく人達の混雑したさまも、こういう土地でなければ見られない光景だ。ありさま

薄い靄か霧かが来て雪のあとの町々を立ち罩こめた。その日の黄た
そがれどき昏時のことだ。晴れたナと思ひながら門口に出て見ると、ぱら
ぱらと冷いのが襟えりにかかる。ヤア降つてるのかと、思わず髪さわに触
ると、霧のように見えたのは矢張細かい雪だということが知れる。
二度ばかり搔取かきとった路も、また薄白くなって、夜に入れば、時々
家の外で下駄の雪の落す音が、ハタハタと聞える。自分の家へ客
でも訪れるのかと思うと、それが往来の人々であるには驚かされ
る。

雪明りで、暗いなかにも道は辿ることが出来る。町を通う人々

の提ちようちん灯の光が、夜の雪に映つて、花やかに明るく見えるなぞも Picturesque だ。

君、私はこの国に於ける雪の第一日のあらしを君に語つた。この雪が残らず溶けては了われないことを、君に思つてみて貰もらいたい。殊に寒い日蔭、庭だとか、北側の屋根だとかには、何時までも消え残つて、降り積つた上へと復た積るので、その雪の凍つたのが春までも持越すことを思つてみて貰もらいたい。

しかし、これだけで未だ、私がこういう雪国に居るといふ感じを君に伝えるには、不充分だ。その雪の来た翌日になつて見ると、屋根に残つたは一尺ほどで、軒先には細い氷柱つららも垂下り、庭の林りんも倒れ臥ふしていた。鶏の声まで遠く聞えて、何となくすべてが

引^{ひき}被^{かぶ}せられたように成った。雪の翌日には、きまりで北の障子が明るくなる。灰色の空を通して日が照し始めると雪は光を含んでキラキラ輝く。見るもまぶしい。軒から垂れる雫の音は、日がない一日単調な、退屈な、侘^{わび}しく静かな思をさせる。

更に小諸町裏の田圃^{たんぼわき}側へ出て見ると、浅々と萌^もえ出た麦などは皆な白く埋もれて、岡つづきの起き伏すさまは、さながら雪の波の押し寄せて来るようである。さすがに田と田を区別する低い石垣には、大小の石の面も顕われ、黄ばんだ草の葉の垂れたのが見られぬでもない。遠い森、枯々な梢、一帯の人家、すべて柔かに深い鉛色を帯びて見える。この鉛色——もしくはすこし紫色を帯びたのが、これからの色彩の基調かとも言いたい。朦^{もうろう}朧とし

て、いかにもおぼつかないような名状し難い世界の方へ、人の心を連れて行くような色調だ。

翌々日に私はまた鶴沢という方の谷間たにあいへ出たことがあった。

日光が恐しく烈しい勢で私に迫って来た。四面皆な雪の反射は殆んど堪えられなかった。私は眼を開いてハッキリ物を見ることも出来なかつた。まぶしいところは通り過こして、私はほとほと痛いような日光の反射と熱とを感じた。そこはだらだらと次第下りに谷の方へ落ちてゐる地勢で、高低の差別なく田畠もしくは桑畠に成つてゐる。一段々と刻んでは落ちてゐる地層の側面は、焦茶色の枯草に掩おおわれ、ところどころ赤黝あかぐろい土のあらわれた場所もある。その赤土の大波の上は枯々な桑畠で、ウネなりに白い雪が

積つて、日光の輝きを受けていた。その大波を越えて、蓼科の山脈が望まれ、遙かに日本アルプスの遠い山々も見えた。その日は私は千曲川の凄まじい音を立てて流れるのをも聞いた。

こんな風にして、溶けたと思う雪が復た積り、顕れた道路の土は復た隠れ、十二月に入つて曇つた空が続いて、日の光も次第に遠く薄く射すように成れば、周囲は半ば凍りつめた世界である。

高い山々は雪嵐に包まれて、全体の姿を顕す日も稀だ。小諸の停車場に架けた筧からは水が溢れて、それが太い氷の柱のように成る。小諸は降らない日でも、越後の方から上つて来る汽車の屋根の白いのを見ると、ア彼方は降つてるナと思うこともある。冬至近くに成れば、雲ともつかぬ水蒸気の群が細線の集合の如く寒い

空に懸り、その蕭条しょうじょうとした趣は日没などに殊に私の心を引く。

その頃には、軒の氷柱つららも次第に長くなつて、尺余に及ぶのもある。

草葺くさぶきの屋根を伝う濁つた雫が凍るのだから、茶色の長い剣を見

るようだ。積りに積る庭の雪は、やがて縁側より高い。その間か

ら顔を出す石南木しやくなぎなどを見ると、葉は寒そうにべたりと垂れ、

強い蕾つぼみだけは大きく堅く附着くつついている。冬籠りする土の中の虫同

様に、寒気の強い晩などは、私達の身体も縮こまつて了う……

こういう寒さと、凍つた空気とを衝ついて、私は未知の人々に逢

う楽みを想像しながら、クリスマスのあるという日の暮方に長野

へ入つた。例の測候所の技手の家を訪ねると、主人はまだ若い人

で、炬燵こたつにあたりながらの気象学の話や、文学上の精くわしい引証談

なぞが、私の心を楽ませた。ラスキンが「近代画家」の中にある雲の研究の話なども出た。ラスキンが雲を三層に分けた頃から思うと、九層の分類にまで及んだ近時の雲形の研究は進んだものだ。こう主人が話しているところへ、ある婦人の客も訪ねて来た。

私が主人から紹介されたその若い婦人は、牧師の夫人で、主人が親しい友達であるという。快活な声で笑う人だった。その晩歌うクリスマススの唱歌で、その主人の手に成ったものも有るとのことだった。やがて降クリスマス誕祭を祝う時刻も近づいたので、私達は連立って技手の家を出た。

私が案内されて行つた会堂風の建物は、丁度坂に成つた町の中途にあつた。そこへ行くまでに私は雪の残つた暗い町々を通つた。

時々私は技手と一緒に、凍った往来に足を留めて、後部うしろの方に起る女おんな連なれんの笑声を聞くこともあった。その高い楽しい笑声が、寒い冬の空気に響いた時は、一層雪国の祭の夜らしい思をさせた。後に成つて私は、若い牧師夫人が二度ほど滑すべつて転ころんだことを知った。

赤々とした燈火は会堂の窓を泄もれていた。そこに集っていた多勢の子供と共に、私は田舎いなからしいクリスマスマスの晩を送った。

長野測候所

翌朝、私は親切な技手に伴われて、長野測候所のある岡の上に

登った。

途次^{みちみち}技手は私を顧みて、ある小説の中に、榛名^{はるな}の朝の飛雲の赤色なるを記したところが有ったと記憶するが、飛雲は低い処を行くのだから、赤くなるということは奈何^{いか}などと話した。さすが専門家だけあって話すことがすべて^{くわ}精しかった。

測候所は建物としては小さいが、眺望^{ちようぼう}の好い位置にある。

そこは東京の気象台へ宛てて日毎の報告を造る場所に過ぎないと言ふけれども、万般の設備は始めての私にはめずらしく思われた。雲形や気温の表を製作しつつ日を送る人々の生活なぞも、私の心を引いた。

やがて私は技手の後に随いて、狭い楼階^{はしごだん}を昇り、観測台の

上へ出た。朝の長野の町の一部がそこから見渡される。向うに連なる山の裾には、冬らしい靄もやが立ち罩こめて、その間の空虚なところだけ後景が明かに透けて見えた。

風力を測る器械の側で、技手は私に、暴風雨あらしの前の雲——例えたとば広濶こうかつな海岸の地方で望まれるようなは、その全形をこの信濃しなのの地方で望み難いことを話してくれた。その理由としては、山が高くて、気圧の衝突から雲はちぎれちぎれに成るといふ説明をも加えてくれた。

「雲の多いのは冬ですが、しかし単調ですね。変化の多いと言つたら、矢張夏でしょう。夏は——雲の量に於いては——冬の次でしようか。雲の妙味から言えば、私は春から夏へかけてだろう

と思ひますが……」

こう技手は言つて、それから私達の頭の上に群り集る幾層かの雲を眺めていたが、思ひ付いたように、

「あの雲は何と御覧ですか」

と私に指して尋ねた。

私も旅の心を慰める為に、すこしばかり雲の日記などをつけて見ているが、この的確に専門家から問を出された時は、一寸返事に困った。

鐵道草

鉄道が今では中仙道なかせんどうなり、北国街道ほっこくなりだ。この千曲川の沿岸に及ぼす激烈な影響には、驚かれるものがある。それは静かな農民の生活までも変えつつある。

鉄道は自然界にまで革命を持来もちきたした。その一例を言えば、この辺で鉄道草と呼んでいる雑草の種子は鉄道の開設と共に進入きたしたものであるという。野にも、畠にも、今ではあの猛烈な雑草の蔓延まんえんしないところはない。そして土質を荒したり、固有の草地を制服したりしつつある。

屠牛とぎゆうの一

上田の町はずれに屠牛場のあることは聞いていたがそれを見る機会もなしに過ぎた。丁度上田から牛肉を売りに来る男があつて、その男が案内しようと言つてくれた。

正月の元日だ。新年早々屠牛を見に行くとは、随分物数寄ものずきな話だとは思つたが、しかし私の遊意は勃ほつ々ほつとして制おさえ難いものがあつた。朝早く私は上田をさして小諸の住居すまいを出た。

小諸停車場には汽車を待つ客も少い。駅夫等は集つて歌留多かるたの遊びなぞしていた。田中まで行くと、いくらか客を加えたが、その田舎らしい小さな駅は平素いづもより更に閑静しずかで、停車場の内で女子供の羽子をつくさまも、汽車の窓から見えた。

初春とは言いながら、寒い黄ばんだ朝日が車窓の硝子ガラスに射し入

った。窓の外は、枯々な木立もさびしく、野にある人の影もなく、ひっそりとして雪の白く残った谷々、石垣の間の桑くわばたけ、畠、茶色な櫟くぬぎの枯葉などが、私の眼に映った。車中にも数えるほどしか乗客がない。隅すみのところには古い帽子を冠り、古い外套がいとうを身に纏まとい赤い毛布ケットを敷いて、まだ十二月らしい顔付しながら、さびしうに居眠りする鉄道員もあつた。こうした汽車の中で日を送つてゐる人達のこととも思いやられた。(この山の上の単調な鉄道生活に堪たえ得るものは、実際は越後人ばかりであるとか)

上田町に着いた。上田は小諸の堅実にひきかえ、敏捷びんしょうを以て聞えた土地だ。この一般の気風というものも畢竟地勢つまりの然らしめるところで、小諸のような砂地の傾斜に石垣を築いてその上に

骨の折れる生活を営む人達は、勢い質素に成らざるを得ない。寒い氣候と瘦せた土地とは自然に勤勉な人達を作り出した。この畠からは上州のような豊富な野菜は受取れない。堅い地大根の沢庵を噛み、朝晩味噌汁に甘んじて働くのは小諸である。十年も昔に流行ったような紋付羽織を祝儀不祝儀に着用して、それを恥ともせず、否むしろ粗服を誇りとするが小諸の旦那衆である。けれども私は小諸の質素も一種の形式主義に落ちてゐるのを認める。私は、他所で着て来たやわらか物を脱いでそれを綿服に着更えながら小諸に入る若い謀反人のあることを知っている。要するに、表面は空しく見せてその実豊かに、表面は無愛想でもその実親切を貴ぶのが小諸だ。これが生活上の形式主義を産む所以であろう

と思う。上田へ来て見ると、都会としての規模の大小はさて措き、又実際の殷富とみの程度はとにかく、小諸ほど陰気で重々しくない。小諸の商人は買ったか御買いなさいという無愛想な顔付をしていて、それで割合に良い品を安く売る。上田ではそれほどノンキにしていられない事情があると思う。絶えず周囲に心を配って、旧ふるい城下の繁昌を維持しなければ成らないのが上田の位置だ。店々の飾りつけを見ても、競って顧客の注意を引くように快く出来ている。塩、鰹節かつぶし、太物ふともの、その他上田で小売する商品の中には、小諸から供給する荷物も少くないという。

思わず私は山の上にある都会の比較を始めた。その日は牛のつぶしぞ初めとかで、屠牛場の取締をするという肉屋を訪ねると、例

の籠かごを肩に掛けて小諸まで売りに来る男が私を待っていてくれた。私は肉屋の亭主にも逢った。この人は口数は少いが、何となく言葉に重味があつて、牛のことには明るい人物だった。

肉屋の若者等は空車をガラガラ言わせて町はずれの道を引いて行つた。私達もその後つに随ついて、細い流を渡り、太郎山の裾へ出た。新しい建物の前に、鋭い眼付の犬が五六匹も群がっていた。そこが屠牛場だった。

黒く塗つた門を入ると、十人ばかりの屠手が居た。その中でも重立かしろつた頭は年の頃五十あまり、万事に老練な物の言振りをする男で、肥つた頬あいきょうに愛嬌あいきょうを見せながら、肉屋の亭主に新年の挨拶けいりなどをした。検査室にも、待合室にも松が飾つてあつて、繫けいり

留^{ゆうじよう}場^{じよう}では赤い牝牛^{めうし}が一头と、黒牛が二頭繋いであつた。

中央の庭には一頭の豚を入れた大きな箱も置いてあつた。この庭は低い黒塗りの板^{いた}塀^{べい}を境にして、屠^{とじよう}場^{じよう}に続いている。

屠牛の二

黒い外套に烏打帽を冠つた獣医が入つて来た。人々は互に新年の挨拶^{とりかわ}を取換^{とりかわ}した。屠手の群はいずれも白い被^{うわ}服^{つぱり}を着け、素足^{ひやめし}に冷飯草履^{ひやめし}という寒そうな風^{ふう}体^{てい}で、それぞれ支度を始める。庭の隅にかがんで鋭い出刃包^{でば}丁^{ちよう}を磨^とぐのもある。肉屋の亭主は板塀に立て掛けてあつた大^{おお}鉞^{まさかり}を取つて私に示した。薪^{まきわ}

割を見るような道具だ。一方に五六寸ほどの尖とがった鉄管が附けてある。その柄には乾いた牛の血が附着していた。屠殺とぎつに用いるのだそうだ。肉屋の亭主は沈着おちついた調子で、以前には太い釘くぎの形たち状したのを用いたが、この管状の方が丈夫で、打撃に力が入ることなどを私に説ときあか明あした。

南部産の黒い牡牛おうれしが、やがて中央の庭へ引出されることに成った。その鼻息も白く見えた。繋いであつた他の二頭にわは遽にわかに騒さわぎ始めた。屠手の一人は赤い牡牛の傍そばへ寄り、鼻面はなづらを押えながら「ドウ、ドウ」と言つて制する。その側には雑種の牡牛が首を左右に振り、繋がれたまま柱を一廻りして、しきりに逃のがれよう逃のがれようとしている。殆ほとんど本能的に、最後の抵抗を試みんとするが

ごとくに見えた。

死地に牽ひかれて行く牡牛はむしろ冷静で、目には紫色のうるみを帯びていた。皆な立つて眺ながめている中で獣医は彼方あちこち此方と牛のまわり周囲を廻つて歩きながら、皮をつまみ、咽喉のどを押え、角を叩きながら、最後に尻尾しつぽを持上げて見た。

検査が済んだ。屠手は多勢よ寄つて群たかつて、声を励ましたり、叱つたりして、じつとそこに動かない牛を無理やりに屠場の方へ引き入れた。屠場は板敷で、丁度浴場の広い流し場のように造られてある。牛の油断を見すまして、屠手の一人は細引を前後の脚あしの間に投げた。それをぐツと引絞めると、牛は中心を保てない姿勢に成つて、重い体からだ軀を横倒しに板の間の上に倒れた。その前額の

あたりを目がけて、例の おおまさかり 大 鉞 の鋭い尖った鉄管を骨も砕けよとばかりに打ち込むものがあつた。牛は目を廻し、足をバタバタさせて、鼻息も白く、かす 幽かな うめ 呻き声を残して置いて いき 氣息も絶えんとした。

この南部牛のまだ氣息の残つたのを とりま 取繞いて、屠手のあるものは尻尾を引き、あるものは細引を引張り、あるものは出刃でもつて咽喉のあたりを切つた。そのうちに多勢して、倒れた牛の上に乗つて、茶色な腹の あたり 辺と言わず、背と言わず、とんとん踏みつけると、赤黒い血が切られた咽喉のところから流れ出した。砕けた前額の骨の間へは棒を深く差込んで えぐ 抉り廻すものもあつた。氣息のあるうちは、牛は身を もだ 悶えて、うめ 呻いたり、足をヒクヒクさせた

りして苦んだが、血が流れ出した頃には全く氣息も絶えた。

黒い大きな牛の倒れた姿が——前後の脚は一本ずつ屠場の柱にくくりつけられたままで、私達の眼めのまえ前に横たわっていた。屠手の一人はその茶色の腹部の皮を縦に裂いて、見る間に脚の皮を剥むき始めた。また一人は、例の大鉞を振って、牛の頭を二つ三つ打つうちに、白い尖った角がポロリと板の間へ落ちた。この南部牛の黒い毛皮から、白い脂肪に包まれた中身が顛あわられて来たのは、間もなくであった。

赤い牝牛が屠場へ引かれて来た。

屠牛の三

赤い牝牛に続いて、黒い雑種の牡も、型の如くに瞬またたく間に倒された。広い屠場には三頭の牛の体が横たわった。ふと板塀の外に豚の鳴き騒ぐ声が上がった。庭へ出て見ると、白い、肥った、脚の短い豚が死物狂いに成つて、哀かなしく可笑おかしげな声を揚げながら、庭中逃げ廻つていた。子供まで集つて来た。追うものもあれば、逃げるものもあつた。肉屋の亭主が手早く細引を投げ掛けると、数人その上に馬乗りに乗つて脚を締めた。豚はそのまま屠場へ引ひ摺きずられて行つた。

「牛は宜よう御座んすが、豚は喧やかましくつて不可いけません。危いことなぞは有りませんが、騒ぐもんですから——」

こういう肉屋の亭主に随いて、復た私は屠場へ入つて見た。豚は五人掛りで押えられながらも、鼻を動かしたり、哀しげに呻つて鳴いたりした。牛の場合とは違つて、大鉞などが用いられるでも無かつた。屠手はいきなり出刃を揮つて生きてゐる豚の咽喉を突いた。これに私はすくなくならず面喰つて、眺めてゐると豚は一層声を揚げて鳴いた。牛の冷静とは大違いだ。豚の咽喉からは赤い血が流れて出た。その毛皮が白いだけ、余計に血の色が私の眼に映つた。三人ばかりの屠手がその上に乗つてドシドシ踏み付けるかと思つるうちに、忽ち豚の氣息は絶えた。

年をとつた屠手の頭は彼方此方と屠場の中を廻つて指図しながら歩いてゐた。その手も、握つてゐる出刃も、牛と豚の血に真紅

く染まつて見えた。最初に屠ほふられた南部牛は、三人掛りで毛皮も殆んど剥はぎ取られた。すこし離れてこの光景ありさまを眺めると、生なまな々とした毛皮からは白い気いきの立つのが見える。一方には竹たけぼうき箒はらで板の間の血を掃く男がある。蹲踞しゃがんで出刃を磨くものもある。寒い日の光は注連しめを飾った軒先から射し入って、太い柱や、そこに並んで倒れている牛や、白い被うわ服わっぽりを着けた屠手等の肩などを照らしていた。

そのうちに、ある屠手の出刃が南部牛の白い腹部のあたりに加えられた。卵色の膜に包まれた臟腑ぞうふがべろべろと溢あふれ出た。屠手の中には牛の爪先を関節のところから切り放して、土間へ投ほうりだ出すのもあり、胴の中程へ出刃を入れて肉を裂くものもあった。牛

の体からは膏あぶらが流れて、それが血のにおいに混って、屠場に満ちた。

屠牛の四

私は赤い牝牛が「引割ひきわり」という方法に掛けられるのを見た。

それは鋸のこぎりで腰骨を切開いて、骨と骨の間に横木を入れ、後部うしろの脚に綱を繋いで逆さに滑車で釣つるし上げるのだ。屠手は三人掛りでその綱を引いた。

「そら、巻くぜ」

「ああまだ尻尾を切らなくちや」

屠手の頭は手ずからその尻尾を切り放った。

「さあー車々」と言うものもあれば、「ホラ、よいせ」と掛声するものもあつて、牝牛の体は柱と柱の間に高く逆さに掛つた。脊ぼら髓ぼらの中央から真二つにそれを鋸で引割るのだ。ザクザクと、まるで氷でも引くように。

「どうも切れなくて不可いけない」

「鋸が切れないのか、手が切れないのか」

と頭は頭らしいことを言つて、笑い眺めていた。

巡査が入つて来た。子供達はおずおずと屠場のぞを覗いていた。犬もボンヤリ眺めていた。巡査は逢う人毎に「御目出度おめでとう」と言つたまま、火のある小屋の方へ行つた。このごちやごちやした屠場

の中を獣医は見て廻って、「オイ正月に成ったら御装束をもっと奇麗きれいにしよや」

古びた白の被うわっぱり服を着けた屠手は獣医の方を見た。

「ハイ」

「醤油で煮染にしめたような物じや困るナ」

南部牛は既に四つの大きな肉の塊に成って、その一つズツの股ももが屠場の奥の方に釣された。屠手の頭はブリキの箱を持って来て、大きな丸い黒印をベタベタと牛の股に捺おして歩いた。

不思議にも、屠られた牛の傷いたましい姿は、次第に見慣れた「牛肉」という感じに変わって行った。豚も最早いっとき一時前まで鳴き騒いだ。豚の形体かたちはなくて、紅味のある豚肉とんにくに成って行った。南部牛の

頭蓋骨ずがいこつは赤い血に染みたままで、片隅いづこに投出ほうりだしてあつたが、屠手が海綿でその血を洗い落した。肉と別々にされた骨の主なる部分は、薪でも切るように、例の大鉞で四つほどに切断せられた。屠手の頭も血にまみれた両手を洗って腰の煙草入を取出し、一服やりながら皆なの働くさまを眺めた。

「このダンベラは、どうかして其方そっちへ片付けろ」

と獣医は屠手に言付けて、大きな風呂敷ふろしき包を見るような臓腑を片付けさしたが、その辺の柱の下には赤い牝牛の尻尾、皮、小さな二つの角なぞが残っていた。

肉屋の若い者はガラガラと箱車を庭の内へ引き込んだ。箱にはアンペラを敷いて、牛の骨を投入れた。

「十貫六百——八貫二百——」

なぞと読み上げる声が屠場の奥に起った。屠手は二人掛りで大きな秤はかりを釣して、南部牛や雑種や赤い牝牛の肉の目方を計る。肉屋の亭主は手帳を取出し一々それを鉛筆で書留めた。

肉と膏あぶらと生血のにおいは屠場に満ち満ちていた。板の間の片隅には手桶ておけに足を差入れて、牛の血を洗い落している人々もある。牝牛の全部は早や車に積まれて門の外へ運び去られた。

「三貫八百——」

それは最後に計った豚の片股を読み上げる声だった。肉屋の亭主に言わせると、牛は殆んどすた廃る部分が無い。頭蓋骨は肥料に売る。臓腑と角とは屠手もうけの利に成る。こんな話を聞きながら、間も

なく私は亭主と連立って屠牛場の門を出た、枯々な桑畠の間には、喜び騒ぐ犬の声々と共に、牛豚の肉を満載した車の音が高く響き渡った。

その十

千曲川に沿うて

これまで私が君に話したことで、君は浅間山脈と蓼^た科^で山脈との間に展開する大きな深い谷の光^{ありさま}景^{ほぼ}を略想像することが出来たろうと思う。私は君の心を浅間の山腹へ連れて行って、あそこから見渡した千曲川の話もしたし、ずっと上流の方へ誘って行ってそこにある山々、村々の話もした。暇さえあれば私は千曲川沿岸

の地方を探るのを楽みとした。私は岩村田から香坂こうさかへ抜け、内山峠を越して上州の方へも下りて見たし、依田川よだがわという千曲川の支流に随ついて和田峠から諏訪すわの方へも出て見たし、霊泉寺の温泉から梅木峠うめのきを旅して別所温泉の方へ廻ったこともある。田沢温泉のことは君にも話した。君は私と共に、千曲川の上流にある主なる部分を見たというものだ。私は更に下流の方へ——越後に近い方まで君の心を誘つて行こう。

軽井沢の方角から雪の高原を越して次第に小諸へ降りて来た汽車、それに私が乗つたのは一月の十三日だ。この汽車が通つて来た碓氷うすいの隧トンネル道ちよつとには——一寸あの峠の関門とも言ふべきところ——巨大な氷柱の群立するさまを想像してみたまえ。それから

寒帯の地方と氣候を同じくするという軽井沢附近の落葉松林からまつばやしに俗に「ナゴ」と称えるものが氷の花のように附着するさまを想像してみたまえ。

汽車が小諸を離れる時、プラツトフォームの上に立つ駅夫等の呼吸きも白く見えた。窓の硝子ガラスごし越に眺ながめると田、野菜畠、桑畠、皆な雪に掩おおわれて、谷の下の方を暗い藍あゐいろ色な千曲川の水が流れて行つた。村落のあるところには人家の屋根も白く、土壁は暗く、

肥桶こやしおけをかついで麦畠の方へ通う農夫等も寒そうであつた。田

中の駅を通り過ぎる頃、浅間、黒斑くろふ、烏帽子等えぼしの一帶の山脈の方を望むと空は一面に灰色で、連続した山々に接した部分だけ朦朧もうろうと白く見えた。Unseen Whiteness——そんな言葉より外にあの

深い空を形容してみようが無かった。窓側に遠く近く見渡される
麦畠のサクの窪みへは雪が積つて、それがウネウネと並行した白
い線を描いた中に、枯々な雑木なぞがポツンポツンと立つのも見
えた。

雪国の鬱陶しさよ。汽車は犀川を渡つた。あの水を合せて
から、千曲川は一層大河の趣を加えるが、その日は犀川附近の広
い稲田も、岸にある低い楊も、白い土質の崖も、柿の樹の多い村
落も、すべて雪に掩われて見えた。その沈んだ眺望は唯の白さで
なくて、紫がかった灰色を帯びたものだった。遠い山々は重く暗
い空に隠れて、かすかに姿をあらわして見せた。この一面の雪景
色の中で、僅かに単調を破るものは、ところどころに見える暗い

杜^{もり}と、低く舞う餓^うえた鳥^{からす}の群とのみだ。行手には灰色な雪雲も垂下^りつて来た。次第に私は薄暗い雪国の底の方へ入つて行く気がした。ある駅を離れる頃には雪も降つて来た。

この旅は私^{ひと}独りではなく小諸から二人の連があつた。いずれも私の家に近いところの娘達で、I、Kという連中だ。この二人は小諸の小学を卒^おえて、師範校の講習を受ける為に飯山まで行くという。汽車の窓から親達の住む方を眺めて、眼を泣きはらして来る程の年頃で、知らない土地へ二人ぎり出掛るとは余程の奮発だ。でもまだ真^{ほん}実^{とう}に娘々したところのある人達で、互^ひに肘^{ひじ}で突付き合つたり、黄ばんだ歯をあらわして快活に笑つたり、背後^{うしろ}から友達を抱いて車中の退屈を慰めたりなどする。Naiveな、可憐^{かれん}な、

見ても噴飯ふきだしたくなるような連中だ。御蔭で私も紛れて行つた。Iの方は私の家の大屋さんの娘だ。

豊野で汽車を下りた。そのあたりは耕地の続いた野で、附近には名高い小布施おぶせの栗林くりばやしもある。その日は四阿あずま、白根の山々も隠れてよく見えなかった。雪の道を踏んで行くうちに、路傍に梨や柿の枯枝の見える、ある村の坂のところへ掛つた。そこは水内みのちの平野を見渡すような位置にある。私が一度その坂の上に立つた時は秋で、豊饒ほうじょうな稲田は黄色い海を見るようだった。向の方には千曲川の光つて流れて行くのを望んだこともあった。遠く好けやきもりい櫨こすえの杜を見て置いたが、黄緑な髪のような梢からコンモリと暗い幹の方まで、あの樹木の全景は忘れずにある。雪の中を私達

は蟹かにさわ沢まで歩いた。そこまで行くと、始めて千曲川に舟を見る。

川船

降とつたり休やんだりした雪は、やがて霏みぞれになつて来た。あの肅しとし
 降りそそぐ音を聞きながら、私達は飯山行の便船が出るのを
 待つていた。男は真綿帽子を冠り、藁わらぐつ靴はを穿はき、女は紺色染の
 真綿かめを亀かめの甲のように背しよ中に負しよつて家の内でも手拭てぬぐいを冠る。そ
 れがこの辺で眼につく風俗だ。休茶屋を出て川の岸近く立つて眺
 めると上高井の山脈、菅すが平だいらの高原、高社山たかしろやま、その他の山々
 は遠く隠れ、対岸の蘆荻ろてきも枯れ潜み、洲すの形した河心の砂の盛上

つたのも雪に埋もれていた。奥深く、果てもなく白々と続いた方から、暗い千曲川の水が油のように流れて来る。これが小諸附近の断崖だんがいを突いて白波を揚げつつ流れ下る同じ水かと思うと、何となく大河の勢に変わって見える。上流の方には、高い釣橋が多いが、ここへ来ると舟橋も見られる。

そのうちに乗客が集つて来た。私達は雪の積つた崖ひざに添うて乗場の方へ降りた。屋根の低い川船で、人々はいずれも膝ひざを突合せに乗った。水に響く艚ろの音、屋根の上を歩きながらの船頭の話声、そんなものがノンキな感じを与える。船の窓から眺めていると、雪とも曇ともつかないのが水の上に落ちる。光線は波に銀色の反射を与えた。

こうして蟹沢を離れて行つた。上今井かみいまいというところで、船を待つ二三の客が岸に立っていた。船頭はジャブジャブ水の中へ入つて行つて、男や女の客を負つて来た。砂の上を離れる舟底の音がしたかと思うと、又た艚の音が起つた。その音は千曲川の静かな水に響いてあだかも牛の鳴声の如く聞える。舟が鳴くようにもそれを聞いていると、何とでも此方こちらの思つた様に聞えて、同行の I の苗字を思出せばそのように、K の苗字を思出せば又そのように響いて来る。無邪氣の娘達は楽しそうに聞き入つた。兩岸は白い雪に包まれた中にも、ところどころに村々の人家、雑木林、森などを望み、雪仕度して岸の上を行く人の影をも望んだ。その岸の上を以前私が歩いた時は、豆粟まめあわなどの畠の熟する頃で、あの

莢さやや穂ほが路みち傍ばたに垂下たれつていた。そう、そう、私はあの時、この岸の下の方に低い楊やなぎの沢山うずくま蹲踞うずくまつてゐるのを瞰下みおろして、秋の日にチラチラする雑木の霜葉のかげからそれを眺めた時は、丁度羊の群でも見るような気がした。川船は今、その下を通るのだ。どうかすると、水に近い楊の枯枝が船の屋根に触れて、それを潜り抜けて行く時にはバラバラ音がした。

船の中は割合に暖かだった。同じ雪国でも高原地に比べると気候の相違を感じる。それだけ雪は深い。午後の日ざしの加減で、対岸の山々が紫がかつた灰色の影を水に映して見せる。私は船窓を開けて、つぶやくような波の音を聞いたり、舷ふなべりにあたる水を眺めたりして行つた。この川船は白いペンキで塗つて、赤い二本の

筋をあらわしてある。

ある舟橋に差掛った。船は無作法むぞうさにその下を潜り抜けて行つた。黒岩山を背景にして、広々とした千曲川の河原に続いた町の眺めが私達の眼前めのまえに展ひらけた。雪の中には鶏の鳴声も聞える。人家の煙も立ちこめている。それが古い飯山の城下だ。

雪の海

一晩に四尺も降り積るといふのが、これから越後へかけての雪の量だ。飯山へ来て見ると、全く雪に埋もれた町だ。あるいは雪の中から掘出された町と言つた方が適當かも知れぬ。

この掘出されたという感じを強く与えるものは、町の往来に高く築き上げてある雪の山だ。屋根から下す多量な雪を、人々が集って積み上げ積み上げするうちに、やがて人家の軒よりも高く成る。それが往来の真中に白壁の如く続いている。家々の軒先には「ガンギ」というものを渡して、その下を用事ありげな人達が往来している。屋内の暗さも大凡想像されよう。それに高い葭簾よしずで家をかこうということが、一層屋内を暗くする。私は娘達を残して置いて、独りひとで町へ出てみた。チラチラ雪の中で橙火あかりの点つく頃だった。私は天の一方に、薄暗い灰色な空が紅色を帯びるのを望んだ。丁度遠いところの火事が曇った空に映ずるように。それが落日の反射だった。

雪煙もこの辺でなければ見られないものだ。実に陰鬱いんうつな、頭の上から何か引冠ひきかぶせられているような気のするところだ。土地の人が信心深いというのも、偶然では無いと思う。この町だけに二十何カ処の寺院がある。同じ信州の中でも、ここは一寸上方かみがたへでも行つたような気が起る。言葉遣いづかからして高原の地方とは違ふ。

暗くなるまで私は雪の町を見て廻つた。荷車の代りに櫂そりが用いられ、雪の上を馬が挽ひいて通るのもめずらしかつた。蒲がまで編んだ箕帽子みぼうしを冠り、色目鏡を掛け、蒲脚絆がまはばきを着け、爪掛つまかけを掛け、それに毛布ケットだの、シヨウルだので身を包んだ雪装束の人達が私の側を通つた。

復た雲が降つて来た。千曲川の岸へ出て見ると、そこは川船の着いたところで対岸へ通うウネウネと長い舟橋の上には人の足跡だけ一筋茶色に雪の上に印されたのが望まれた。時には雪ゆきぐつ鞋穿いた男にも逢つたが、往來ゆきぎの人の影は稀まれだった。高社たかしろ、風原かざはら、中の沢、その他信越の境に聳そびゆる山々は、唯僅かに山層のかたちを見せ、遠い村落も雪の中に沈んだ。千曲川の水は寂しく音もなく流れていた。

しかし試みにサクサクと音のする雪を踏んで、舟橋の上まで行って見ると、下を流れる水勢は矢のように早い。そこから河原を望んだ時は一面の雪の海だった——そうだ、白い海だ。その白さは、唯の白さでなく、寂せきぼく莫とした底の知れないような白さだつ

た。見ているうちに、全身ふる顫えて来るような白さだった。

愛のしるし

飯山で手拭が愛のしるしに用いられるという話を聞いた。縁を切るといふ場合には手拭を裂くという。だからこの辺の近在の女は皆な手拭を大切に、落して置くことを嫌きらうとか。

これは縁起が好いとか、悪いとかいたぐいう類の話に近い。でも優しい風俗だ。

山の上へ

「水内みのちは古代には一面の水沢すいたくであつたらう——その証拠には、飯山あたりの町は砂石の上に出てゐる。土を掘つて見ると、それがよく分る」

種々の土地の話聞き、同行した娘達を残して置いて翌朝私は飯山をた発つた。舟橋を渡つて、対岸から町の方に城山などを望み、それから岸の上の桑畠の雪に埋れた中をそり橇で走らせた。その橇は人力車の輪を取除とりはずして、それに「いたや」の堅い木片で造つた橇を代用したようなものだ。梶棒かじぼうと後押棒あとかじぼうとあつて人夫が二人掛りで引いたり押ししたりする。低い橇の構造だから梶棒を高く揚げると、乗つた客はいくらか尻餅しりもちついた形になる。とは言え、

この乗りにくい橇が私の旅の心を喜ばせた。私は子供のような物めずらしさを以て人夫達の烈しい呼吸を聞いた。凍った雪の上を疾走して行つた時は、どうかすると私は桑畠の中へ橇諸共ブチマケラレそんな気がした。

「ホウ——ヨウ——」という掛声と共に、雪の上を滑る橇の音、人夫達がサクサク雪を踏んで行く音まで私の耳に快感を起させた。川船で通つて来た岸の雪景色は私の前に静かに廻転した。

中野近くで橇を降りた。道路に雪のある間は足も暖かであつたが、そのうちに黄ばんだ泥をこねて行くような道に成つて、冷く、足の指も萎れた。親切な飯山の宿で、爪掛を貰つて、それを私は草鞋の先に掛けて穿て来た。

一月十四日のことで村々では「ものづくり」というものを祝った。「みずくさ」という木の赤い条えだに、米の粉をまるめて繭まゆの形をつくる。それを神棚に飾りつける。養蚕の前祝だという。

帰りには、日光の為に眼もまぶしく、雪の反射で悩まされた。

その日は千曲川の水も黄緑に濁って見えた。

豊野から復た汽車で、山の上の方へ戻って行った時は次第に寒さの加わることを感じた。けれども私は薄暗い陰気な雪の中からいくらか明るい空の方へ出て来たような気がして、ホツと息を吐ついた。

その十一

山に住む人々の一

以前私が飯山からの帰りがけに——雪の道を櫓そりで帰ったとは反対の側にある新道しんみちに添うて——黄ばんだ稲田の続いた静間平しずまだいらを通り、ある村はずれの休茶屋に腰掛けたことが有った。その時、私は善光寺の方へでも行く「お寺さんか」と聞かれて意外の間に失笑した事が有った。同行の画家B君は外国仕込の洋服を着、ポ

ケツトに写生帳を入れていたが、戯れに「お寺さん」に成り済まして一寸ちよつと休茶屋の内儀おかみをまごつかせた。私が笑えば笑う程、余計に内儀は私達を「お寺さん」にしてしま了つて、仮令たとえ内幕は世俗の人と同じようでも、それも各自の身にそなわ具つたものであることなどを、半ばうらや羨み、半ば調戯からかうような調子で言つた。この内儀の話は、飯山から長野あたりへかけての「お寺さん」の生活の一面を語るものだ。

私は飯山行の話の中で、土地の人の信心深いことや、あの山間の小都会に二十何ヶ所の寺院のあることや、そういう旧態の保存されているところは一寸上かみがた方へでも行つたような気のする事を君に言つて置いた。この古めかしい空気は、激しく変り行く「時」

の潮流の中で、何時まで突き壊くずされずに続くものだろうか。とにかく、長い冬季を雪の中に過すような気候や地勢と相待つて、一般の人の心に宗教的などころのあるのは事実のようだ。これは千曲川の下流に行つて特にそう感ぜられる。

長野では、私も善光寺の大きな建物と、あの内で行われるドラマチックな儀式とを見たばかりだし、それに眺ちようぼう望の好い往生寺の境内を歩いて見た位のもので、実際どういふ人があるのか、精くわしくは知らない。飯山の方では私は何となく高い心を持った一人の老僧に逢つてみた。連添う老婦人もなかなかのエラ者だ。この人達は古い大きな寺院を経営し、年をとつても猶なほ活動を忘れないでいるという風だ。その寺では、丁度檀だんか家に法事があるとやら

で、御画像おえぞうというものを箱に入れ、鄭てい重ちゆうな風呂敷包にして借りて行く男なぞを見かけた。一寸したことだが、古風に感じた。

君は印度インドに於ける仏ぶつ蹟せき探検の事実を聞いたことがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は、この老僧の子息むすこさんで、娘の婿にあたる学士も矢張一行の中に加わった人だ。学士は当時英国留学中であつたが、病弱な体たい軀くを提ひげつて一行に加わり、印度内地及び錫セイロン蘭ランに於ける阿育王あいくおうの遺跡なぞを探り、更に英国の方へ引返して行く途中で客死した。この学士の記念の絵葉書が、沢山飯山の寺に遺のこつていたが、熱帯地方の旅の苦みを書きつけてあつたのなぞは殊ことに、私の心を引いた。老僧の子息さんは兵役に服しているとかで、その人には私は逢つてみなかった。旧ふるい朽ちかかつ

たような寺院の空気の中から、とにかくこういう新人物が生れている。そしてそういう人達の背後には、親であり又た舅姑しゅめいとめである老僧夫婦のような人達があつて、幾十年となく宗教的な生活を送つて来たことが想像される。

しかし飯山地方に古めかしい宗教的の臭気においが残つていて、二十何カ所の寺院がたとえ仮令維持の方法に苦みながらも旧態を保存しているということとは、偶然でない。私はその老僧から、飯山の古い城主の中には若くて政治的生涯を離れ、僧侶の服を纏い、一生仏教の伝道に身をゆだ委ねた人のあつたことを聞いた。又、白隠はくいん、惠端えたん、その他すぐれた宗教家がそこに深い歴史的の因縁を遺していることも聞いた。

こういうことは高原の地方にはあまり無いことだ。第一そういう土地柄で無いし、そういう歴史の背景も無いし法の残燈のりを高く掲げているような老僧のような人も見当らない。私は小諸辺で幾人かの僧侶に逢ってみたが、実際社会の人達に逢っていると殆んど変りが無いように思った。養蚕時が来れば、寺の本堂の側わきに蚕たなの棚が釣られる。僧侶も労働して、長い冬籠ふゆごもりの貯えを造らなければ成らない。

山に住む人々の二

学問の普及ということはこの国の誇りとするものの一つだ。多

くの児童を收容する大校舎の建築物をたてものこうした山間に望む景色は、一寸他の地方に見られない。そういう建物は何かの折に公会堂の役に立てられる。小諸でも町費の大部分を傾けて、他の町に劣らない程の大校舎を建築した。その高いガラスまじ玻璃窓は町の額のところまじどに光つて見える。

こういう土地だから、良い教育家に成ろうと思う青年の多いのも不思議は無い。種々さまさまな家の事情からして遠く行かれないような学問好きな青年は、多く国に居て身を立てることを考える。毎年長野の師範学校で募集する生徒の数に比べて、それに応じようとする青年の数は可なり多い。私達の学校にも、その準備の為に一二年在学する生徒がよくある。

一体にこの山国では学者を尊重する気風がある。小学校の教師でも、他の地方に比べると、比較的好的報酬を受けている。又、社会上の位置から言っても割合に尊敬を払われている。その点は都会の教育家などの比でない。新聞記者までも「先生」として立てられる。長野あたりから新聞記者を聘^{へい}して講演を聴くなぞはこころでは珍しくない。何か一芸に長じたものと見れば、そういう人から新智識を吸集しようとする。小諸辺のことで言ってみても、名士先生を歓迎する会は実に多い。あだかも昔の御関所のように、そういう人達の素通りを許さないという形だ。

御蔭で私もここへ来てから種^{いろ}々な先生方の話を拝聴することが出来た。故福沢諭吉氏も一度ここを通られて、何か土産話を置

いて行かれたとか。その事は私は後で学校の校長から聞いた。朝鮮亡命の客でよく足を留めた人もある。旅の書家などが困つて来れば、相応に旅費を持たせて立たせるという風だ。概して、軍人も、新聞記者も、教育家も、美術家も、皆な同じように迎えらるる傾きがある。

こうした熱心な何もかも同じように受入れようとする傾きは、一方に於いて一種重苦しい空気を形造っている。強^しいて言えば、地方的単調……その為には全く氣質を異にする人でも、同じような話しか出来ないようなところがある。

それから佐久あたりには殊に消極的な勇氣に富んでいる人を見かける。ここには極くノンキな人もいるが又非常に理窟^{りくつ}ツぽい人

もいる。

何故こう信州人は理窟ツぽいだろう、とはよく聞く話だが、一体に人の心が激しいからだと思う。櫛かしわの葉が北風に鳴るように、一寸したことにすぐ直にげき激しふる顫えるような人がある。それにつけて思出すことは、私が小諸へ来たばかりの時、青年会を起そうという話が町の有志者の間にあつた。一同光岳寺の広間に集つた時は、盛んな議論が起つた。私達の学校の I 先生などは、若い人達を相手に薄暗くなるまでも火花を散らしたものだ。皆な草臥くたびれて、規則だけは出来たが、到頭その青年会はお流れに成つて了つたことが有つた。

一方に、極く静かな心を持った人と言えば、私達の学校で植物

科を受持つているT君などがその一人であろう。ほんとに学者らしい、そして静かな心だ。どんな場合でも、私はT君の顔色の変ったのを見たことが無い。小諸からすこし離れた西原という村から出た人だ。T君の顔を見ると私は学校中で誰に逢うよりも安心する。

山に住む人々の三

警察と鉄道に従事する人達は他郷からの移住者が多い。町の平和を監督する署長さんと言えば、大抵他の地方の人だ。ここの調査の中にはでも土地から出て奉職する人などがあって、ポクポク

と親しみのある靴の音をさせる。

鉄道の方の人達は停車場の周囲まわりに全く別に世界を造っている。忍耐力の強い越後人より外に、この山の上の鉄道生活に堪たえ得るものは無いとも言われている。大手に住む話好きな按摩あんまから、今の駅長のことを聞いたことが有った。この人は新橋から直江津なおえつに移り、車掌を五年勤め、それから助役に七年の月日を送つて来たという。同じ山の上に住んでも、こうした懸け離れた生活を送っている人もある。

以前ある駅長が残して行つた話だと言って、按摩はまた次のよ
うなことを私に語つて聞かせた。「もと、越後の酒さかつくり造で、倉
番した人ということ御座います。遽にわかに出世致しまして、ここ

の駅長さんと御成んなさいました。ある時、電信掛の技手に向い、葡萄酒罈ぶどうしゅびんの貼紙はりがみを指しまして、どうだ君にこの英語が読めるかとそう申しました。読めるなら一升おし奢ろうというんで御座います。その駅長さんの無学なことは技手も承知しておりましたから、わざと私には読めません、貴方あなた一つ御読みなすつて下さい。それこそ私が酒でもこの葡萄酒でも奢りますからと申しました。フムそうか、君はよくこんなものが読めなくて鉄道が勤まるネ、そんな話でその場は分れてしまいました。技手はもし譴責けんせきでもされたら酒にかこつける下心で、すこし紅い顔をして駅長さんの前に出ました。先刻は大きに失礼致しました、憚りはばかながらこんなものは英語のイロハだ、皆さんも聞いて下さい。この貼紙にはこう云う

ことが書いてあると言うて、ペロペロと読んで聞かせました。ウンそうかい、そういうことが書いてあるのかい、成程君はエライものだ、そういう学力があらうとは今まで思わなかった……」

こんな口論の末から駅長と技手とはすべて反対に出るようになった。間もなくその駅長は面白くなくて、小諸を去ったとか。

線路の側に立っているポイント・メンこそはこの山の上で寂しい生活を送る移住者の姿であろう。勤めの時間は二昼夜にわたつて、それで一日の休みにありつくという。労働の長いのに苦むとか。私は学校の往還いきかえりに、懐古園の踏切を通るが、あの見張番所のところには、ポイント・メンが独りでポツンと立っているのをよく見かける。

柳田茂十郎
もじゅうろう

先代柳田茂十郎さんと言えば、佐久地方の商人として、いつでも引合に出される。茂十郎さんの如きは極端に佐久気質かたぎを發揮した人の一人だ。

諸国まで名を知られたこの商人も、一時は商法の手違いから、豆腐屋にまで身を落したことがある。そこまで思い切って行つたところが茂十郎さんかも知れない。でも、この人が小諸で豆腐屋を始めた時は、誰も気の毒に思つて買う人が無かつたとのことだ。茂十郎さんの家では、もと酒屋であつたが、造つくり酒ざけは金を寝か

して商法に働きの少いのを見て取り、それから茶商に転じたという。時間の正しい人で、すこしでも掛値《かけね》すれば、ずんずん帰って行くという風であつたとか。幾人かの子に店を出させ、存命中はキチンキチンと屋賃を取り、死に際ぎわにその店々を分けてくれて行つた。一度でも茂十郎さんの家へ足踏したもののためには、死後に形見が用意してあつたと言つて驚いて、他ひとに話した女があつたということも聞いた。私達の学校の校長に逢うと、よく故人の話が出て、客に呼ばれて行つて一座した時でも無駄には酒を飲まなかつたと言つて徳利を控えた手付までして聞かせる。

「酒は飲むだけ飲めば、それで可いものです」

万事に茂十郎さんはこういう調子の人だつたと聞いた。

小作人の家

学校の小使の家を訪ねる約束をした。辰さんは年貢ねんぐを納める日だから私に来て見ろと言ってくれた。

小諸新町の坂を下りると、浅い谷がある。細い流を隔てて水車小屋と対したのが、辰さんの家だ。庭には蓆むしろを敷きつめ、粃もみを山のように積んで、辰さん兄弟がしきりと働いていた。

かねて懇意な隠居に伴われて私は暗い小作人の家へ入った。猫のいれもの入物とかで、藁わらで造った行火あなかのようなものが置いてある。私には珍らしかった。しるしばかりに持って行った手土産を隠居は

床の間の神棚の前に供え、鈴を振り鳴らし、それから炬燵こたつにあたりながら種々な話を始めた。極く無愛想な無口な五十ばかりの瘦やせた女も黙って炬燵にあたっていた。その側には辰さんの小娘も余念なく遊んでいた。この無口な女と、竈かまどの前に蹲踞うずくまっている細帯しめめた娘とは隠居の家に住居する人らしかった。で、私はこれらの人に関わらず隠居の話に耳を傾けた。

話好きな面白い隠居は上州と信州の農夫の比較なぞから、種々な農具のことや地主と小作人の関係なぞを私に語り聞かせた。この隠居の話で、私は新町辺の小作人の間に小さな同盟罷工ひしこうともいうべきが時々持ち上ることを知った。隠居に言わせると、何故小作人が地主に対して不服があるかというに、一体にこの辺では百

坪を一升まき蒔とこなと称え、一ツカを三百坪に算し、一升の粃は二百八十目に量つて取立てる、一ツカと言つても實際三百坪は無い、三百坪なくて取立てるのはその割で取る、地主と半々に分けるところは異数な位だ。そこで小作人の苦情が起る。無智な小作人がまた地主に対する態度は、種々なところで人の知らない復讐ふくしゅうをする。仮令たとえば俵の中へ石を入れて目方を重くし、俵へ霧を吹いて目をつけ、又は稲の穂を顧みないで藁を大事にし、その他種々な悪い戯たずらをして地主を苦める。こんなことをしたところで、結局「三月四月は食いじまい」だ。尤も、そのうちには麦も取れる。「しかし私の時には定屋様じょうや（地主）がお出いでなさると、必きつと一升買つて、何がなくとも香の物で一杯上げるといふ風でした。今年

は悴せがれに任しときましたから、彼奴あいつはまたどんな風にするか……私
の時には昔からそうでした」

こう隠居は私に話して笑った。

そのうちに家の外では「定屋さんになア、来て御くんなんしよ
つて、早く行って来てくれや」という辰さんの声がする。日の光
は急に戸口より射し入り、暗い南の明あかりまど窓も明るくなった。

「ああ、日が射して来た、先刻さつきまでは雪模様でしたが、こりや好
い塩梅あんばいだ」と復た辰さんが言っていた。

細帯締た娘は茶を入れて私達の方へ持つて来てくれた。炬燵に
あたっていた無口な女は、ぷいと台所の方へ行つた。

隠居は小声に成つて、

「私も唯一人ですし、平常は誰も訪ねて来るものが無いんです。年寄ですからねえ……ですから置いてくれというので、ああいうものを引受けて同居さしたところが悴が不服で黙ってあんなものを入れたって言いますのさ」

「飯などは炊いてくれるんですか」と私が聞いた。

「それですよ、世間の人はそう思う。ところが私は炊いて貰わない。どうしてそんな事をしようものなら皆な食われて了う……そこは私もなかなか狡いや。だけれども世間の人はそう言わない。そこがねえ辛いと言うもんです」

古い洋傘の毛繻子の今は炬燵掛と化けたのを叩いて、隠居は掻き口説いた。この人の老後の楽しみは、三世相に基づいて、隣近所

の農夫等が吉凶をうらなを卜うことであつた。六三の呪禁まじないと言つて、身体なほの痛みを癒す祈禱きとうなぞもする。近所での物識ものしりと言われている老農夫である。私はこの人から「言海」のことを聞かれて一寸驚かされた。

「昔の恥を御話し申すんじゃないが、私も若い時には車夫をしてねえ、日に八両ずつなんて稼かせいだことが有りましたよ。八両サ。それがねえ、もうぱつぱと湯水のように無くなってう。どうして若い時の勢ですもの。私はこれで、どんなことでも人のすることは大概してみましたが、博奕ばくちと牢屋の味ばかしは知らない——ええこればかしは知らない」

こう隠居が笑つているところへ、黄な真綿帽子を冠つた五十恰か

つこう
好の男が地味な羽織を着て入つて来た。

「定屋さんですよ」と辰さんが呼んだ。

地主は屋の内うちなかに入つて炬燵くわんに身を温めながら待つていた。私が屋外そとの庭の方へ出ようとすると、丁度水車小屋の方から娘が橋を渡つて来て、そこに積み重ねた糶もみの上へ柵ますを投げで行つた。辰さんは年貢の仕度を始めた。五歳ばかりの小娘が来て、辰さんの袖そでに取とりすが縫ぬいつた。辰さんが父親らしい情の籠こもつた口調で慰めると、娘は頭から肩まで顫ふるわせて、泣く度に言うこともよく解らない位だつた。

「今に母さんが来るから泣くなよ」

「手が冷たい……」

「ナニ、手が冷たい？ そんなら早く行ってお炬燵へあたれ」

凍った娘の手を握りながら、辰さんは家の内へ連れて行つた。

谷に面した狭い庭には枯々な柿の樹もあつた。向うの水車も藁わ

囲らいされる頃で、樋といの雫しずくは氷の柱に成り、細谷川の水も白く凍

つて見える。黄ばんだ寒い日光は柿の枯枝を通して糶あを積み上げ

た庭の内を照らして見せた。年老いた地主は白髪頭しらがあたまを真綿帽子

で包みながら、屋うちの内から出て来た。南窓の外にある横木よりかに倚

凭かつて、寒そうに袖そでぐち口かきあわを搔か合せ、我と我身を抱き温めるよ

うにして、辰さん兄弟の用意するのを待つた。

「どうで御座んすなア、糶こしらの造え具合は」

と辰さんに言われて、地主は白い柔かい手で糶すくを掬すくつて見て一

粒口の中へ入れた。

「空穂しいなが有るねえ」と地主が言った。

「雀に食われやして、空穂でも無いでやす。一俵造えて掛けて見やしよう」

地主は掌てのひら中の粃あをあけて、復た袖口を搔き合せた。

辰さんは弟に命じて粃あを箕みに入れさせ、弟はそれを円い一斗櫛かに入れた。地主は腰を曲かがめながら、トボというものでその櫛かの上を丁寧なに撫なで量はかった。

「貴様入れろ、声掛けなくちや御年貢のようで無くて不可いけねえ」と辰さんは弟に言った。「さあ、どつしり入れろ」

「一わたりよ、二わたりよ」と弟の呼ぶ声が起った。

六つばかりの俵がそこに並んだ。一俵に六斗三升の粃が量り入れられた。辰さんは棧さんだわら俵を取つて蓋ふたをしたが、やがて俵の上に倚よりかか凭つて地主と押問答を始めた。地主は辰さんの言うことを聞いて、目を細め、無言で考えていた。氣の利きいた弟は橋の向うへ走つて行つたかと思つううちに、酒徳利を風呂敷包にして、頬を紅くし、すこし微笑ほほえみながら戻つて来た。

「御年貢ですか、御目出度おめでとう」と言つて入つて来たのは水車小屋の亭主だ。

私は、藁仕事などの仕掛けてある物置小屋の方に邪魔にならないうように居て、棧俵などを尻しりに敷きながら、この光景を眺めた。辰さんは俵に足を掛けて藁わらなわ縄で三ところばかり縛つていた。弟

も来てそれを手伝うと、乾いた縄は時々切れた。「俵を締るに縄が切れるようじゃ、まだ免状は覚おぼつか束ないな」と水車小屋の亭主も笑つて見ていた。

「一俵掛けて見やしよう」

「いくらありやす。でほうでえ出放題あるわ。十八貫八百——」

「これは魂たまげ消た」

「十八貫八百あれば、まあ好い糶です」

ひょう
「俵にもある」

「そうです、俵にもありやすが、それは知れたもんです」

「おらがところは十八貫あれば可いだ」

「なにしろ坊主九分混りという糶ですからなア」

人々の間にこんな話が交換とりかわされた。水車小屋の亭主は地主に向つて、米価のことを話し合つて、やがて下駄穿のまま糶の上を越して別れて行つた。

「どうだいお前の体格じゃ二俵位は大丈夫担げる」

と地主に言われて辰さんの弟は一俵ずつ両手に抱え、顔を真紅にして持ち上げてみたりなぞして戯れた。

「まあ、お茶一つお上り」

と辰さんは地主に言つて、私にもそれを勧めた。真綿帽子を脱いで屋うちの内に入る地主の後に随いて、私も凍えた身体を暖めに行つた。「六俵の二斗五升取りですか」

こう辰さんが言つたのを隠居は炬燵にあたりながら聞ききとが咎めた。

地主の前に酒徳利の包を解きながら、

「二斗五升つてことが有るもんか。四斗五升よ」

「四斗……」と地主は口籠くちごもる。

「四斗五升じゃないや。四斗七升サ。そうだ——」と復た隠居が言つた。

「四斗七升？」と地主は隠居の顔を見た。

「ああ四斗七升か」と云い捨てて、辰さんは庭の方へ出て行つた。

私達は炬燵まわりの周圍まわりに集つた。隠居は古い炬燵板を取出して、それを蒲団ふとんの上に載せ、大おお井いんに菘こん、蕪やくと油揚の煮付を盛つて

出した。小皿には唐とう辛がらしの袋をも添えて出した。古い布さかで盃さかずきを拭ふいて、酒は湯沸に入れて勧めてくれた。

「冷れいですよ。爛かんではありませんよ——定屋様はこの方で被い入らつらしやるから」

こう隠居も気軽な調子で言った。地主は煙管きせるを炬燵板の間に差込み、冷酒ひやさけを舐なめ舐なめ隠居の顔を眺めて、

「こういう時には婆さんが居ると、都合が好いなア」

地主の顔には始めて微かすかな笑えみが上あった。隠居は款待顔もてなしがおに、

「婆さんに別れてからねえ、今年で二十五年に成りますよ」

「もう好加減に家へ入れるが可いや」

「まあ聞いて下さい。婆さんには子供が七人も有りましたが、皆な死んで了った……今の辰は貰もらい子でサ……どうでしょう、婆さんが私の留守に、家の物を皆な運んで了う。そりや男と女の間で

すから、大抵のことは納まりますサ……納まりますが……盗みばかりは駄目です。今ここで婆さんを入れる、あの隠居も神信心だなんて言いながら、婆さんの溜めたのを欲しいからと人が言う。それが厭いやでサ。婆さんが来ても、直すぐに盗みの話に成ると納まらないや。モメて仕様が無い。ホラ、あの話ねえ——段々うらなつてみると、盗人が出て来ましたぜ。可恐おそろしいもんだねえ」

隠居の話し振には実に気の面白い、小作人仲間の物識と立てられるだけのことがあった。地主と隠居の間には、台所の方に居る同居人母子のことに就いてこんな話も出た。

「へえ、あれが娘ですか」

「子も有るんでさあね。可哀かわいそうだから置いて遣やろうと言うんで

すよ。妙に世間では取る……私だって今年六十七です……この年になつて、あんな女を入れたなんて言われちゃ、つまらない——
そこが口惜くやしいサ」

「幾歳いくつに成つたつて気は同じよ」

御蔭で私もめつたに來たことのない屋根の下で、百姓らしい話を聞きながら、時を送つた。菟こんにやく 藟ちせうと油揚の馳走ちせうに成つて、間もなく私はこの隠居の家を辞した。

その十二

路傍の雑草

学校の往ゆき還かえりに——すべての物が白雪に掩おおわれている中で——
一日の映あつた石垣の間などに春待顔な雑草を見つけたことは、私
の楽しみに成つて来た。長い間の冬ふゆ籠ごもりだ。せめて路傍の草に親
しむ。

南向きもしくはは西向の桑くわ畠ばたけの間を通ると、あの葉の縁へりだけ

紫色な「かなむぐら」がよく顔を出している。「車花」ともいう。あの車の形した草が生えているような土手の雪間には、必^{きつ}と「青はこべ」も蔓^はいのたくっている。「青はこべ」は百姓が鶏^{ひな}の雛^{ひな}にくれるものだ^と学校の小使が言った。石垣の間には、スプウンの形した紫青色の葉を垂れた「鬼のはばき」や、平べったい肉厚な防寒服を着たような「きしや草」^{よもぎ}などもある。蓬^{よもぎ}の枯れたのや、その他種々な雑草の枯れ死んだ中に、細く短い芝草が緑を保って、半ば黄に、半ば枯々としたのもある。私達が学校のあるあたりから士族屋敷地へかけては水に乏しいので、到るところに細い流を導いてある。その水は学校の門前をも流れている。そこへ行つて見ると、青い芝草が残って、他の場所で見るとよりは生々として

る。

どういふ世界の中にこれ等の雑草が顔を出して、中には極く小さな蕾つぼみの支度をしているか、それも君に聞いて貰もらいたい。一月の二十七日あたりから三十一日を越え、二月の六日頃までは、殆ほとんど寒さの絶頂に達した。山の上に住み慣れた私も、ある日は手の指の凍り縮むのを覚え、ある日は風邪のために発熱して、氣候の激烈なるに驚かされる。降った雪は北向の屋根や庭に凍って、連日溶くべき気色もない……私は根太ねだの下から土と共に持ち上つて来た霜柱の為に戸の閉らなくなつた古い部屋を見たことがある。北向の屋根の軒先から垂下る氷柱は二尺、三尺に及ぶ。身を包んで屋外そとを歩いていると氣息いきがかかつて外がい套とうの襟えりの白くなるのを

見る。こういう中で元氣の好いのは屋根の上を飛ぶ雀すずめと雪の中をあさり歩く犬とのみだ。

草木のことを言えば、福寿草を小鉢こぼちに植えて床の間に置いたところが、蕾の黄ばんで来る頃から寒さが強くなつて、暖い日は起き、寒い日は倒れ萎れるしお有様である。驚くべきは南天だ。花瓶かびんの中の水は凍りつめているのに、買つて挿さした南天の実は赤々と垂下つて葉も青く水気を失わず、活いきいき々と変るところが無い。

君は牛乳の凍つたのを見たことがあるまい。淡い緑色を帯びて、乳らしい香もなくなる。ここでは鶏卵も氷る。それを割れば白味も黄身もザクザクに成っている。台処ながしもとの流なが許もとに流れる水は皆な凍り着く。葱ねぎの根、茶ちやくす滓かすまで凍り着く。明あかりまど窓へ薄日の射

して来た頃、出刃包丁でばぼうちようか何かで流許の氷をかんかんと打割ると
いうは暖い国では見られない凶だ。夜を越した手桶ておけの水は、朝に
成つて見ると半分は氷だ。それを日にあて、氷を叩き落し、それ
から水を汲入れるという始末だ。沢庵たくあんも、菜漬も皆な凍つて、
噛かめばザクザク音がする。時には漬物まで湯ですがねばならぬ。
奉公人の手なぞを見れば、黒く荒れ、皮膚は裂けてところどころ
紅い血が流れ、水を汲むには頭巾を冠つて手袋をはめてやる。板
の間へ掛けた雑巾の跡が直に白く凍る朝などはめずらしくない。
夜更けて、部屋々々の柱が凍しみ割れる音を聞きながら読書でもし
ていると、実に寒さが私達の骨まで滲しみとお透るかと思われる……

雪の襲つて来る前は反かえつて暖かだ。夜に入つて雪の降る日なぞ

は、雨夜あまよのさびしさとは、違つて、また別の沈静な趣がある。どうかすると、梅も咲くかと疑われる程、暖かな雪の夜を送ることがある。そのかわり雪の積つた後と来ては、堪えがたいほどの凍しもみ方だ。雪のある田畠たはたへ出て見れば、まるで氷の野だ。こうなると、千曲川も白く氷りつめる。その氷の下を例の水の勢で流れ下る音がする。

学生の死

私達の学校の生徒で〇という青年が亡なくなつた。曾かつて私が仙台の学校に一年ばかり教師をしていた頃——私はまだ二十五歳の若

い教師であつたが——自分の教えた生徒が一人亡くなつて、その葬式に列なつた当時のことなぞを思出しながら、同僚と共にOの家をさして出掛けた。若くて亡くなつた種々な人達のこと私が私の胸を往来した。

Oの家は小諸の赤坂という町にある。途中で同僚の老理学士と一緒に成つて、水彩画家M君の以前住んでいた家の前を通つた。

その辺は旧士族の屋敷地の一つで、M君が一年ばかり借りていたのも、矢張古めかしい門のある閑静な住居だ。^{すまい}M君が小諸に足を停めた^{とど}ところは非常な勉強で、松林の朝、その他の風景画を沢山作られた。私がよく邪魔に出掛けて、この辺の写生を見せて貰つたり、ミレエの絵の話なぞをしたりして、時を送つたのもその故家^{ふるや}

だ。

細い流について、坂の町を下りると、私達は同僚のT君、W君などが誘い合せてやって来るのに逢う。Oは暮に兄の仕立屋へ障子張の手伝いに出掛け、身体の冷えてゾクゾクするのも関わらず、入浴したが悪かったとかで、それから急に床に就き、熱は肺から心臓に及び、三人の医者が立合で、心臓の水を取った時は、四合も出たという。四十日ほど病んで十八歳で、亡くなった。話好きな理学士を始め、同僚の間には種々とOの話が出た。Oは十歳位の頃から病身な母親の世話をして、朝は自分で飯を炊き、母の髪まで結って置いて、それから学校に行つたという。病中も、母親の見えるところに自分の床を敷かせてあつた、と語る人もあつた。

葬式はOの自宅で質素に行われるというので、一月三十一日の午前十時頃には身内のもの、町内の人達、教師、同窓の学生などが弔いに集った。Oは耶蘇^{ヤソ}信者であつたから、寢棺には黒い布を掛け、青い十字架をつけ、その上に牡丹^{ぼたん}の造花を載せ、棺の前で讚美歌^{さんびか}が信徒側の人々によつて歌われた。祈祷^{きとう}、履歴、聖書の朗読という順序で、哥林多^{コリント}後書の第五章の一節が読まれた。私達の学校の校長は弔いの言葉を述べた。人誰か死なからん、この兄弟のごとく惜まれむことを願え、という意味の話なぞがあつた時は、年老いたOの母親は聖書を手にして泣いた。

土族地の墓地まで、私は生徒達と一緒に見送りに行った。松の多い静な小山の上にOの遺骸^{いがい}が埋められた。墓地でも賛美歌が歌

われた。その石塔の側、ここの松の下には、〇と同級の生徒が腰掛けたり佇立たたずんだりして、この光景ありさまを眺めていた。

暖い雨

二月に入つて暖い雨が来た。

灰色の雲も低く、空は曇つた日、午後から雨となつて、遽にわかに復活いきかえするような温暖あたたかさを感じた。こういう雨が何度も何度も来た後でなければ、私達は譬たとえようの無い烈しい春の饑渴きかつを癒いやすことが出来ない。

空は煙か雨かと思うほどで、傘さして通る人や、濡れて行く馬

などの姿が眼につく。単調な軒の玉水の音も楽しい。

堅く縮こまっていた私の身体もいくらか延び延びとして来た。

私は言い難き快感を覚えた。庭に行つて見ると、汚れた雪の上に降りそそぐ音がする。屋外へ出て見ると、残つた雪が雨のために溶けて、暗い色の土があらわれている。田畠も漸く冬の眠から覚めかけたように、砂まじりの土の顔を見せる。黄ばんだ竹の林、まだ枯々とした柿、李、その他眼にある木立の幹も枝も、皆な雨に濡れて、黒々と穢い寝惚顔をしていない物は無い。

流の音、雀の声も何となく陽気に聞えて来る。桑畠の桑の根元までも濡らすような雨だ。この泥濘と雪解と冬の瓦解の中で、うれしいものは少し延びた柳の枝だ。その枝を通して、夕方には

黄ばんだ灰色の南の空を望んだ。

夜に入つて、淋さびしく暖い雨垂の音を聞いていると、何となく春の近づくことを思わせる。

北山の狼おおかみ、その他

生徒と一緒に歩いていると、土地の種々な話を聞く。ある生徒が北山の狼の話を私にした。その足跡は里犬よりも大きく、糞くそは毛と骨で——雨あまぎら 晒あしになったのを農夫が熱の薬に用いる。それは兎や鳥などを捕えて食うためだという。お伽とぎばなし話の世界というものはこうした一寸した話のはしにも表れているような気がする。

る。

野蛮な話を聞くこともある。ここには鶏を盗むことを商売にしている人がある。雄おんどり鶏と牝めんどり鶏と遊ぶところへ、釣つりばり針で餌えをくれ、鳥の咽喉のどに引掛けて釣取るといふ。犬を盗むものもある。それは黒砂糖よそで他の家の犬を呼び出し、殺して煮て食ひ、皮は張付けて敷物敷物に造るとか。

土地の話の序ついでだ。この辺の神棚には大きな目無し達磨だるまの飾つてあるのをよく見掛ける。上田の八日堂ようかどうと言つて、その縁日に達磨だるまを売る市が立つ。丁度東京の西とりの市いちの賑にぎわいだ。願かない事が叶かなえば、その達磨に眼を入れて納める。私は海の口村の怪しげな温泉宿で一夜を送つたことがあつたが、あんな奥にも達磨が置いてあるの

を見た。

ここは養蚕地だから、蚕祭というのをする。その日は繭まゆの形を米の粉で造り、笹の葉に載せて祭るのだ。

二月八日の道祖神どうそじんの祭は、いかにも子供の祭らしいものだ。

土地の人は訛なまって「どうろく神」と呼んでいる。あの子供の好きなど言い伝える路傍の神様の小さな祠ほこらのところへ藁わらの馬まに餅もちを載せて曳ひいて行くのは、古めかしい無邪気な風俗だ。幼いものの楽たのしみとする日だ。

御辞儀

私達の学校の校長が小諸小学校の校堂に演説会のあつたのを機会として、医者仲間の無能を攻撃したという出来事があつた。先生の演説は直接には聞かなかつたが、それがヤカマしい問題を惹ひきおこしたことを、後で私は理学士から聞いた。一体先生がこの地方に退いて青年の教育を始めるまでには長い経歴を持つて来た人で、随分町の相談にも預つて種々な方面に意見の立てられる人だし、もりやま守山あたりの桃島が開けたのも先生の力だと言われている位だ。とにかく、先生はエナアゼチックな勇健な体たいく躯を具えた、何か為ずにはいられないような人だ。こういう氣象の先生だから、演説でもする場合には、ややもするとその飛とばしり沫が医者仲間などにまで飛んで行く。細心な理学士は又それを心配して私のところ

へ相談に来るといふ風だ。

ある晩、岡源という料理屋からの使で、警察の署長さんの手紙を持って来た。開けて見ると、私に来てくれとしてある。私はこの署長さんが仲裁の労を取ろうとしていることを薄々聞いていた。果して、岡源の二階には小諸医会の面々が集っていた。その時私は校長に代つて、さきの失言を謝して貰いたいと言われた。なにしろ私は先生の演説を知らないのだから、謝して可いものかどうかの判断もつきかねた。謝すべきものなら先生が来て謝する、一応私は先生の意見を聞いてからのことにしようとした。この形成を看^みて取つた署長さんは、いきなり席を離れ、町の平和というものの為に、皆なの方へ向いて御辞儀をした。急に医者仲間も坐り

直した。何事も知らない私は譲る気は無かったが、署長さんの厚意なんにに対しても頭を下げずにはいられなかった。御辞儀をしてこの二階を引取った時、つくづく私は田舎教師の勤めもツライものだと思つた。

その翌日、私は中棚に校長を訪ねて、先生のために御辞儀をさせられたことを話して笑つた。すると先生は先生で忌々しそうに、そんな御辞儀には及ばなかつたという返事だ。実に、損な役廻りを勤めたものだ。

春の先駆せんく

一雨ごとに温あたたか暖たかさを増して行く二月の下旬から三月のはじめへかけて桜、梅の蕾つぼみも次第にふくらみ、北向の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して来た。楽しい春雨の降った後では、湿った梅の枝が新しい紅味を帯びて見える。長い間雪の下に成つていた草屋根の青あお苔こけも急に活いき返る。心地こころちの好い風が吹いて来る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群でも見るような、さまざまの形した白い黄ばんだ雲が、あだかも春の先駆をするように、微かすかな風に送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、この雲を注意して望んだことがあった。ポツと雲の形があらわれたかと思うと、それが次第に大きく、長く、明らかに見えて南へ動くしたがに随きえって消て行く。

すると復た、第二の雲の形が同一の位置にあらわれる。そして同じように展開する。柔かな乳にゆうせい青の色の空に、すこし灰色の影を帯びた白い雲が遠く浮んだのは美しい。

星

月の上るは十二時頃であろうという暮方、青い光を帯びた星の姿を南の方の空に望んだ。東の空には赤い光の星が一つ掛った。天にはこの二つの星があるのみだった。山の上の星は君に見せたいと思うものの一つだ。

第一の花

「熱い寒いも彼岸まで」とは土地の人のよく言うことだが、彼岸という声を聞くと、ホツと溜息ためいきが出る。五カ月の余に渡る長い冬を漸く通り越したという気がする。その頃まで枯葉の落ちずにいる榭かしわ、堅い大きな蕾を持って雪の中で辛抱し通したような石楠木しやくなき、一つとして過ぎ行く季節の記念でないものは無い。

私達が学校の教室の窓から見える桜の樹は、幹にも枝にも紅い艶つやを持って来た。家へ帰って庭を眺めると、土塀どべいに映る林檎りんごや柿こかげの樹影は何時まで見ても飽きないほど面白のきばがある。暖くなつた気候のために化生した羽虫が早や軒端のきばに群を成す。私は君に

雑草のことを話したが、三月の石垣の間には、いたち草、小豆草、あずき蓬、よもぎ蛇ぐさ、へび人参草、嫁菜、大なずな、小なずな、その他数え切れないほどの草の種類が頭を持ち上げているのを見る。私は又三月の二十六日に石垣の上にある土の中に白い小さな「なずな」の花と、紫の斑ふのある名も知らない草の小さな花とを見つけた。それがこの山の上で見つけた第一の花だ。

山上の春

貯えた野菜は尽き、葱ねぎ、馬鈴薯じゃがいもの類まで乏しくなり、そうかと言つて新しい野菜が取れるには間があるという頃は、毎朝々々

若布わかめの味噌汁みそじるでも吸うより外に仕方の無い時がある。春雨あがりの朝などに、軒づたいに土壁を匍はう青い煙を眺めると、好い陽気に成つて来たとは思うが、食物たべものの乏しいには閉口する。復た油臭い凍豆腐しみ豆腐かと思うと、あの黄色いやつが壁に釣されたのを見てもウンザリする。淡雪の後の道をびしょびしょ歩みながら、
 「草餅くさもちはいりませんか」と呼んで来る女の声を聞きつけるのは嬉しい。

三月の末か四月のはじめあたりに、君の住む都会の方へ出掛けて、それからこの山の上へ引返して来る時ほど気候の相違を感じずるものは無い。東京では桜の時分に、汽車で上州辺を通ると梅が咲いていて、碓氷峠うすいとうげを一つ越せば軽井沢はまだ冬景色だ。私は

この春の遅い山の上を見た眼で、武蔵野むさしのの名残なごりを汽車の窓から眺めて来ると、「アア柔かい雨が降るナア」とそう思わない訳には行かない。でも軽井沢ほど小諸は寒くないので、汽車でここへやって来るに随つて、枯々な感じの残つた田畠の間には勢よく萌もえ出した麦が見られる。黄に枯れた麦の旧葉ふるはと青々とした新しい葉との混つたのも、離れて見るとナカナカ好いものだ。

四月の十五日頃ころから、私達は花ざかりの世界を擅ほしいままに楽しむことが出来る。それまで堪こらえていたような梅が一時に開く。梅に続いて直ぐ桜、桜すももあんずから李ぐみ、杏、菜菔なづななどの花が白く私達の周囲に咲き乱れる。台所の戸を開けても庭へ出掛けて行つても花の香気に満ち溢あふれていないところは無い。懐古園しろうあとの城址しろあへでも生徒を連れて行

「千曲川のスケッチ」奥書

このスケッチは長いこと発表しないで置いたものであった。まだこの外にもわたしがあの信濃しなのの山の上でつくったスケッチは少なくなかったが、人に示すべきものでもなかった。その中から年若い人達の読み物に適しそうなもののみを選び出し、更にそれを書き改めたりなぞして、明治の末の年から大正のはじめへかけ当時西村渚しよざん山君が編輯へんしゅうしている博文館の雑誌「中学世界」に毎月連載した。「千曲川ちくまがわのスケッチ」と題したのもその時であった。大正一年の冬、佐久良書房さくらから一卷として出版したが、

それが小冊子にまとめてみた最初の時であった。

実際私が小諸こもろに行つて、饑え渴かわいた旅人のように山を望んだ朝から、あの白雪の残つた遠い山々——浅間、牙齒ぎっばのような山続き、陰影の多い谷々、古い崩壊の跡、それから淡い煙のような山巔さんてんの雲の群、すべてそれらのものが朝の光を帯びて私の眼に映つた時から、私はもう以前の自分ではないような気がしました。何んとなく私の内部には別のものが始まつたような気がしました。

これは後になつてからの自分の回顧であるが、それほどわたしも新しい渴望を感じていた。自分の第四の詩集を出した頃、わたし

しはもつと事物を正しく見ることを学ぼうと思ひ立つた。この心からの要求はかなりはげしかったので、そのためにわたしは三年近くも黙して暮すようになり、いつ始めるともなくこんなスケッチを始め、これを手帳に書きつけることを自分の日課のようにした。ちようどわたしと前後して小諸へ来た水彩画家三宅克巳君が袋町というところに新家庭をつくつて一年ばかり住んでおられ、余暇には小諸義塾の生徒をも教えに通われた。同君の画業は小諸時代に大に進み、白馬会の展覧会に出した「朝」の図なども懐古園附近の松林を描いたもののように覚えている。わたしは同君に頼んで画家の用いるような三脚を手に入れ、時にはそれを野外へ持ち出して、日に日に新しい自然から学ぶ心を養おうとしたこと

もある。浅間山麓さんろくの高原と、焼石と、砂と、烈風の中からこんなスケッチが生れた。

過ぎ去った日のことをすこしここに書きつけてみる。わたしたちの古いふる「文学界」、あの同人の仕事もわたしが仙台から東京の方へ引き返す頃にはすでに終りを告げたが、五年ばかりも続いた仕事かえが今日になって反つて意外な人々に認められ、若いロマンチックと呼ばれる声をすら聞きつける。今日からあの時代を振り返ってみたら、それも謂いわれのあることであろう。いかに言つてもわたしたちは踏み出したばかりで、経験にも乏しく、殊ことに自分なぞは当時を追想する度たびに冷汗ひやあせの出るようなことばかり。それにし

ても、わたしたちの弱点は歴史精神に欠けていたことであつた。もしその精神に欠けるところがなかつたなら、自国にある古典の追求にも、西欧ルネツサンスの追求にも、あるいはもつと深く行き得たであろう。平田禿とくぼく木君も言うように、上田敏君は「文学界」が生んだ唯一の学者である。その上田君の学者的態度を以てもつしてもこの国独自の希臘ギリシヤ研究を残されるところまで行かなかつたのは惜しい。西欧ルネツサンスに行く道は、希臘に通ずる道であるから、当然上田君のような学者にはその準備もあつたらう。しかし同君はそちらの方に深入りしないで、近代象徴詩の紹介やほんやく翻訳に歩みを転ぜられたように思われる。

このスケッチをつくっていた頃、わたしは東京の岡野知十君から俳諧雑誌「半面」の寄贈を受けたことがあった。その新刊の号に斎藤緑^{りよくう}雨君の寄せた文章が出ている。緑雨君の筆はわたしのことにも言い及んである。

「彼も今では北佐久郡の居^{いそろう}候、山猿^{やまざる}にしてはちと色が白過ぎるまで」

緑雨君はこういう調子の人であった。うまいとも、辛辣^{しんらつ}とも言ってみようのない、こんな言い廻しにかけて当時同君の右に出るものはなかった。しかし、東京の知人等からも離れて来ているわたしに取っては、おそらくそれが最後に聴きつけた緑雨君の声であったように思う。わたしは文学の上のことで直接に同君から

学んだものとても殆んどないのであるが、しかし世間智に富んだ同君からいろいろ啓発されたことは少くなかった。鷗外おうがい、思軒しけん、露伴、紅葉、その他諸家の消息などをよくわたしに語って聞かせたのも同君であつた。同君歿後ぼつごに、馬場孤蝶こちよう君は交遊の日のことを追想して、こんなに亡くなつた後になつてよく思い出すところを見ると、やはりあの男には人と異なつたところがあつたと見えると言われたのも同感だ。

紅葉山人の死を小諸の方にいて聞いた頃のこととも忘れがたい。わたしは一年に一度ぐらいいしか東京の友人を訪ねる機会もなかつたから、したがって諸先輩の消息を知ることまれも稀になつて行つたが、おそらく鷗外漁史などはあの通り休息することを知らないよ

うな人だから、当時その書齋とする 観潮楼かんちようろうの窓から、文学の
推し移りなどを心静かに、注意深くも眺めておられたかと思う。
そして 柳浪りゆうろう、天外、風葉等の作者の新作にも注意し、又、後
進のものようやの成長をも見まもっていてくれたろうと思う。明治文学
も漸く一変すべき時に向つて来て、誰もが次の時代のために支度
を始めたのも、明治三十年代であつたと言つていい。

旧いものを毀こわそうとするのは無駄な骨折だ。ほんとうに自分等
が新しくなることが出来れば、旧いものは既に毀れている。これ
が仙台以来のわたしの信条であつた。来るべき時代のために支度
するということも、わたしに取つては自分等を新しくするという

ことに外ならない。このわたしの前には次第に広い世界が展^{ひら}けて行つた。不自由な田舎教師の身には好い書物を手に入れることも容易ではなかつたが、長く心掛けるうちには願^{かな}いも叶い、それらの書物からも毎日のように新しいことを学んだ。わたしはダルウインが「種の起原」や「人間と動物の表情」なぞのさかんな自然研究の精神に動かされ、心理学者サレエの児童研究にも動かされた。その時になつてみると、いつの間にかわたしの書架も面目を改め、近代の詩書がそこに並んでいるばかりでなく、英訳で読める欧州大陸の小説や戯曲の類が一冊ずつ順にふえた。トルストイの「コサツクス」や「アンナ・カレニナ」、ドストイエフスキイの「罪と罰」に「シベリアの記」、フロオベルの「ボヴァリイ夫

人」、それにイプセンの「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」はわたしの愛読書になった。一体、わたしが初めてトルストイの著作に接したのは、その小説ではなく、明治学院の古い学窓を出た翌年かに巖いわもと本善治氏夫妻の蔵書の中に見つけた英訳の「労働」と題する一小冊子であつたが、そんな記憶があるだけでも旧知にめぐりあう思いをした上に、その正しい描写には心をひかれ、千曲川の川上にあたる高原地の方へ出掛けた折なぞ、トルストイ作中の人物をいろいろ想像したり、見ぬ高コーカサス加索の地方へまで思いを馳はせたりしたものであつた。当時わたしは横浜のケリイという店からおもに洋書を求めていたが、その店から送り届けてくれたバルザックの小説で、英訳の「土」も長くわたしの心に残つた。

不思議にもそれらの近代文学に親しんでみるものが反つて古くから自分等の国にあるものの読み直しをわたしに教えた。あの澆はつら刺つとして人に迫るような「枕の草紙」に多くの学ぶべきものがあるのを発見したのも、その時であつた。

今から明治二十年代を振り返つてみることは、私に取つて自己等の青年時代を振り返つてみることであるが、あの鷗外漁史などが「舞姫」の作によつて文学の舞台に登場せられたのは二十年代も早い頃のことであり、「新著百種」に「文づかい」が出たのも二十四年の頃であつたと思う。だんだん時がたつた後になつてみると、当時の事情や空気がそうはつきりと伝わらなくなり、多く

の人に残る記憶も前後して朦朧もうろうとしたものとなり勝ちであるが、明治の文学らしい文学はあの二十年代にはじまったと言っている。今日明治文学として残っているものの一半は殆どほとんあの十年間に動いた人達の仕事であるのを見ても、明治二十年代は筆執り物書くものが一斉に進むことの出来たような、若々しい一時代であったことが思われる。これには種々な理由があろう。当時は新日本ということが多くなるとよって考えられ、新しい作者を求めるとよって要求の強かったことも、その理由の一つとして数えられよう。長谷川二葉亭はせがわふたばていの「浮雲」があれほどの新しさを私達の胸中に喚びよ起したのも、その要求をみたし得たからであって、あれほど鮮かあざやに当時を反映し、当時を批評した作品もめずらしかつた。一方に

はまた、鷗外漁史のような人があつて、レツシングの「俘とりこ」、ア
ンデルセンの「即興詩人」、その他の名訳をつぎつぎに紹介せら
れたことも、当時の文学の標準を高める上に、少からぬ影響を多
くの作者に与えた。「水沫集みなわしゆう」一卷は、青春の書というにはあ
まり老成なような気もするが、明治二十年代の早い春はあの集の
どの頁ページにも残っている。

もし、明治二十年代の文学があつた調子で進むことが出来たら、
その発達には見るべきものがあつたらうに、それが最初のような
純粹を失い、新鮮を失うようになって行つたに就いては、種々な
原因がなくてはならない。

ともあれ、当時発達の途上にあつた言文一致の基礎工事がまだ

まだ不十分なものであったことも争われない。紅葉山人のような作者ですら雅俗折衷の文体と言文一致の間を往来した。何と言つてもあの頃は、古くからある文章の約束がまだ重く残つて、言葉の感情とか、その陰影とかの自然な流露を妨げていた。この状態はどうしても行き詰る。そこでだんだん変化と自由とを求めるようになって行つて、これまで物を書いていた作者達も今までの表現の方法では、やりきれなくなつて行つたかと思う。私は斉藤緑雨君のような頭の好い人がそういう点で苦しみぬいたことを知っている。同君も文章そのものの苦勞が大き過ぎて、「油地獄」や「かくれんぼ」に見せたような作者としての天稟てんびんを十分に延ばし切ることが出来なかつたのではなからうかと思う。

その後、鷗外漁史はめずらしく創作の筆を執って、「そめちがえ」一篇を「新小説」誌上に発表した。私はそれを読んで漁史のような人の上にもある一転機の来たことを感じた。「そめちがえ」の碎けた題目が示すように、漁史は最早あの「文づかい」や「うたかたの記」に見るような高い調子で押し通そうとする人ではなかつたらしい。その頃には、透谷君や一葉女史の短い活動の時はすでに過ぎ去り、柳浪にはやや早く、蝸かぎゅうあんしゆ牛庵主は「新羽は衣物語」を書き、紅葉山人は「金色夜叉こんじきやしや」を書くほどの熟した創作境に達している。鷗外漁史の「そめちがえ」を出されたころに明治二十年代のはじめを顧みると、文壇は実に隔世の感があった。十年の月日は明治の文学者に取って短い時ではなかつた。

おそらく二十年代の末から三十年代のはじめへかけては、明治文学者の生涯の中でも特に動きのある時代で、あの緑雨君が鴉外漁史や幸田露伴氏等との交遊のあったのもあの頃であり、諸先輩が新進作家の作品に対して合評会などを思い立ったのもあの時代であつたかと思う。

思えば、明治文学の早い開拓者の多くは、ヨーロッパ欧羅巴からの文学を取り入れる上に就いて、いず何れも要領の好い人達であつた。そこに自国の特色がある。これは徳川時代の文学者が遺産を受けついでだからでもあり、しな支那文学の長い素養からも来ていると思う。ともあれ、他の当時の文学者の多くがまだ十八世紀の英吉利文学をイギリス目標としていた中で、ドイツ独逸本国の方から十九世紀にあるものを感じ

知して帰つて来たところに鷗外漁史の強味があつた。その人自身ですら自国に芽ぐんで来た言文一致の試みを探りあげるにちゆうち躊躇ちゆうちしていたほどの時代を考えると、山田美妙、長谷川二葉亭二氏などの眼のつけかたはさすがに早かつたと思われる。

私は明治の新しい文学と、言文一致の発達とを切り離しては考へられないもので、いろいろの先輩が歩いて来た道を考へても、そこへ持つて行くのが一番の近道だと思う。我々の書くものが、古い文章の約束や云い廻しその他から、解き放たれて、今日の言文一致にまで達した事實は、決してあとから考へるほど無造作なものでない。先ず文学上の試みから始まつて、それが社会全般にひろまつて行き、新聞の論説から、科学上の記述、さては各人の

やり取りする手紙、児童の作文にまで及んで来たに就いてはかなり長い年月がかかったことを思つてみるがいい。何んと云つても徳川時代に俳諧や浄瑠璃じようるりの作者があらわれて縦横に平談俗語を駆使し、言葉の世界に新しい光を投げ入れたこと。それからあの国学者が万葉、古事記などを探求して、それまで暗いところにあつた古い言葉の世界を今一度明るみへ持ち出したこと。この二つの大きな仕事と共に、明治年代に入つて言文一致の創設とその発達に力を添えた人々の骨折と云うものは、文学の根こんてい柢ていに横たわる基礎工事であつたと私には思われる。わたしがこんなスケッチをつくるかたわら、言文一致の研究をこころぎすようになったのも、一朝一夕に思い立ったことではなかつた。

到頭、わたしは七年も山の上で暮した。その間には、小山内おさないかお薫君る、有島生馬君いくま、青木繁君しげる、田山花袋君、それから柳田国男君を馬場裏の家に迎えた日のことも忘れがたい。わたしはよく小諸義塾の鮫島さめじま理学士や水彩画家丸山晚霞君ばんかと連れ立ち、学校の生徒等と一緒に千曲川の上流から下流の方までも旅行に出掛けた。このスケッチは、いろいろの意味で思い出の多い小諸生活の形見である。

青空文庫情報

底本：「千曲川のスケッチ」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年4月20日発行

1970（昭和45）年5月5日25刷改版

1998（平成10）年8月25日68刷

入力：割子田数哉

校正：松永正敏

2001年1月9日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千曲川のスケッチ

島崎藤村

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>